

シンポジウム

山元遺跡は何を語るのか

—邪馬台国前夜の村上—

記録集

2018

村上市教育委員会



写真1 山元遺跡から南西方向を望む



小川忠博氏撮影

写真2 山元遺跡出土の鉄器・青銅器・ガラス小玉

序

山元遺跡は発掘調査によって弥生時代の貴重な遺跡であることが明らかになり、平成28年10月3日、国の史跡に指定されました。昭和53年指定の平林城跡ひらばやしじょうあと、平成5年指定の村上城跡むらかみじょうあとに続く、本市では3件目の国指定史跡であり、戦国時代や江戸時代の指定物件に、新たに弥生時代の史跡が加わることになりました。このように多彩な時代の国指定史跡があるということは、村上の地が古くから特別な場所であったということに他なりません。

山元遺跡は邪馬台国やまたいこくの卑弥呼ひみこが活躍する少し前の時代の遺跡です。そして、邪馬台国があったとされる西日本だけでなく北方の文物も遺跡から発見されています。なぜ、山元遺跡からそのようなものが発見されたのか、その理由を解明し市民皆様にご紹介したく、弥生時代研究のエキスパートである5名の講師の方々にお話しいただきました。また、講演後のパネルディスカッションでは、山元遺跡の本質に迫っていただくと同時に、これからの活用についてもご意見を頂戴しました。

本書は、シンポジウムでの講師皆様方の貴重なご発言を記録したものです。今後はシンポジウムで提言いただいた内容を参考とし、市民の皆様方と一緒に山元遺跡の活用を行って参りたいと思います。

最後になりましたが、本事業の実施にあたり、多大なご協力を賜りました講師の方々、並びに関係機関に厚く御礼申し上げます。

平成30年3月

村上市教育委員会

教育長 遠藤友春

例 言

- 1 本書は、村上市教育委員会が平成28年11月20日に村上市立神納東小学校で開催した「シンポジウム山元遺跡は何を語るのか―邪馬台国前夜の村上一」の記録集である。
- 2 シンポジウム及び記録集作成業務（以下、「本事業」）は国庫補助事業（「地域の特性を活かした史跡等総合活用支援推進事業」）を受けており、本事業に係る経費の内訳は国庫補助金50%、市一般財源50%である。
- 3 本事業の企画、調整、実施は村上市教育委員会生涯学習課文化行政推進室が行った。
- 4 本書中の用語については統一せず、各講師の使用用語を掲載した（筒形銅製品＝筒形青銅器、ムラ＝むら＝村、など）。
- 5 本書では、講師の敬称を省略した。
- 6 本書で使用した写真等については、下記の所蔵者から承諾を得、それぞれのキャプションに所蔵者名を付した。

芦屋市教育委員会

淡路市教育委員会

加美町教育委員会

神戸市教育委員会

宗像市教育委員会

南種子町教育委員会

シンポジウム

山元遺跡は何を語るのか—邪馬台国前夜の村上一— 記録集

目 次

口絵
序
例言

報 告「山元遺跡発掘調査の成果」(吉井雅勇) 1

基調講演Ⅰ「新潟県内の高地性集落」(滝沢規朗) 11

基調講演Ⅱ「山元遺跡と倭国大乱の時代」(石川日出志) 19

基調講演Ⅲ「山元遺跡と北方世界」(小林 克) 25

基調講演Ⅳ「顕微鏡から山元遺跡を見る」(沢田 敦) 37

基調講演Ⅴ「市民にとっての保存と活用」(禰宜田佳男) 43

パネルディスカッション 53

シンポジウム参加者アンケート集計結果 62



(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団撮影



小川忠博氏撮影

シンポジウム

山元遺跡は何を語るのか —邪馬台国前夜の村上—

開催日 平成28年 11月20日(日) 9:30~15:00 9時開場

会場 村上市立 神納東小学校体育館 (村上市上助淵1900)

日本海東北自動車道村上瀬波温泉ICから2分

※入場無料、事前申し込み必要/10月3日~(電話・ファックス・電子メール)

今から1,800~1,900年前、西国に邪馬台国ができる以前、村上の地に「高地性環濠集落」を営んだ人々がいました。最新の研究から遺跡の重要性を学び、今後の保存活用について考えます。

報告

「山元遺跡発掘調査の成果」

村上市教育委員会生涯学習課 吉井雅勇

基調講演Ⅰ

「新潟県内の高地性集落」

滝沢規朗氏(新潟県教育庁文化行政課副参事)

基調講演Ⅱ

「山元遺跡と倭国大乱の時代」

石川日出志氏(明治大学文学部教授)

基調講演Ⅲ

「山元遺跡と北方世界」

小林 克氏(前秋田県埋蔵文化財センター所長)

基調講演Ⅳ

「顕微鏡から山元遺跡を見る」

沢田 敦氏(新潟県埋蔵文化財調査事業団課長代理)

基調講演Ⅴ

「市民にとっての保存と活用」

彌宜田佳男氏(文化庁記念物課主任文化財調査官)

■主催:村上市教育委員会 <http://www.city.murakami.lg.jp/>

■申し込み・問い合わせ先 〒958-0854 村上市田端町4-25 村上市教育情報センター内 文化行政推進室

電話:0254-53-7511 ファックス:0254-52-4133

電子メールアドレス:bunka-m@city.murakami.lg.jp

平成28年度国庫補助事業「地域の特徴ある埋蔵文化財活用事業」

報告「山元遺跡発掘調査の成果」

村上市教育委員会 吉井 雅勇

はじめに

おはようございます。山元遺跡の調査を担当しました村上市教育委員会の吉井と申します。本日のトップバッターとして、はじめに私の方から発掘調査によってわかった山元遺跡のお話をしたいと思います。

巻頭の写真1をご覧ください。これは、日本海沿岸東北自動車道の工事中の写真です。このように遺跡から南西方面を望むと、お天気のいい日は日本海の手まで見えるような、そういうロケーションです。そして、ここに立つと、なぜここに山元遺跡があったのかということがよくわかります。巻頭写真2は、68点のガラス小玉や鉄器、青銅器です。このような、これまで県北の地、村上にはないだろうと思われていた貴重なものが山元遺跡から発見されたのです。

1. 遺跡の発見と立地

この遺跡は、日本海東北自動車道の建設工事に先立って新潟県教育委員会が17年、18年に行った試し掘りで見つかった遺跡です。遺跡は、現在トンネルになっている、高速道路の村上瀬波温泉インターの新潟寄り丘陵上にあります。調査段階から日本海側最北の弥生時代高地性環濠集落とその重要性が認識され、関係機関、国土交通省のご理解のもと保存されました。

その後、村上市教育委員会が引き継ぎ、平成21、22、23年の3ヶ年にわたって、高速道路の周りも含めて遺跡の内容や範囲を確認するために、確認調査を実施しました。そして、その成果を報告書にまとめると同時に、文化庁並びに新潟県教育委員会のご指導を得ながら、関係機関・関係者の皆様方と協議を重ね、先月の10月3日に国の史跡に指定されました。

今ほどご紹介したように、山元遺跡は弥生時代の高地性環濠集落ということで、調査段階からとても注目された遺跡です。はじめに、「高地性」について簡単にご紹介したいと思います。第1図の写真は、高速道路ができる前、新潟県教育委員会が調査した時に撮った写真を借用したもので、調査前はこのような状況でした。標高は約40mで、周りの田んぼよりも36、37m高い所にあります。これから講演いただき滝沢さんが高地性集落についてまとめられていて、それによると目安として30mという標高差、遺跡と周りの田んぼなど低い所との差が30m以上あるものを新潟県では「高地性」とし、そこが人々が住んだ集落の場合、「高地性集落」と呼びます。

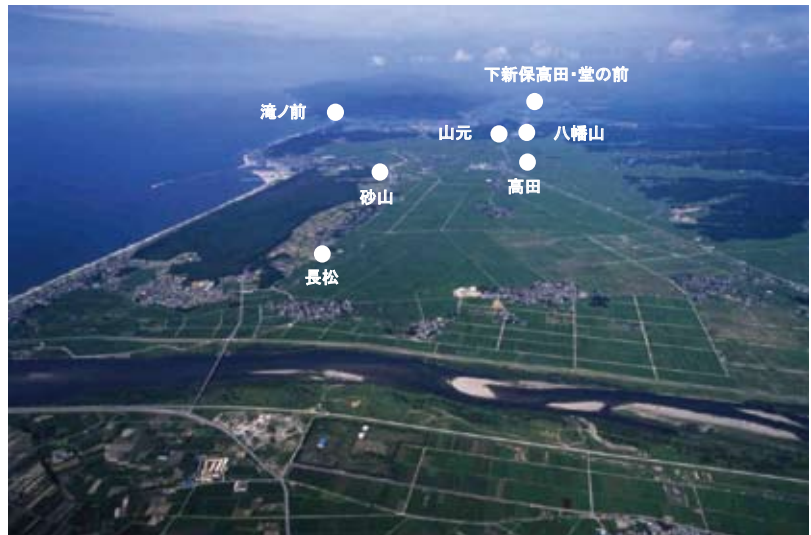
第2図は、遺跡南側の胎内市方面から望んだもので、写真手前の河川は荒川、奥に山元遺跡があります。中越付近から北に広がる新潟平野は、村上の、ちょうど山元遺跡がある丘陵で途切れます。そのようなところに山元遺跡はあります。この写真には弥生時代の遺跡を点で落としてあります。これを見てわかるように、村上市を含めた新潟県の弥生時代遺跡は、現在田んぼになっている低地、海岸線に沿って形成された砂丘、山元遺跡のような丘陵、そして、段丘や台地にあります。例えば滝ノ前遺跡。昔、村上市には岩ヶ崎古代ランドという施設があって、実はそこが滝ノ前遺跡なの



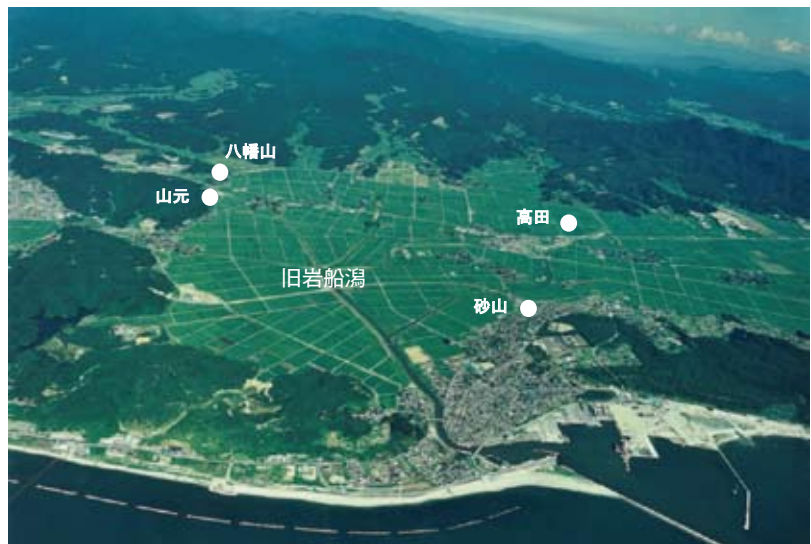
第1図 遺跡遠景／南西から（新潟県教委ほか2009）

ですが、海に面した海岸段丘で、とても見晴らしのよいところです。このように多様な場所に人々が住むという、これまでの時代とはちょっと異なる遺跡の立地が認められるようになります。これがこの地域、また、新潟県の弥生時代遺跡の特徴のひとつといえます。

第3図は日本海から撮した写真です。山元遺跡の眼下に広がる低地には、昔、岩船潟いわふねがたがありました。岩船潟は、江戸時代後期から干拓事業が始まり、明治の終わり頃にはその姿はなくなりました。戦国時代の終わり、慶長二年(1597)の「越後国瀬波郡えちごのくに せなみ ぐん えす絵図」にはその姿が描かれています。しかし、それ以前はいつから潟があったのかということはわかっていません。山元遺跡があった時期に岩船潟があったのかなかったのか、はっきりしたことはわかりませんが、おそらく規模が小さいながらも潟は存在し、すぐ近くには日本海が広がり、内陸にはそれらをつなぐ小さい河川がいくつも流れていたと推測されます。このような立地と、山元遺跡から各地の多種多様な文物が見つかることから、海や川を使った水運を利用していた集落であることは間違いのないと思います。



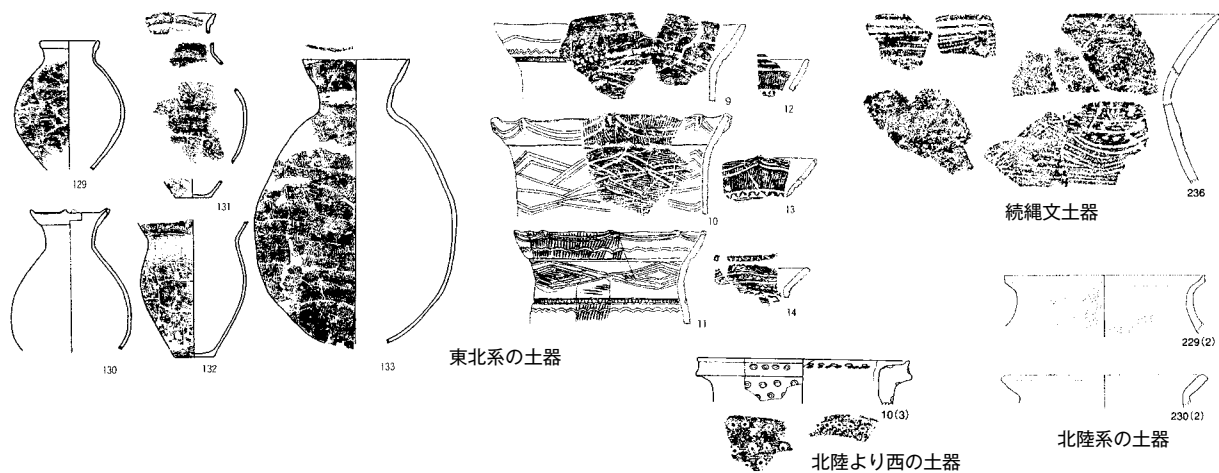
第2図 空中写真 周辺の弥生遺跡／南西から (村上市教委2013)



第3図 空中写真 旧岩船潟周辺の弥生遺跡／西から (村上市所蔵)

2. 遺跡の時代と担い手

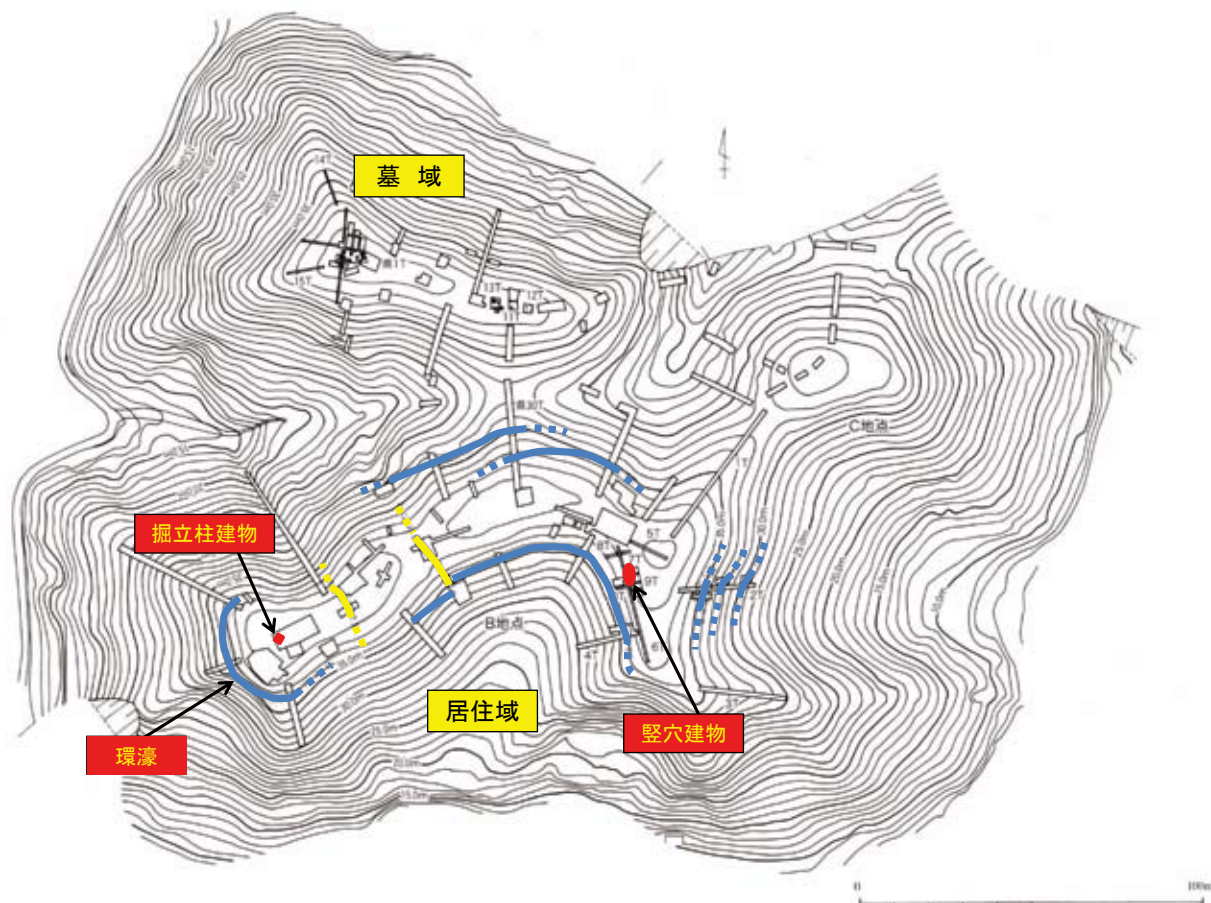
どういうところに弥生時代の遺跡があるのかというお話をしました。次に、弥生時代とはどういう時代、山元遺跡にはどういう人たちがいたのかということをお話したいと思います。弥生時代は、東日本では前期、中期、後期と3時期に分けられますが、山元遺跡では、その真ん中の終わりぐらいに人が住み始めて、一番最盛期の頃は弥生時代後期、年代は大体1100年前、その頃を中心として山元遺跡が栄えていました。どういう人たちが住んでいたのか、山元遺跡では、弥生時代の中後葉は東北系と北陸系の土器が発見されています。どうしてわかるのかというと、そのような地域で流行していた文様の土器が見つかるからです。そして、最盛期の弥生時代後期になると、8割から9割は東北系の土器で占められます。東北の土器というのは、在地、もともとここに住んでいた人々が日常的に使っていた土器です。その他にも北陸系の土器や北海道系の土器、いわゆる統縄文土器ぞくじょうもんが少量ながら見つかっています(第4図)。つまり、山元遺跡は、村上を含めた周辺地域に住んでいた人たちが高台に築いたムラで、人々は西や北の人々と交流していたということが、発見された土器からわかりました。



第4図 山元遺跡から発見された各地の土器（新潟県教委ほか2009・村上市教委2013）から作成

3. 居住域の調査

先ほど簡単に遺跡に立地についてお話しましたが、第5図に示した地形と遺構配置を見ながら、もう少し詳しく説明したいと思います。丘陵上にある遺跡の中央には、標高差6～7mの小さい谷が入っています。谷の北側（A地点）は墓域、お墓が集中するところで、住居などの建物跡は見つかっていません。それから、谷の南側（B地点）は居住域で、建物跡が確認されました。谷の北東側はC地点と呼んでいますが、少量の土器のかけらと、柱の穴が見つかりましたが、はっきりと人が住んだ痕跡は認められませんでした。このように、遺跡は小さな谷によって3つの敷地に分かれています。



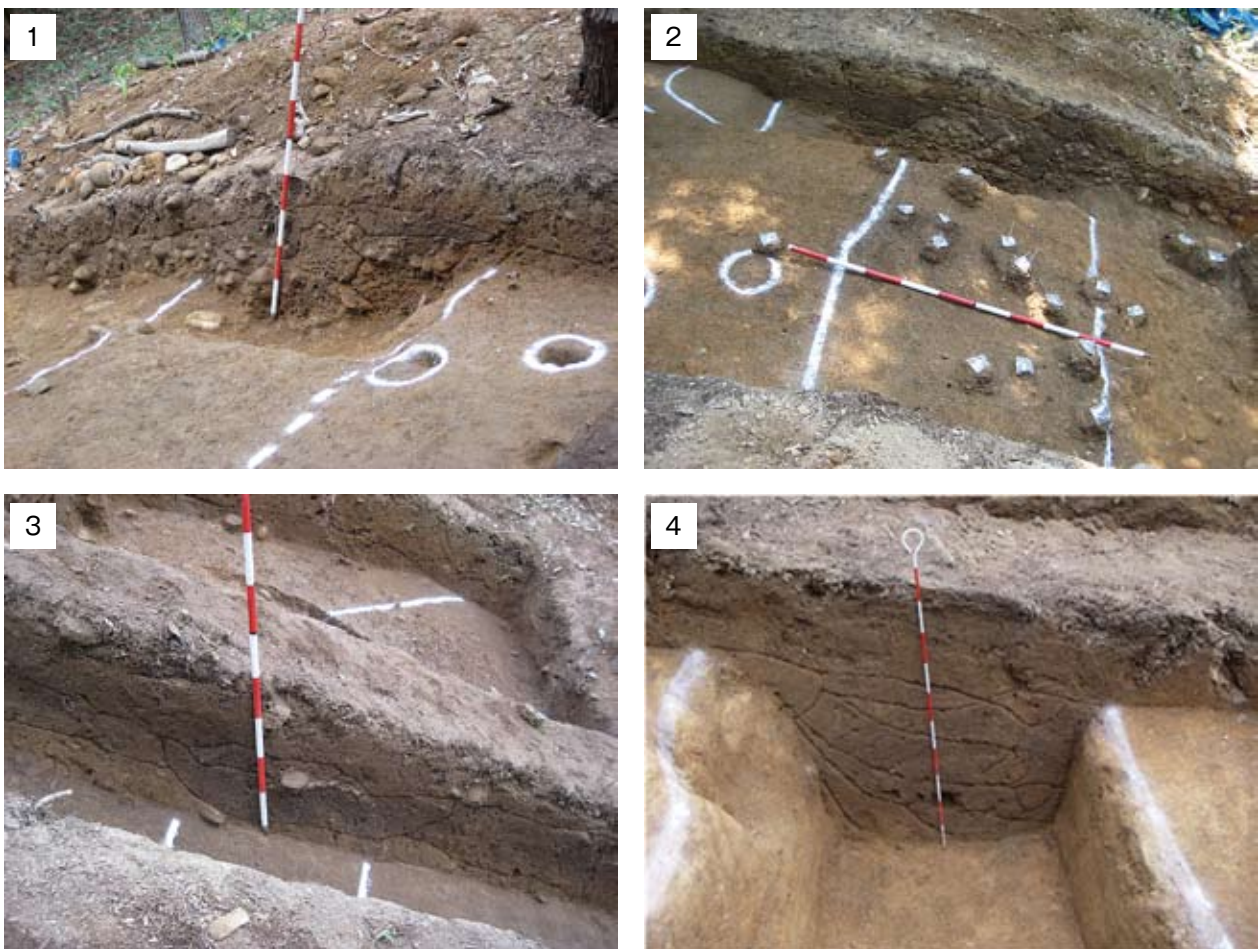
第5図 遺跡全体図（村上市教委2013）を改変

はじめに、人々が住んでいた居住域からご紹介したいと思います。居住域には、途切れ途切れの環濠が巡ります。第6図の1は、濠3の断面写真で、写し込んでいる赤白のポールは2mです。見てわかるとおり濠はそれほど大きくありません。2は濠3から見つかった土器の出土状況、3は濠6からまともに発見された土器の出土状況です。これら土器の文様などの特徴からその系統や年代を調べ、この土器はどの地域のものなのか、いつ頃の時代に作られたものなのかということがわかり、その土器が埋まっている濠はいつ頃埋まったのかということが推測されます。そういう手順をふんで遺跡の年代を決めます。

何でそもそも高いところにムラをつくり、濠を巡らせたのかというのは、当時、西日本では戦争があったと言われていて、その地域ではムラを守る手段として、敵の侵入を防ぐために高いところにムラを構え、濠を巡らせました。例えば、村上市で言えば村上城や平林城むらかみじょう、ひらばやしじょうのように、敵の侵入を防ぐために高いところに堀や土塁をつくった戦国時代の山城と同じ理由です。ところが、山元遺跡のように濠があちこち途切れしていたら、どこからも攻めて来られるわけですね。また、濠4の写真(4)にあるピンポールは長さ1mですが、この程度のものなら簡単に飛び越えられる、そのようなつくりなんです。

これは一体どういうことなのか。その答えは、一つの可能性として、西の人が住んだムラのつくりをマネているのではないかと。ただし、濠の規模は小さいのですが、同じ斜面でも斜面の角度が変わるところ、角度が急になるところ、傾斜変換点につくっている、そのような傾向があります。傾斜変換点にある濠では谷側の傾斜が急なために、小規模でも濠の中から出ることは難しくなります。このことから、あながちデタラメにつくっているわけではなく、多少は防御の意識はあったかもしれないということも言えます。

次に建物のお話をしたいと思います。山元遺跡は、新潟県教育委員会の発掘調査で発見され、続いて村上市教育委員会が発掘しました。いずれの調査も遺跡を丸々全部掘ってしまうものではなく、県の調査で



第6図 山元遺跡の環濠 1～3は(村上市教委2013)、4は(新潟県教委ほか2009)

は遺跡があるかどうかを確かめるために部分的に発掘しました。その結果、予想もしなかった重要な遺跡が発見されたのです。そこからは調査目的が変わり、遺跡の内容を明らかにするため、遺跡を残すために県教育委員会、市教育委員会が部分的な調査を継続的に行いました。そのために、山元遺跡には全部で何軒の建物があったのかということとはわかっていません。ただし、部分的な調査でも、^{たてあな}堅穴建物と^{ほったてばしら}掘立柱建物の2種類があったことはわかりました。堅穴建物とは、地面を広く掘りくぼめて床として、そこに柱や火を焚く^ろ炉をつくり、上屋をかけたものです。山元遺跡では、かなり斜面に近い端から見つかりました（第7図）。



第7図 堅穴建物／南から（村上市教委2013）

残念ながら、斜面側は半分消失していました。調査では、^{じしょうろ}地床炉と呼ばれる、いろりですね、床の上に直接火を焚いた跡や、その周りからは硬く締まった床面、これは人が生活の中で踏み固めた痕跡なのですが、確認されました。これらのことから住居、堅穴建物と判断しました。ただですね、ご覧になるとわかるように、柱がたくさん見つかっているのですが、これらがきれいに並ばなくて、どの柱がこの堅穴建物に伴うものか判断しかねる状況でした。余談ですが、この建物は床が谷側のほうに傾いています。もちろん、この状態では人は住めないのです、もしかしたら、人々が住まなくなってから、地震や何かの変動があって傾いたのかなと考えています。

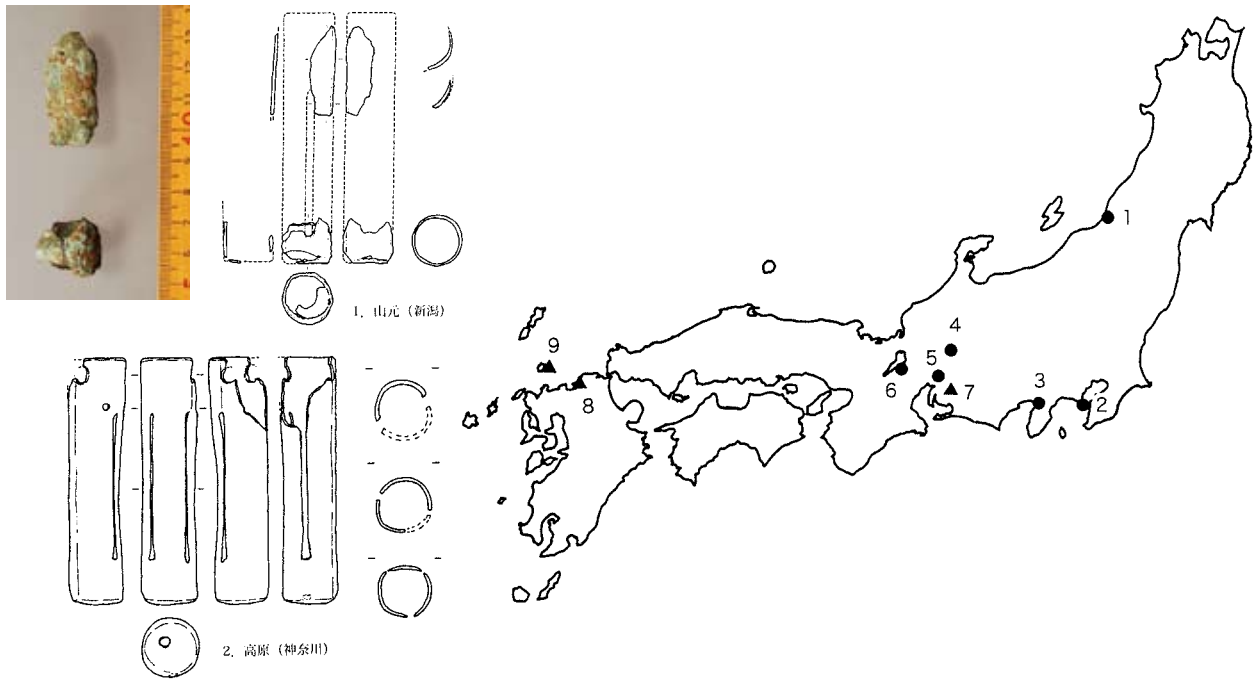
4. 墓域の調査

墓域は、谷の北側、長さ60m、最大幅10mの小規模な丘陵尾根上にあります。墓域の中心は墓域北西部尾根の最高点にあります。第8図は、墓域の中心部の写真です。ここを調査すると、お墓が続々と見つかりました。ちなみに、居住域の周りには環濠が巡っていましたが、墓域には環濠は見られません。

発掘調査によって二種類のお墓があることがわかりました。一つは、土に穴を掘って遺体を埋葬する^ど土坑墓^{こうぼ}というお墓です。そして、この土坑墓の調査から興味深いことがわかりました。村上市は、平成21年から調査を始めたわけですが、最初の年に、本当に小さい長さ3.5cmほどで若干湾曲する金属の破片が発見されました。よく見てみると、^{ろくしょう}緑青に覆われており、「これ^{せいどうき}青銅器じゃないか！」と。しかし、見つかった深さはとても浅く、表面の落ち葉のすぐ下の黒土だったのです。この時点では、弥生時代の青銅器かどうかは不明でしたが、もし弥生時代のものであれば大発見となるため、慎重を帰し、その帰属年代が明ら



第8図 墓域中心地／左：西から、右：東から（村上市教委2013）



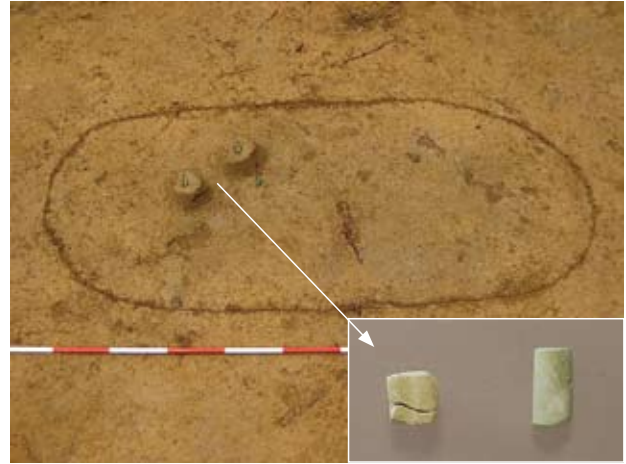
第9図 弥生時代筒形銅製品出土遺跡分布図 (村上市教委2013) から作成

かになるまで墓域の調査は中断しました。発掘調査とは別に、この青銅器の作られた時代を決めるために、専門の先生に分析していただきました。青銅器は銅にスズや鉛を混ぜた合金です。そのために中に含まれている鉛を分析すると、どこの鉛、鉛の産地がわかります。「鉛同位体比分析」といいますが、それを行ったところ、中国の河北産の鉛を使った日本国内で作った弥生時代の青銅器ということがわかりました。では、この青銅器は一体何に使ったものか。これは筒形銅製品といい、横須賀市の高原遺跡から完全形のもので出土しています。大きさは10cm程度で、形は筒状で片方は閉じています。閉じているところには小さな窓がついていて、脇には長い窓、透かしがあります。使用方法はわかっていませんが、その後の時代、古墳時代によく似た青銅器があり、それは槍の土を突くところ、石づきといって槍の下の部分に装着したものではないとか、杖の上につけて何か物を入れて鳴らした威信具じゃないだろうかとか、諸説あります。いずれにしても希少なもので、発掘した時点で全国9例目でした。その後、近畿地方などで見つかると、現在11例あると言われています。これらは、北九州、近畿地方、東海地方、南関東にまとまっています。そこから飛び地のよう、新潟県の北部、村上の山元遺跡から見つかったわけです(第9図)。私たちがどれだけ驚いたか、おわかりになっていただけたと思います。

墓域の調査中断を経て、翌年調査を再開し、青銅器の出土した場所の周辺をていねいに掘り下げていくと、今度はたくさんの石のカケラがまとまって出てきました。これは専門用語で剥片と言います。石器を作る時には、石の塊、これを石核と呼びますが、この石核から剥片を剥ぎ取り、それを細かく加工して矢じりや槍などを作ります。見つかった剥片を水洗いしてよく見てみると、これらは同じ模様、つまり同じ石、石核から打ち欠かれた剥片で、その石核の種類も数個体あることがわかりました。後で講演される沢田さんが顕微鏡を使って細かく分析したので、詳しくはご講演をお聞きいただきたいのですが、結論だけ先にご紹介すると、例えばある石核からとられた剥片は木を切ったり削ったりしたもの、別の石核の剥片は骨とか角を加工したものと、石によって剥片の使われ方が異なる可能性が高いことがわかりました。ほかにも、割れているガラス小玉数点が、上の方、黒土に近いところから見つかりました。更にもう少し掘り下げると、今度は同じ石でつくったと思われる矢じりが数点、お墓(1号土坑墓)の下の方からまとまって出てきました(第10図)。また、別の墓(5号土坑墓)では、上の方からネックレスにした装飾品であ



第10図 1号土坑墓と矢じり (村上市教委2013) から作成



第11図 5号土坑墓と管玉 (村上市教委2013) から作成

る管玉が割れた状態で出土しました(第11図)。冒頭で紹介したガラス小玉68点は県が調査した土坑墓SK1の下の方からまとめて発見されました(第12図)。

これは一体どういうことか。お墓の下から出ているということは、亡くなった人を埋葬するときと一緒に



第12図 SK1(土坑墓)とガラス小玉、右は埋設土器A(村上市教委2013)から作成

副葬したものと考えられます。それに対して、お墓の上の方からは壊れたガラス小玉とか、石核から打ち欠かれた剥片が出てきた。もしかしたら青銅器も壊れていたのかもしれない。そのように壊れたもの、割れたものが上から出てきて、完形品、破損していないものは下から出ている、ということがわかりました。

お墓のもう一方の種類は、地面に穴を掘って土器を埋める、埋設土器、埋甕、土器棺と呼ばれているもので、ここでは埋設土器と呼びます。村上市の調査では3箇所見つかり、現場で見つかった順にABCと名前を付けました。

埋設土器Aは、穴を掘って中に壺形の土器を逆さまにして置いたものです(第13図)。これが発見された場所は、先ほどご紹介したガラス小玉が68点まとまった土坑墓(SK1)の延長線上でした。調査当時、この土坑墓の範囲はわかっていませんでした。発掘調査では、土器や石器がどの層から発見されたかを記録します。そのため土層を常に確認できるようにセクションベルトと呼ばれる土手を残しながら調査するのですが、その土手が、埋設土器Aと土坑墓(SK1)の間に残っていたのです。もしガラス小玉が多量に副葬された土坑墓の中に埋設土器が置かれているとすれば、大変な発見です。しかし、当時はもう天気が時雨



第13図 埋設土器A、写真奥はSK1(村上市教委2013)

れる季節だったために、調査は次年度に延期しました。翌年の平成23年に調査を再開して、セクションベルトの土層記録をとった後、その一部を掘って見たところ、埋設土器は土坑墓中ではなく、それぞれ別の施設であることが判明しました（第12図）。と同時に、土坑墓（SK1）の範囲、平面の形もわかりました。長い楕円形で、片方の端がやや平らなんですね。そして、平らではない丸い方からガラス小玉68点がまとまって見つかっています。お墓の全体像がわかったので、まだ調査していない箇所をさらに半分だけ掘ってみました。何が出てくるのだろうかと期待に胸を膨らませて。ところが、ガラス小玉どころか何も出てこなくて、一見すると石か土器かわからないとても細かい破片が2点出たのみで、副葬品というか、お墓に供えたようなものは見つかりませんでした。以上のことから、ガラス小玉が頭とか、首にかけたものと仮定すれば、頭部の方向はガラス小玉が出土した平面が丸い方ではないかと考えられます。

次に埋設土器Bと名付けたもの、これも壺ですね。これは口を上に向けて埋められていましたが、上半部は残っていませんでした。しかし、残っていた底の部分から土器の内面にへばり付く状態で鉄剣が見つかりました（第14図矢印）。鉄剣といっても、大きさは長さ8.5cm、幅が1.6から2.4cm、厚さが2から3mm、錆びてはいるものの肉眼でも柄の方に目釘穴が確認できます（第15図）。使用していく中で何度も研ぎ直して小さくなったのか、それとも折れてしまって刃を付け替えたのかわかりませんが、いずれにしても、これは当時とても大事に使っていたものであることが分かります。そして、このように大切な、貴重なものを供えたことが想像できます。

最後にご紹介するのは埋設土器Cです。これら3つの埋設土器はそれぞれ特徴が異なります。埋設土器Cは、壺形土器の口の部分を上に向けて埋めたもので、底は丸く抜かれていました。これは偶然に底が抜けたのではなく、人為的に抜いたものです。そして、底のない土の部分には頁岩という石で作った矢じりが1点だけ供えてありました（第16図）。調査の過程では、土器の内外からたくさんの土器片が出土しました（第17図）。先程お話ししたように発掘調査では、どの土器片がどの層のどの場所から出てきたかという情報を記録します。埋設土器Cでも、たくさんの破片に対して1点ずつ1番から番号を付けて場所を確認・記録しながら取り上げました。その年の冬、室内で埋設土器Cを組み立ててみたら、壺形土器のほかに小型の甕形土器があることがわかりました。さらに、詳しく出土位置を分析すると、壺形土器の口縁部は壺形土器内部の下、甕形土器は口縁部が壺形土器外



第14図 埋設土器B（村上市教委2013）



第15図 埋設土器B出土の鉄剣（村上市教委2013）

側の下、^{たいぶ}体部がその上、^{ていぶ}底部が壺形土器内部の上からそれぞれ出土したことがわかりました。そこから想定すると、第18図のように、掘った穴の中に底を抜いた壺形土器を安置し、その上に蓋をするように小型の甕形土器を伏せてかぶせた状態だったと想定することができました。

埋設土器Cについては、さらに興味深いことがわかりました。第18図には地面も描かれていますが、これにも根拠があります。埋設土器Cの周辺からは大きな^{えんれき}円礫が数点並ぶように見つかりました。これら円礫は川でローリングを受けた河原石です。ここは山ですから、本来、そのような石は出てこないはずですよ。しかし、発掘するとある地層の中から円礫がまとまって見つかりました。はじめ、「石つぶて」という下から攻めてくる敵に投げつけた武器とも考えました。しかし、どう見ても人の手の加わらない自然に堆積した土層に入っているのです。いろいろと調べた結果、人々がここに住むずっと前、地中に埋まっていた川原石を含む地層が隆起した痕跡ということがわかりました。話が横道にそれましたが、これらは、遺跡（ムラ）内の別の場所で環濠などを掘ったときに地中から出てきた円礫であると考えられます。そして、みんな同じ深さから見つかっています（第19図）。発掘調査で発見される土器や石器は、小さいものほど、例えばモグラとか、霜とか、地震とか、様々な要因で元の位置から動くことが多々あります。しかし、河原石のような大きいものはそれほど動かないといわれています。このことから、発掘によって私たちが目にした円礫の深さが、当時の地面の高さで、埋設土器（壺形土器）は甕形土器をかぶせた状態で穴の中に置かれ、地面から上に出ていたと推測されます。

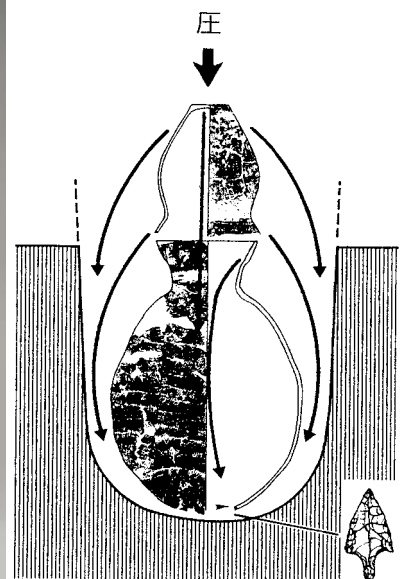
さらに、埋設土器と掘った穴のすき間から土器が見つかるということは、土器が割れたタイミングでは、まだ穴は埋まっていなかった、つまり穴を掘って土器を置いた状態で、土器が割れた、もしくは人為的に割ったということになります。もし、土器が割れる前に塚のように上から土をかぶせてしまうと、すき間にも土が入るから、そこには土器のかけらは入りません。しかし、実際は隙間のかなり下のところまで土器のかけらが土器の外側に落ちていきます（第20図）。



第16図 埋設土器Cと矢じり
(村上市教委2013) から作成



第17図 埋設土器C内部の土器出土状況
(村上市教委2013)



第18図 埋設土器C設置想定図 (村上市教委2013)

もう一度整理してお話しますと、埋設土器Cは、穴を掘って底を抜いた土器を安置し、底には矢じりを置いて、小型の甕形土器を蓋のように伏せた。そして、人為的に割った、もしくは自然に割れた後に、上から土をかけて埋めた、もしくは自然に埋まったと想定しています。

おわりに

山元遺跡は、弥生時代に、おそらく地元の人だと思われる東北系の集団がこの地に住んだことがわかる遺跡です。そして、高地性環濠集落という戦争に備えた西日本のムラのつくり方が認められ、北海道や関東・東海、西方の文物も発見されたことから、多地域との交流が行われていたことが想定されます。

西の人、北陸の人と敵対関係にあった、実際に戦争をしないまでも、いい関係でなかったという研究者の方もいます。しかし、西をまねたムラ、防御機能が低くても高台に途切れ途切れの濠をめぐらしたムラをつくり、鉄製品、青銅製品、ガラス小玉などの、一般のムラでは持てないような貴重なものを所有していたことから考えると、西の人々とは敵対関係でなく、むしろ友好的な関係だったのではないかと私は考えています。そして、西との関係性は水運を活用して北にも繋がっていました。西方を一望できる遺跡に立つと、弥生時代に山元の地に住んだ人々が海を見ながら語り合っていた風景が浮かんできます。

以上で私の話は終わらせていただきます。ありがとうございました。

【引用文献】

新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団 2009『県内遺跡発掘調査Ⅰ 山元遺跡』

村上市教育委員会 2013『山元遺跡 市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』



第19図 円礫の出土状況（村上市教委2013）



第20図 埋設土器C外部の土器片出土状況
(村上市教委2013)

基調講演 I 「新潟県内の高地性集落」

新潟県教育庁文化行政課 たきざわ のりあき
滝沢 規朗

はじめに

今ほどご紹介いただきました滝沢と申します。30分ほどお時間をいただきまして、新潟県内の高地性集落のお話をさせていただきます。本日資料を少し作ってお配りしていますが、ここに書いてあることをパワーポイントで説明します。時折、配付した資料も使うかもしれませんが、そのような感じでお話を進めさせていただきます。

きょうの構成ですが、「はじめに」ということで少しかだけお話させていただきます。山元遺跡、吉井さんから報告がありましたように、高地性環濠集落かんこうというお話がありました。これがどういう機能を持っていたのか、歴史的意義はどうかを検討するにあたり、一つの材料になるような話をしろと言われていました。何とか資料はつくってお話はさせていただきますが、材料になるような話になるかどうか、心して進めさせていただきますと思います。さし当たってですが、今の高地性集落、環濠集落、どういった研究の現状にあるのかを、お話しさせていただいた後、県内の高地性集落、環濠集落がどういったものがあり、防御性についてお話しをさせていただきます。最後に「おわりに」というふうに進めさせていただきます。

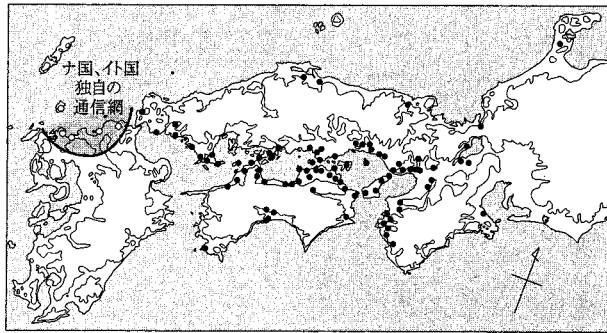
1. 高地性集落・環濠集落の現状

表題は、高地性集落ということですが、高地性集落については賛否両論あります。高いところに村をつくっただけで本当に防御なのかというのは、かなりいろんな意見があるところです。村の周りを濠で囲むことは防御性が強いという印象を持っております。このため、環濠集落についても少し触れながらお話を進めさせていただきますと思います。

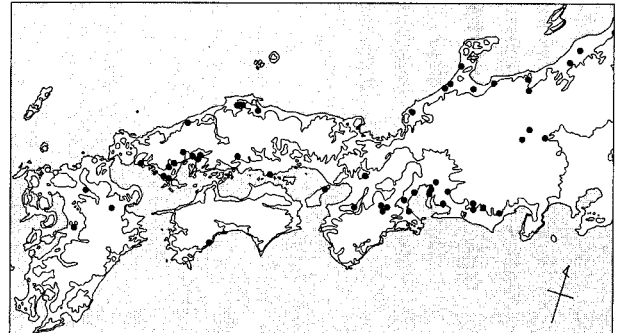
まず、高地性集落という用語ですが、弥生時代の集落を指す言葉だと認識しております。弥生時代になりますと、高校の社会科の教科書に書いてあるように、水田が作られるようになりますが、水田をやるには不利な高いところに村が築かれていて、それを高地性集落と呼びます。高台にあるものを高地性集落といっていると考えていただければと思います。

次に環濠集落ですが、吉井さんからも説明がありましたように村の周りを濠ほりで囲う。この濠ですが、幅2m、深さが2mを超えるものもあって、一度そこへ入ってしまうと、なかなか這はい上がることは難しいくらい非常に大きい濠を築いております。山元遺跡の場合は、少し規模が小さい。跨またごうと思えば跨げるぐらいの濠です。この辺をどう評価するかも一つ重要です。高地性集落は立地、環濠集落というのは集落に付随された施設の名前と思いますが、それぞれ合体して高地性環濠集落といいます。山元遺跡のように高台にあって、周囲に濠をめぐるすのは、高地性環濠集落そのものだということで評価をいただいておりますが、本当に防御になるのかどうかというのは、賛否があります。高地性環濠集落と高地性集落というのは、防御の村ということで評価が与えられてきたわけですが、2000年代に入りますと、反論もたくさん出てきています。実際に戦った痕跡がなかなか見つからないとか、西日本のほうでは幾つかありますが戦いで死んだと思われるお墓が明瞭でないとか、本当に武器を保有しているのか等々があり、防御性については否定的な意見が近年では多いということです。最近では、少し防御を唱える方々が盛り返してございまして、侃々諤々かんかんがくがくの状態かと思っております。

第1図をご覧ください。左側の高地性集落の分布は弥生時代の中期後半のものです。右側は弥生時代後期



第1次高地性集落の分布 中期後半から後期初め(前1世紀後半～1世紀)にかけて作られた典型的な高地性集落は、ほとんどが瀬戸内海沿岸に密集する



「倭国乱」の頃の典型的な第2次高地性集落 第1次高地性集落に比べて分布が東西に広がっている。新たにイト倭国勢力に接した中部九州や南四国、西部瀬戸内にめだつのと対照的に、東のクニ・国では、それぞれのマツリ圏や文化圏に緊張関係が及び、牽制しあっている

第1図 高地性集落の分布 (寺沢2000)

の高地性集落の分布で、寺沢 薫^{てらさわかある}さんという畿内の第一人者の方が作成されたものです。左側を見ていただきますと、弥生時代中期の後半の段階では、西日本、特に瀬戸内海に沢山^{たかさ}分布しています。これが後期になると、東日本に分布が広がり、図では切れていますが新潟が一番北の地、日本海側では最北の地になっております。図が切れている箇所です山元遺跡が見つかりました。今まで高地性環濠集落がないと考えられていた地域で、山元遺跡が見つかったというふうにみていただければと思います。

次に高地性集落、環濠集落の模式図を見ていただきます(第2図)。周辺に濠をめぐらす。人が斜面を登って攻めてきても、なかなか高いところには上がれなくて、中に入れない仕組みとなっている。こういうふうなものだと想定されています。

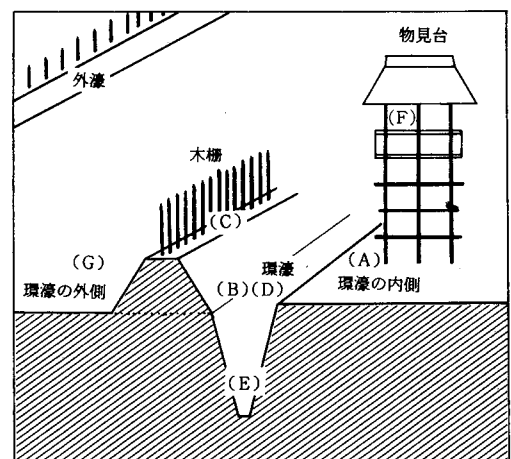
発掘調査をしていくと、いろんな事例が確認されます。これは佐賀^{よしのが}県の吉野ヶ里遺跡です。有名な遺跡なので、皆さんも名前は聞いたことがあるかと思います。発掘調査成果を基に模式図が作成されていますが、集落の外側に土が盛り上げられています。濠を掘ると発生土が出てきます。掘った土を濠のどちら側に盛り上げるかによって、防御性が増したり、逆に薄れたり、防御の意味がないという意見があります。吉野ヶ里遺跡の場合は、発掘調査した結果、濠を掘った土を自分たちが住んでいる側ではなく、外側に積み上げて土塁が作られたということがわかっておりまして、かえって攻めやすいという意見もあります。濠があって、村側に土塁を築いたほうが攻める側にとっては攻めにくいのに、外側に土塁が築かれている。防御性は増加しないこともあってですね、防御性が否定される傾向にあったものが、今は少し盛り返しつあるというようにお考え下さい。



図107 「吉野ヶ里の戦い」(山本權也画:佐原 1992 より)

2. 県内の高地性集落・環濠集落

次に、新潟県の状況はどうかということでお話しさせていただきます。今ほど吉井さんのほうから高地性集落は、周辺との標高差はどのぐらいかで、30mという私の考えをご紹介します。第3図で説明すると、左側が弥生時代後期、右側が古墳時代前期の遺跡の立地です。周辺との標高差を新



第2図 環濠集落模式図 (久世2001)

新潟県内で雑駁^{ざっぽく}に調べました。標高差ゼロのところから高いところに向かって、点を落としていったものです。こうやって見ていきますと、弥生時代後期というのは標高差が全然ない村が沢山あるんですけども、最大だと80mを超えるような非常に高いところに位置する村もあります。

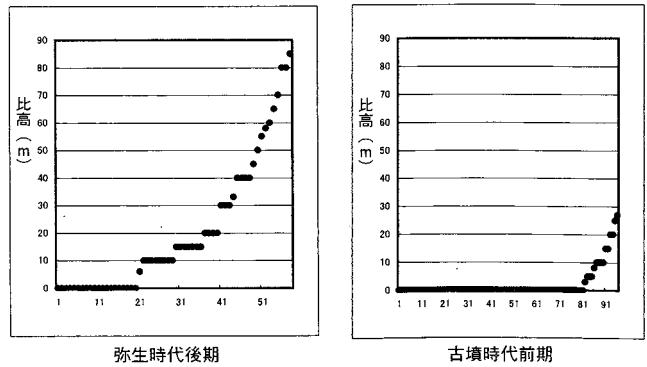
一方で古墳時代の前期は、田んぼの下を掘ると見つかるようです。余り高いところには村が築かれませんが、一番高い村でも、新潟市旧巻町の海岸沿いで周辺との標高差が30m弱です。今のところ便宜的に古墳時代前期の村は30m以下に築かれているため、弥生時代の特徴としては30m以上の村をもって新潟県内の高地性集落ととりあえず呼びましようとして提案しています。この図を見ていただいても、弥生時代後期には高いところに村が築かれたということがご確認いただけるかと思えます。

さかのぼって、弥生時代の中期後半は高いところに村を営んでいません。おおむね古墳時代と同じような標高差のない場所に村が築かれているというふうに思っただけだと思います。第4図は、新潟県内で見つけています高地性集落、環濠集落を図で起こしたものであります。環濠は確かかどうかちょっと怪しいところもありますが、弥生時代の中期の後半になると新潟県内の環濠集落が確認できるようになります。1つが佐渡、1つが上越です。ここも図でご確認をいただければと思います。弥生中期には高地性集落はないというのが今の見解です。弥生時代後期に入ると、信濃川の両岸に高地性集落とか、環濠集落と言われるものが多いことを確認

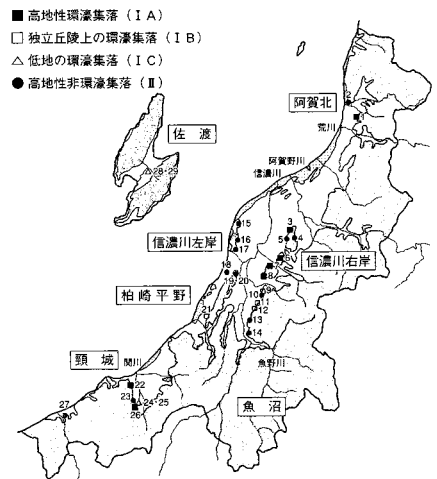
したいと思います（第1表）。

次に、高地性集落、環濠集落が非常に増える後期の土器要素について簡単に説明をさせていただきます。第5図は、今回ご講演

いただきます石川先生が1992年に作成された図です。全国では土器の地域色というのが分かれています、一番北側、北海道の続縄文文化^{ぞくじょうもん}と言われているもので、その下の東北が天王山式^{てんのうやま}。更に南下すると何々式というのが分布していると思います。土器の地域色が何を示しているか。好んで使用した土器のまとまりを示す分布圏は、竪穴建物の平面の形が同じになるとか、他の要素もこの土器圏の中で完結するような状態にあります。多分、土器だけ違うというふうなことではなく、同じような意識を持った人たちの一つのまとまりというのは言い過ぎかもしれませんが、そのような意識があったと考えています。新潟県内の弥生時代後期はどうなっているのかということ、いろんな要素が錯綜^{さくそう}しています。天王山式というのは弥生時代ですけど、まだ縄目の模様が土器に付せられている土器です。それが県北部に広がっています。また、箱清水式^{はこしみず}と記述していますが長野県の土器が新潟県に随分入り込んでいます。海岸平野部には法仏式^{ほうぶつ}というものが見受けられます。大きく分けて3つの分布圏に新潟県は分かれています。これを少し細かく見ていきますと、阿賀野川以北は東北系、阿賀野川以南の海岸線は北陸北東部系、信濃川流域には



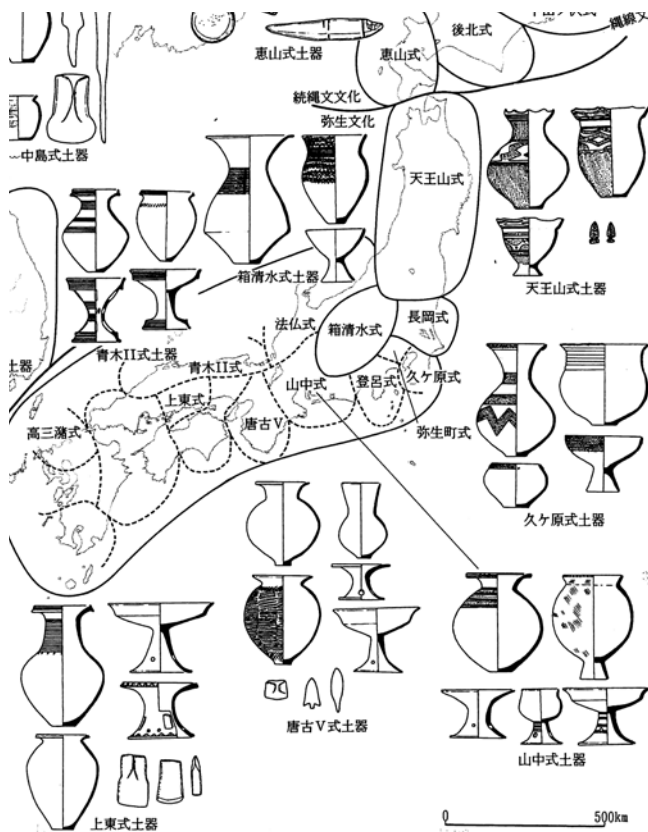
第3図 新潟県の集落の立地（滝沢2009）



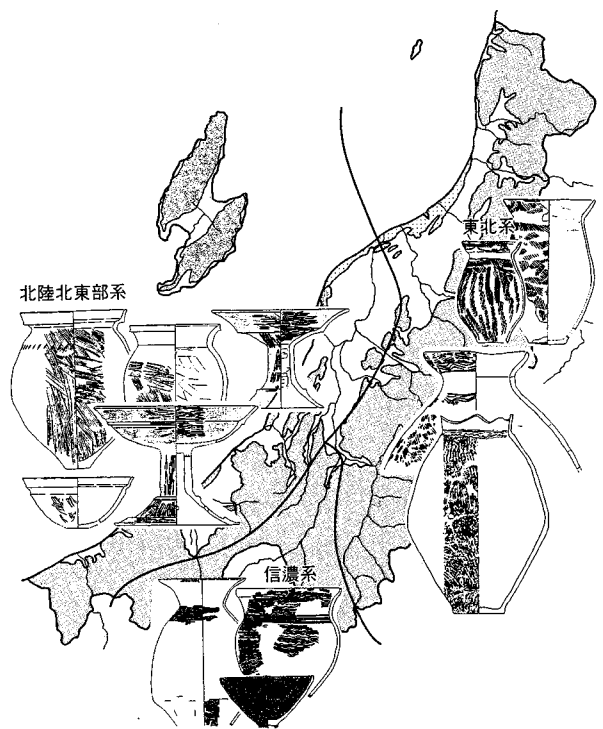
第4図 新潟県の高地性集落・環濠集落（滝沢2009）

第1表 新潟県の高地性集落・環濠集落（滝沢2009）

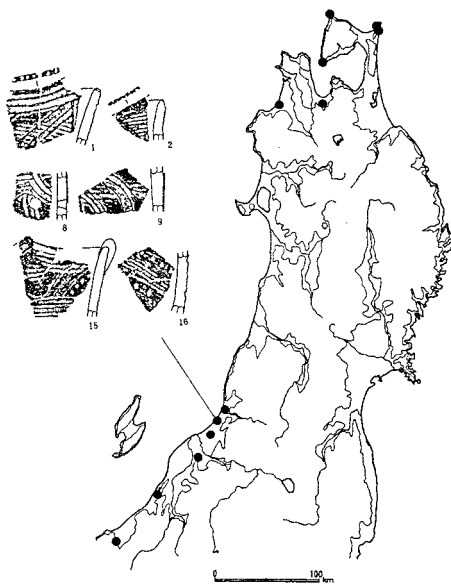
地域	中 期					後 期					
	環濠集落			高地性集落	合計	環濠集落			高地性集落	合計	
	高地	低丘陵	平地	(環濠不明)		高地	低丘陵	平地	(環濠不明)		
阿賀北					0	1				1	2
信濃川右岸					0	4	3			5	12
信濃川左岸					0					6	6
柏崎平野					0		1			1	1
魚沼					0					0	0
頸城			1		1	2		1		2	5
佐渡			1		1			1		1	1
合 計	0	0	2	0	2	7	4	1		14	27



第5図 弥生時代後期の土器 (石川1992) から抜粋



第6図 新潟県弥生時代後期の土器地域色 (滝沢2009)

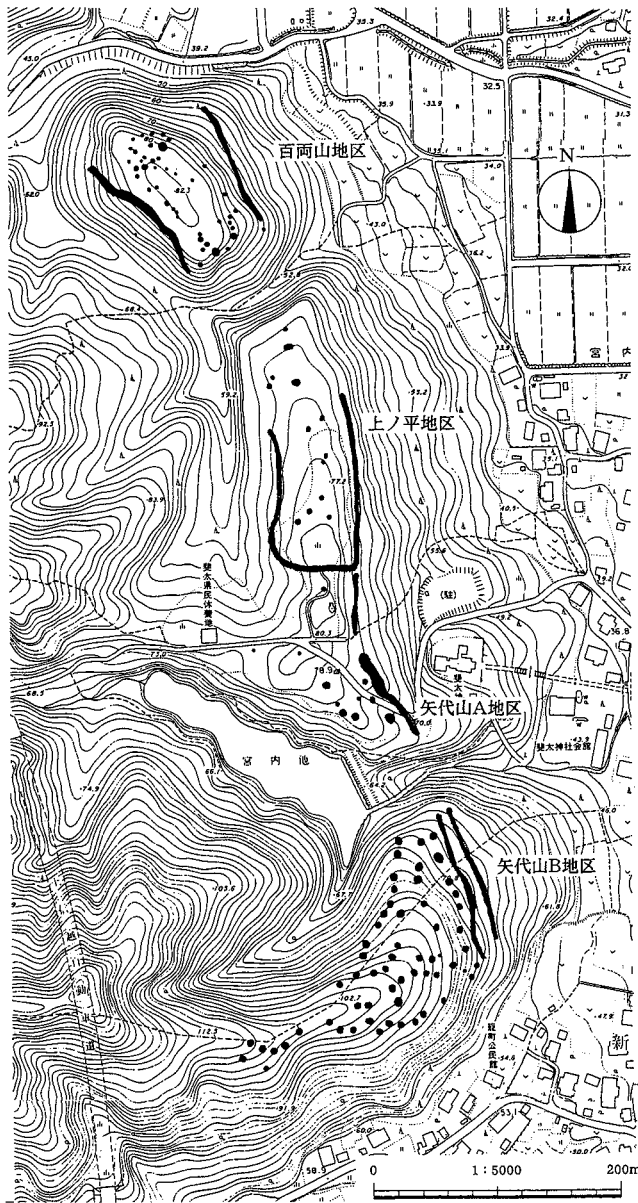


第7図 弥生時代後期の続縄文土器 (石川2013)

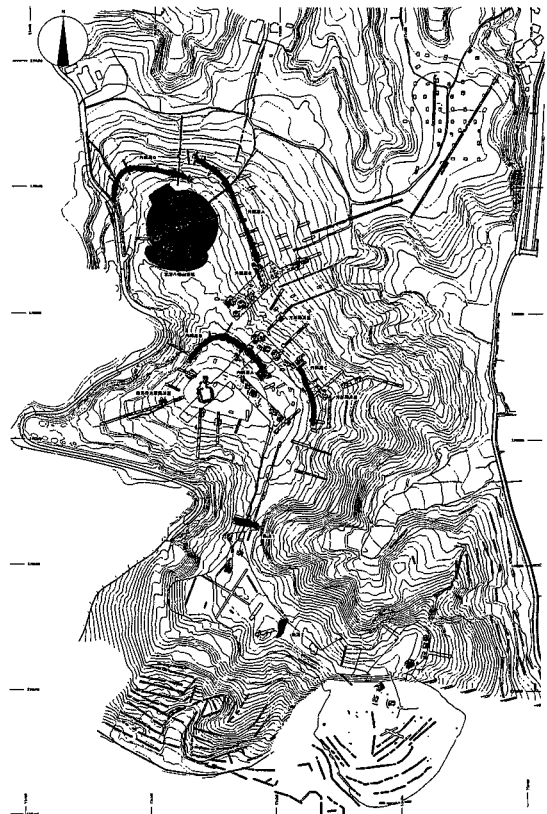
信濃系ということになっています (第6図)。これと先ほど見ていただいた高地性集落・環濠集落の分布 (第4図) と見比べると、ちょうど土器分布圏の境界あたりに高地性集落・環濠集落がいっぱいあるように見えます。一方で山元遺跡は、東北系土器の文化圏で見つかった初めての高地性環濠集落というような評価ができることとなります。これは、今までの弥生時代の研究を覆すというふうに言われています。

蛇足ですが、新潟県では主体的に使う土器以外に、いろんな地域の土器が入ってきます。左側が続縄文土器で、北海道の土器です。下北半島からぼんと飛んで新潟県でもいっぱい見つかっています (第7図)。北海道の土器だけではなく、九州の土器も新潟県内では見つかっています。北海道から直接来たのかちょっと怪しいですけども、全国広しといえど北海道の土器と九州の土器が1つの県で見つかったというのは、新潟県だけの特徴です。いかにこの時代、日本海側の交流が頻繁に行われてきたのかとともに、新潟というのは特に貴重な重要な地域というふうには認識をいただければと思います。

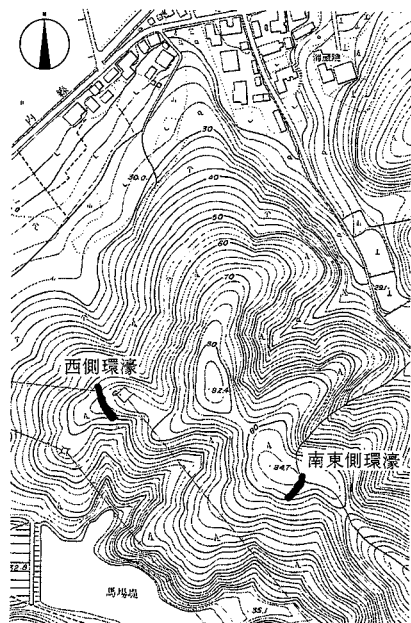
続いて、高地性集落、環濠集落には実際どういうものがあるのかということをお話しします。山元遺跡もそうですが、周りに木が生えていますとイメージしにくいので、発掘調査が行われたもの、建物が復元されたものが主体になります。これは上越市の裏山遺跡です。周辺との標高差が大体70mと非常に高いところにある村です。第9図が発掘調査中の写真ですが、これが濠です。斜面の傾斜の変換点に濠が掘られているというふうに見いただければと思います。村の大きさですが、第8図をご覧ください。中央下に小さく裏山遺跡と載っています。新潟県内で見つかっている環濠



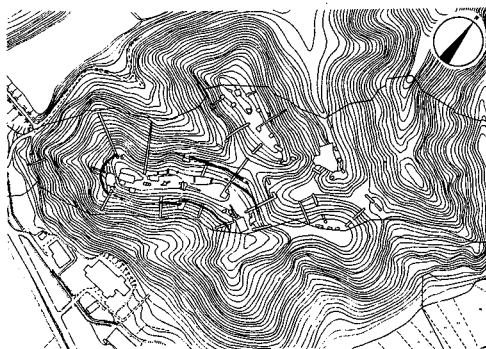
斐太遺跡群 (高地性環濠集落)



古津八幡山遺跡 (高地性環濠集落)



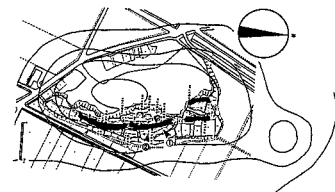
経塚山遺跡 (高地性環濠集落)



山元遺跡 (高地性環濠集落)



裏山遺跡 (高地性環濠集落)



横山遺跡 (独立低丘陵上の環濠集落)

— 環濠

第8図 新潟県内の環濠集落 (滝沢2009) を改変 S=1/6,000

集落を同じ縮尺で集めたものですが、それほど大きくない、むしろ小規模な高地性環濠集落というふうに見ていただければと思います。大体長さが100mちょっとで、濠に囲われた幅は40～50mで、非常にやせた尾根で見つかった環濠集落です。次は新潟市の古津八幡山遺跡^{ふるつはちまんやま}です。周辺との標高差が裏山遺跡ほどではないのですが、非常に高い位置に集落があります。濠の中に人が立っている第10図で濠の深さをご確認下さい。この遺跡は国の史跡になっていて、建物が復元され、環濠の脇で見つかった土塁も復元されています。新潟県内では、最も高地性集落・環濠集落を体験できる非常に貴重な整備がなされており、ご覧になった方もいらっしゃると思いますが、このシンポジウムを聞いた後、是非この遺跡に立ち寄っていただくと、今日聞いた話が理解しやすくなると思います。また、山元遺跡をどのように今後活用していくかという点でも非常に大きなヒントになる遺跡と考えています。古津八幡山遺跡は非常に規模が大きいです。再び第8図でご確認下さい。



第9図 上越市裏山遺跡（新潟県教委ほか2000）



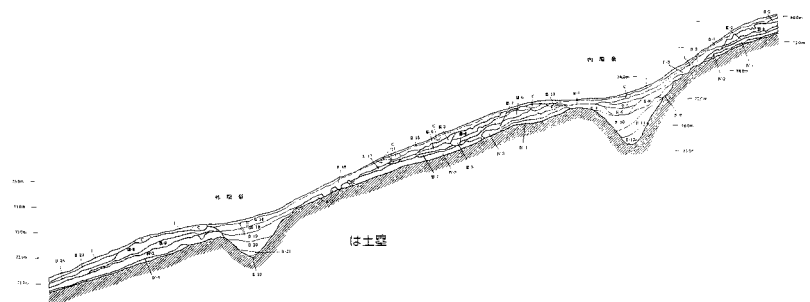
第10図 新潟市古津八幡山遺跡（新潟市教委2001）

3. 県内の高地性集落・環濠集落の防御性

県内の高地性集落、環濠集落の防御性について少しだけお話をさせていただきます。国立歴史民俗博物館に佐原 真先生^{さばらまこと}という弥生時代研究の第一人者の先生がいらっしゃいまして、高地性環濠集落、高地性集落の防御性についても貴重な研究をされています。弥生時代、実際に戦いがあったのかどうかを「守りの村」「武器」「殺傷人骨」「武器の副葬」「武器形祭器」「戦士・戦争場面の造形」、こういったものを満たせばその時代に戦いがあったか分かるとして、各要素を示されました。このうち残念ながら新潟県で確認できるのは、「守りの村」「武器」「武器の副葬」の3点であります。県内の状況からでは実際に戦いがあったかどうかは結論が出せません。

先ほど環濠、濠を掘った後の土をどっちに盛るので防御性が非常に異なってくるという見解もあるとお話ししました。掘った土を村と住まいの空間の反対側に積むのが環濠外土塁^{どるい}、住まい側に盛り上げたものを内土塁と呼びます。新潟県内で土塁の位置が確認できる例を見ていただきたいと思います。第11図は、妙高市にあります斐太遺跡^{ひだ}の環濠です。部分的な調査ですが、これが環濠です。この一部を掘ったところですが、黄色い土をご確認いただけますでしょうか。これは濠を掘って盛った土で、濠の両側に土が盛り上げられているということが確認できました。両側に掘った土を盛ると、より環濠の防御性は増すのかなと思います。山元遺跡の場合のように、非常に急傾斜な斜面では、掘った土を盛り上げても痕跡が出にくい。実際の土塁は少し確認するのは難しいのかなという印象を持っています。

もう一点は、濠のメンテナンス。防御に徹するのであれば、一回掘った濠が埋まった場合は何度か掘り返すだろうと言われています。一例だ



第11図 妙高市斐太遺跡矢代山B地区の環濠（妙高市教委2005）を一部改変

け新潟県内では掘り返された濠の例があります。長岡市の^{よこやま}横山遺跡では、一度環濠、濠が掘られて埋まった後に、もう一度掘っていることが確認できます。なお、前の濠が埋まった後、その濠を丸々掘って再度濠を掘っていれば土層断面からメンテナンスの痕跡が消えてしまうことも考慮する必要はあると思います。

次に、武器と考えられるものですが、先ほど集落の全景を見ていただきました上越市の裏山遺跡では、手に持って投げられるぐらいの石が19点見つかっております。この石の使い方ですが、紐に皮をくっつけて石を入れ、回して投げるとより遠投が可能となるというようなことを言われています。実際にこれが武器として使われたのかどうかというのはクエスチョンマークですが、竪穴建物からこれだけの石がたくさんまとまって見つかることから、恐らく^{しゅうせき}集石した結果だろうと考えます。

次に、武器の副葬ですが、先ほど紹介しました古津八幡山遺跡の^{ほうけいしゅうこうぼ}方形周溝墓で確認できます。先ほど吉井さんからご報告があったように、^{どこうぼ}土坑墓とは少し違う形態のお墓です。人を埋葬し^{ぼこう}墓坑の周囲に溝をめぐらせていて、西日本のお墓と位置付けられています。古津八幡山遺跡の方形周溝墓からは鉄剣が見つかることから、武器の副葬は確認できるというふうに認識をいただければと思います。

武器や武器の副葬など、一部の要素は確認できますが、殺された人の人骨が見つかっていないなど、防御性については、決定を打ちにくい状況です。今後この状況は続くのかなと思っています。最後に県内で環濠集落がどんな規模があって、どんな時期に濠が埋まっているのかをお示しします。

4. 遺跡の消長からみた評価

山元遺跡は、小規模な高地性環濠集落です。古津八幡山遺跡のように大規模なものというのは、妙高市の斐太遺跡群、これも第8図を見ていただきますと、規模などを確認していただけるかと思います。新潟県内の高地性環濠集落と言われるものは、非常に大きいものと小さいものがあり、それぞれで環濠が埋まっている時期も違うというのが確認できます。山元遺跡ですとか、見附市^{おおひらじょう}大平城遺跡、三条市^{きょうづかやま}経塚山遺跡、上越市裏山遺跡は小規模なものですが、第12図で算用数字で2と書いてある弥生時代後期の後半に成立して、後期の後半の中で環濠は埋まっていきます。集落の存続期間は50年なのか、70年なのか、なかなか確定しがたいところですが、かなり短期間で築造、短期間で埋まっているというふうに見ただけならばと思います。小規模な高地性環濠集落の環濠が一斉に埋まっているというのは非常に大きなことで、歴史的な意義を想定してもいいんじゃないかと考えます。

一方で、古津八幡山とか、斐太遺跡の場合、たくさん環濠がありますが、斐太遺跡の環濠のうち^{やしろやま}矢代山B地区というところのものは、もうちょっと続きまして、弥生時代後期の終末の段階で埋まるというのが確認できます。規模によってどうも埋まっている時期が違う。仮にですが、環濠が埋まることが社会的な緊張状態が解かれたことを意味すると、小規模なものが先に埋まって、大規模なのがその後に埋められること、何かしらの歴史的意義が想定できるかもしれません。これは地域別に見たもので、これを説明していますと終わらなくなってしまいますので、第12図の地域別の動向は後で確認をお願いしたいと思います。

最後に、もうちょっと広い意味で見た場合ですが、新潟県内で見ついている大規模な高地性集落は、先ほど土器の分布圏というのを見ていただきましたが、北陸北東部系と東北系、信濃系の境界にあたる要所に築造されていて、同じ時期に埋まっているというのは、評価していいのでは考えています。一方、北陸の南西部との境界には、^{おおみにしやま}能登の大海西山遺跡があります。これも非常に大きい環濠集落です。環濠が埋まる時期は後期の終末、私が示した年代では算用数字3という時期です。いろいろな意見はあるのかもしれませんが、何かしらの社会的な緊張状態が終結した結果、斐太遺跡や古津八幡山

遺跡名	立地	規模	中期	1	2	3	4	5
山元	高地	小規模	……	……	■	■	■	■
古津八幡山	高地	大規模	……	……	■	■	■	■
大平城	高地	小規模	……	……	■	■	■	■
経塚山	高地	小規模	……	……	■	■	■	■
裏山	高地	小規模	……	……	■	■	■	■
斐太遺跡群	百両山	高地	……	……	……	……	……	……
	上ノ平・矢代山A	高地	大規模	……	……	?	?	……
	矢代山B	高地	……	……	……	……	……	……
横山	低丘陵	小規模	……	……	……	……	……	
西谷	低丘陵	小規模	……	……	……	……	……	
釜釜	低地	大規模	……	……	……	……	……	

…… 土器・若干の遺構有り。

■ 主体時期

第12図 県内の環濠集落存続時期（滝沢2009）

遺跡などの大規模な高地性集落の環濠が埋められたというような評価も考えられるわけです。

吉井さんのほうからですね、戦いの痕跡というのは、戦いのたびにつくられたかどうかというのは、なかなか難しいという評価があります。私もそうは思うんです。ただ、何もない中であれだけ広い部分を使って、周りに濠を掘るかといいますと、何かしらの情報が伝わって、これに対応した結果の濠の掘削であり、倭国大乱など、この後に石川先生がお話しされることを反映している可能性も大いにあるというふうに考えています。

最後に、この地域の重要性についてほんの少しだけお話しさせていただきます。弥生時代、弥生文化というのいろいろな要素があってそう呼ぶのだと思っています。環濠だとか、高地性集落とか、村の形態であったり、お墓であったり、使っている道具なんかを総称して弥生文化と思うんですが、古津八幡山遺跡は環濠集落で、西日本的な方形周溝墓、使っている道具には金属器もありますが、阿賀野川を越えますと、山元遺跡は方形周溝墓を採用せず、土坑墓だけです。一部欠落はしていますが、それでも金属器やガラス製品など西日本の弥生的な文化を受容しています。ただし、山元遺跡から北に行きますと、弥生文化の要素が欠落しています。日本海側の阿賀野川北から村上市あたりには西日本的な文化要素が備わったり、備わっていなかったりというのが特徴だと思います。

次に、古墳時代ですが、前方後円墳という一番格の高いお墓の最北の分布は新潟市（旧巻町）です。前方後円墳以外のお墓を確認すると、日本海側最北の前期の古墳は胎内市の城^{じょう}の山古墳、西側の文化が伝わっているのがこのあたりが最北と言えるのかなというふうに思います。一方、時代が下りまして、古代。まだ見つかっていませんが、647年には、どうも阿賀野川河口付近に湊足^{ぬたりのさく}柵が築造されているようです。このことから、西日本側の情報が伝わったり、伝わらなかったりする日本海側の最も北の境界が、どうも新潟県の阿賀野川北の周辺の大きな特徴だろうと考えます。これは通史でも言えるということが重要です。西から情報が入っているから偉いという意味ではなくて、新潟にいれば北の情報ももちろん入ってくる。西の情報、北の情報を一気に集めることができることが大きな特徴です。

おわりに

山元に立って西・南を見ると、西から入ってくる情報がよく見えるようです。北側は植林等で見通しがよくありませんが、当時の情報が伝播する動きも見えるような気がします。山元遺跡に立つと、日本全国の弥生文化が見えるんじゃないか、それぐらい大きなインパクトのある遺跡で、成果が上がった遺跡なんだというふうに考えております。ちょっと時間が超過しましたが、これで終わりにしたいと思います。

【引用文献】

石川日出志 1992「Ⅳ 弥生時代 2 道具の組み合わせ C 後期」『図解・日本の人類遺跡』 東京大学出版

石川日出志 2013「特論1 弥生時代の新潟県域」『弥生時代の新潟県』 新潟県立歴史博物館

久世辰夫 2001『集落遺構からみた南関東の弥生社会』 六一書房

滝沢規朗 2009「第七章 まとめ B 県内における高地性集落・環濠集落」『県内遺跡発掘調査Ⅰ 山元遺跡』 新潟県教育委員会・
(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

田中 琢 1991『倭人争乱』日本の歴史② 集英社

寺澤 薫 2000『王権誕生』日本の歴史02 講談社

新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2000『上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅶ 裏山遺跡』

新潟市教育委員会 2001『八幡山遺跡発掘調査報告書』

斐太歴史の里調査団・新井市教育委員会 2005『斐太歴史の里調査報告書Ⅰ 斐太遺跡矢代山B地区・観音平1号墳・観音平4号墳・墳丘墓群』

基調講演Ⅱ「山元遺跡と倭国大乱の時代」

明治大学文学部教授 石川 日出志

はじめに

皆さん、おはようございます。私は現阿賀野市（旧水原町）で生まれ育ち、高校は新発田高校でした。高校2年のとき、村上市の滝ノ前遺跡（山元遺跡と同じ弥生時代後期の集落）の調査に1日だけ参加して私の人生が変わってしまいました。このように村上市は私が考古学者になる原点ですので、山元遺跡の調査では何らかの形で恩返ししなければいけないと思い、調査でも押しかけて助言し、本日もその魅力を語ることとなりました。

私は、「山元遺跡と倭国大乱の時代」という、少し大仰な題にしました。お話の内容は、先ほどの滝沢さんのお話と重なる部分ありますが、復習のつもりで聞いていただければと思います。

1. 弥生時代の稲作とムラ

山元遺跡がいつ頃営まれたのかといいますと、弥生時代の中期の終わりごろから後期後半までです。年代的には、紀元前1世紀の後半から紀元後2世紀末までの約200年間持続しました。この弥生時代とはどのような時代なのかといいますと、一番大事な基本的な特徴は、水田を造成し、用排水路を付設して灌漑稲作を行うことです。本格的に米をつくり食べる習慣が根づいた時代です。米の収量を復元するのはなかなか難しいんですが、現在の10分の1程度と考えられており、現在からすれば、ずいぶん少ない収量であったようです。でも見方を変えると、田んぼを広くつくらないと収量が確保できない訳で、他県の実例を見るとかなり大規模な水田跡が出てきます。田んぼの一区画は数m四方のとても小さいものですが、全体では数ヘクタールもの田んぼが広がっています。

このような大規模な田んぼを造成し、耕すとなると、おおぜいの人手が必要です。縄文時代ですと、クリやドングリなどの木の実類、林野に生息するシカやイノシシ、海川の魚貝類といった、ムラの周辺の自然の恵みを上手に採集して食料をまかっています。ムラの規模を大きくすると自然界とのバランスが崩れてしまいますので、大きなムラはほとんどありません。ところが弥生時代になると大きなムラをつくる必要があります。第1図は、弥生時代中期後半（紀元前1世紀）の横浜市大塚遺跡で、2ha（2万㎡）の範囲に住居が1時期に25軒程度、人口が100人ほどのムラです。西日本では、同じ時期で20～40haもの大規模なムラもあります。

私の論題は、「山元遺跡と倭国大乱の時代」です。山元遺跡は約200年の歴史がありますが、その前半はムラの周囲に濠は掘削されませんが、後半の1世紀末から2世紀までの時期になると周囲に濠が掘り巡らされます。この弥生時代の日本列島の様子を知る手がかりは、大地に残された遺跡や遺構・遺物だけでなく、中国の歴史書にも、著しく断片的ですが情報が残されています。『後漢書』という歴史書がありますが、その中に「桓霊の間、倭国大いに乱る」という記事が出てきます（第2図-③）。「桓霊の間」というのは後漢の桓帝・霊帝という2代にわたる時代のことで、146年から188年までの間となります。『後漢書』には、日本列島の弥生時代の人々が漢帝国と外交交渉を行ったことも描いてあります。57年に「倭奴国」、「ワのナコク」と読みますが、現在の福岡平野の最有力者が漢王朝の皇帝である光武帝に使いを出しており（第2図-①）、それに対して「漢委奴國王」という称号が与えられたことが、江戸時代に博多湾沖合の志賀島で発見された金印からわかっています。そのちょうど50年後の永初元年（107年）にも、倭国王の

帥升等^{すいしょう}が安帝^{あんてい}という皇帝に使いを出しています（第2図-②）。紀元後1世紀から2世紀にかけて、日本列島が「倭」、すなわち単なる倭人の世界であったのが、「倭国」という初歩的なクニという組織ができていく様子が分かります。そしてそれから半世紀後に「倭国大乱」が起きたと記録されているのです。『魏志^{ぎし}倭人伝^{わじんでん}』にも同種の記事がありますが、この倭国大乱ののちに一人の若い女性が王に擁立されて（第2図-④）、争乱が治まったと記されています。ちょうどその倭国大乱の頃に、新潟平野の最北部の丘陵上にある山元遺跡に、居住域の周囲に濠が2～3条掘り巡らされているのです。

弥生時代のムラには、先ほどの横浜市大塚遺跡のように居住域の周囲に濠を巡らすのが特徴的です。環濠^{かんごう}といいます。その性格・役割についてはさまざまな意見がありますが、私は防御機能が期待されて掘削されたものだと考えています。居住域と墓域を区画する意味や、ムラの内部や外部を分ける意味、あるいは大規模な濠を共同で掘削することによってムラの構成員の結束力を高める意味など、いくつもの役割があったとは思いますが、やはり防御機能がもっとも重要な役割なのだと、私は考えます。もちろん、つねにムラどうしの争乱があったとは思われませんが、そうしたことが起こり得るという意識が、大変な土木工事である環濠を掘削させたのだと思います。

2. 高地性集落

山元遺跡も弥生時代のムラであり、小規模ながら環濠を巡らしています。しかし、単なる環濠集落ではなく、高地性集落と呼ばれる種類の遺跡です。この遺跡は、南側の平野部との高低差が約40mの丘陵上に立地しており、周囲の斜面はかなりの急傾斜となっています。弥生時代の人びとは稲作農耕民ですから、本来は平野部にムラを設けて、周囲に水田を造成して稲作を行うのが一般的です。ですから、山元遺跡のような急傾斜な斜面に取り囲まれた丘陵上にムラを構えて稲作を行うのはとても不便です。農繁期には毎日この丘陵を上り下りしなくてはなりません。にもかかわらず、丘陵上にムラを構え、さらに周囲の斜面部に環濠を2～3条巡らしています。日常の不便があるにもかかわらず、丘陵上に住んでいる。同様の例は弥生時代後期の北陸一帯に広がっていますし、同じ時期の山陰や北部九州にもあります。また、瀬戸内海沿岸では、弥生時代中期後半から後期初頭（BC 1世紀～AD 1世紀初頭）にも同様の例があります。限られた時期の、限られた地域に見られますので、一般的な状況なのではなく、一時的にそのような措置が採られたこととなります。それはやはり集団間の争いが発生し得る状況であるために、ムラの生命・財産などを守るために、ムラを丘陵上に設け、居住域の周囲の斜面に環濠を巡らしたのだと考えられます。つまり防御性が重要視された遺跡というわけです。

新潟県内では、これまで上越の高田平野西部の丘陵上、中越の信濃川沿いの平野部の東西縁辺部の丘陵上に点々と見つかかり、調査されています。この山元遺跡が発見・調査されるまでは、新潟市の古津八幡山^{ふるつ ぼんまんやま}遺跡が弥生時代でもっとも北にある高地性集落だと考えられてきました。山元遺跡は、現在、弥生時代の高地性集落のうち最北端に位置する遺跡です。

3. 古津八幡山遺跡との違いと共通性

古津八幡山遺跡は、標高約50mの丘陵上に立地し、南北400mあまり、面積が4 ha以上もの広がりのある大規模な集落遺跡です。その規模はわが山元遺跡に比べるとはるかに大きいものですが、丘陵上の遺跡に立つと新潟平野を広く見渡すことができますし、西方には弥彦^{やひこ}・角田山塊^{かくた}はもちろん、空気が澄んだ日には佐渡島の山並みも視認できます。このように眺望が優れている点も高地性集落の特徴です。新潟平野北端の丘陵上にある山元遺跡も、遺跡に立つと南側に新潟平野北部を一望できます。

単に立地というだけでなく、占地という点でも類似性を見出すことができます。古津八幡山遺跡は新潟市秋葉区^{あきは}にあり、合併前の旧・新津市の南部^{にいづ}にあります。新津は、信越本線^{しんえつ}と羽越本線^{うえつ}・磐越西

線が交わる交通の要衝でした。一方、この山元遺跡は、新潟平野の北端にあり、この丘陵の北側にある三面川の平野を越えると庄内平野まで約60kmの間は山塊が日本海に直接する地形が展開しています。ですから、庄内平野・本荘平野・秋田平野といった北方の地域に向かう場合は、この山元遺跡の一角がその基点となります。つまり、この山元遺跡が立地する地点も新潟平野と庄内平野以北の地域とを接続する交通の要衝でした。この地域にはそうした意味があるからこそ、まだ地点は確認されていませんが、7世紀中頃になって古代律令国家の北方経営拠点として磐舟柵^{いわふねのさく}がこの地域に設けられたと見られます。

古津八幡山遺跡も、山元遺跡も、単なる一つの弥生時代集落だというだけでなく、より広い地域どうしが交流する際の基点・拠点という意味があると考えべきだと、私は考えます。

4. 高地性集落の防御性

さきほど、山元遺跡のような高地性集落は防御性が意図された遺跡だと言いました。その防御性の実際を見てみましょう。弥生時代後期には、北陸各地で高地性集落が形成されました。そのうち山元遺跡はもっとも北にある遺跡ですが、南端にある遺跡として福井県鯖江市弁財天古墳群の下層で発見された弥生時代後期集落があります。この遺跡は、鯖江盆地の東部にある、平野部との標高差が約100mもある丘陵上にあります。この丘陵は、尾根上は幅広い箇所でも最大40mほどしかない狭いもので、尾根両側の斜面は30～45度ほどの急傾斜をなしています。それほど険しい丘陵上に、わざわざムラを構え、さらに二重に環濠を巡らしています。二重の環濠は、山塊の岩盤を掘削して尾根筋を断ち切り、両側の急斜面では山側を4mほども削り出して60度ほどの急傾斜をつくり出しています。厳重な防御機能をとともよく理解できます。

新潟県内では、弥生時代後期の高地性集落には二つの類型があるように思います。一つは古津八幡山遺跡や妙高市斐太遺跡群のように、集落域が丘陵上にあるものの、周辺の斜面は比較的緩やかで、平野部との行き来がそれほど難渋しない遺跡で、集落規模がととも大きいものです。もう一つは、上越市裏山遺跡^{うらやま}や三条市経塚山遺跡^{きょうづかやま}のように、著しく険しい丘陵上にあつて、平野部との行き来に難渋するもので、集落規模はいずれも小さい特徴があります。もちろん、防御性は後者がはるかに高いことにはなりますが、前者の一例である古津八幡山遺跡では、環濠の外側に土塁を設けたことが確認されているように、防御性にも十分配慮されています。

それでは山元遺跡はどうかというと、立地する地形環境や集落規模からみると後者の類型になります。しかし、環濠が二重に巡らしてあるものの、環濠の規模は古津八幡山遺跡以南の諸事例と比べても著しく幅が狭く、浅いと言わざるをえません。防御性が意図されているとしても、それが嚴重だとはとてもいえません。むしろ形式的だといえることができるでしょう。山元遺跡の面白さだと私は考えています。つまり、防御性は一応意図されているものの、それは形式的で、むしろより北方の諸地域との交流の基点・拠点としての性格が強いのではないかと思うのです。それは山元遺跡で発見された遺物と遺構からうかがうことができます。

5. 西方系の文化要素

山元遺跡で見つかった遺物や遺構を見ると、この遺跡が北陸方面の南方・西方系の要素と、庄内平野以北の北方系の要素の双方が認められます。そこにこそ、この遺跡の重要性があらわれています。

西方系の要素の第一は、先ほどから繰り返し話題にしている環濠および高地性集落です。環濠、すなわち濠（とどろい）を巡らして防御性を備え、丘陵上にムラを構えてさらに防御性を強化する。こうした方式は東アジア大陸に源流を求めることができ、弥生時代になって日本列島に導入され、東日本には弥生時代中期から後期にかけて普及していったものです。西方系の要素の第二は、弥生土器に北陸系の土器が明瞭に認められ、墓域から見つかった土器のなかに北近畿方面に出自をたどることができる破片があります。

西方系要素の第三は、墓地に副葬品として添えられたガラス小玉群と鉄製短剣・筒形青銅器です。

ガラス小玉は1基の土坑墓^{どこうぼ}からまとまって68点出土しました(第3図)。このようなガラス小玉は、弥生時代でも中期までは日本列島は普及しておらず、後期になって突如普及する装身具です。原料は大陸から輸入されたのですが、九州から南関東までの各地で製作されました。北部九州の佐賀・福岡県域、北近畿では、一つの墓から数千点も出土し、壮麗な頸飾りや髪飾りを身に付けて埋葬された事例があります。山元遺跡も、点数ではそれらに遠く及びませんが、ガラス小玉製の装身具を身に付けて埋葬する方式は、西日本から北近畿方面の流儀と通じるものです。

鉄製短剣は、土器棺墓^{どきかんぼ}の中から見つかりました。短剣といっても剣身の厚みが数ミリしかないので、武器としての実用性がどの程度あるのか疑わしいものですが、鉄製武器であることは否定できません。鉄製武器を副葬する方式も大陸に源流をたどることができ、弥生時代に日本列島の北部九州に導入され、弥生時代後期になって山陰から北陸方面に広まったものです。土坑墓が成人や大きな子供を埋葬した墓であるのに対して、土器棺墓は乳幼児や死産児に用いられました。ですから、西方系の葬禮の流儀が、成人ではなく、乳幼児や死産児に施されているのは面白いですね。

筒形青銅器は、予想外の発見で、驚きました。表土直下で見つかりましたが、これも本来は副葬品だったと考えてよいでしょう。直径約2cmの筒形の青銅器で、一方がふさがっており、反対側が開いています。その開いた側の縁に円形の穴が穿たれており、本体の側面3方に細い縦長の透かし穴があります。弥生時代の類例は、九州から南関東まで9例ほどしかない珍しい青銅器です(第4図)。福岡県の2例は少し形態が違い、似ている事例は滋賀県域から東海一帯にやや集中するので滋賀～愛知県域でつくられた可能性を考える意見があります。新潟県からみれば西方系の文物とってよいものです。

6. 北方系の文化要素

土坑墓や出土土器の多くは当地域の在来系の要素とっていいものですが、北方系の要素も少数ながらある点も注目されます。そのなかでもっとも明瞭なのが土器です。

山元遺跡出土土器のなかに北海道系の後北C1式^{こうほく}という土器型式に属する資料があります。北海道は、弥生時代相当の時期は稲作を行っていないので、続縄文時代^{ぞくじょうもん}といます。その土器を続縄文土器と呼び、後北C1式という土器型式は弥生時代後期中頃から後半にかけての時期の土器型式です。口縁部の外面に細い粘土紐を貼り付け、その下の頸部^{すりけし}に磨消縄文による弧を描く帯を配置し、その隙間に点列を充填するものです。この土器型式の本来の分布圏は北海道の道南部ですが、青森県域でも各所に出土例があります。しかし、日本海側では、津軽平野の海岸部の遺跡で見ついているほかは、秋田県・山形県域では1点も発見されておらず、新潟平野北半部までくると、この山元遺跡や胎内市兵衛遺跡^{ひょうえ}・新潟市北区椋C遺跡^{むくろじ}など点々と発見例があります。秋田・山形両県域の海岸部でも、将来必ずや発見されるでしょうが、現在は見つかりません。

私は、津軽以北の人々が、丸木舟を操って日本海沿岸部沿いに南下して交易をした証拠であろうと見ています。当時、この山元遺跡に立つと、眼下の遠方の各所に北海道系の人々がキャンプする様子が見えたのではないかと、私は想像しています。新潟平野までくれば、先ほど見たように西日本に由来する様々な物資や情報もたらされており、それらを入手して北方世界にもたらす役割を果たしたのでしょう。断片的にですが、ガラス玉や鉄製品が、東北地方北部や北海道にこの時期以後みられるようになるのは、山元遺跡など新潟県北部の遺跡を中継地として往来する人々の活動があったからだと思います。

このように、山元遺跡は、南北遠隔地どうしの物流の基点・拠点の一つであり、その点がこの遺跡のもっとも重要な点であったと考えます。

7. 倭国大乱の時代は交流の時代

山元遺跡は、新潟県北部にある弥生時代最北端の高地性集落であり、倭国大乱の時代と接点をもっています。また、出土遺物や検出された遺構から見ると、北陸以西と北方世界の人と物資・情報を繋ぐ接点であったことにも触れました。争乱の時代であることと、人と物資・情報が広域に動くことは、一見矛盾するように感じるかもしれませんが、実はそうではありません。

本遺跡では出土していませんが、中越地方以西では、この段階に大陸からもたらされたことが確かな文物が各地で確認されています（第5図）。高地性集落としてさきほど名前を挙げた三条市経塚山遺跡では、朝鮮半島製の板状鉄斧^{いたじょうてつぼ}が発見されています。長野県佐久市北一本柳遺跡^{きたいつぼんやなぎ}でも、朝鮮半島製鉄斧2点が堅穴住居から出土し、上田市上田原遺跡^{うえだはら}では鉄の矛^{ほこ}がみつかっています。長野県木島平村根塚遺跡^{ねづか}では、全長72cmもの長さをもつ朝鮮半島製の渦巻飾付鉄剣が見つかっています。長野市浅川端遺跡^{あさかわばた}では、青銅製の馬形の帯金具（バックル）^{おびかなぐ}も出ています。これらの資料は、朝鮮半島製の鉄製品や青銅器が山陰・北陸ルートで新潟や長野県域まで流通する物流のネットワークができていることを証明しています。また、根塚遺跡の鉄剣は、剣のにぎりの部分が剣身の軸とずれる特徴をもっており、それは縄文時代から弥生時代まで東日本で製作された儀礼用の剣のにぎり部の特徴を継承したものです。そのことから、この鉄剣は長野県域北部周辺のいずれかの地域からの特別注文に応じて朝鮮半島で製作されたのではないかとみる見解も出されています。このように、この弥生後期後半という時代は、大陸系の物資や情報が著しく広範囲に流通した時代です。しかし、大陸系の先進的な文物や情報の質・量が、日本列島内の地域ごとに揺れ幅があるかどうかとなるでしょうか。『後漢書』に「倭国大乱」と記された社会的緊張は、いくつもの要因が考えられますが、広域にわたる物資や情報の流通とその揺らぎのなかで生まれたと考えることもできるでしょう。文化人類学・民族学の分野では、戦争も交易の一形態を伴うとみる意見があります。

わが山元遺跡の時代はそのような激動の時代でありました。それが2世紀です。そのあと100年あまりの経過ののち、新潟県北部では胎内市城^{たいないしじょう}の山古墳が築かれます。近畿地方のヤマト政権と密接な関係をもつ有力首長が出現したことが明確に分かります。さらにそれから300年あまり下ると当地域^{いわふねのさく}に磐舟柵が設けられ、古代律令国家の東北経営の前線が設けられます。弥生時代後期の高地性集落である山元遺跡を、このように数百年にわたる歴史の流れの中で考えることも、また大切なことであろうと思います。それではみなさん、ご清聴、ありがとうございました。

【引用文献】

新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団 2009『県内遺跡発掘調査Ⅰ 山元遺跡』

横浜市埋蔵文化財センター 1991『大塚遺跡 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅱ』



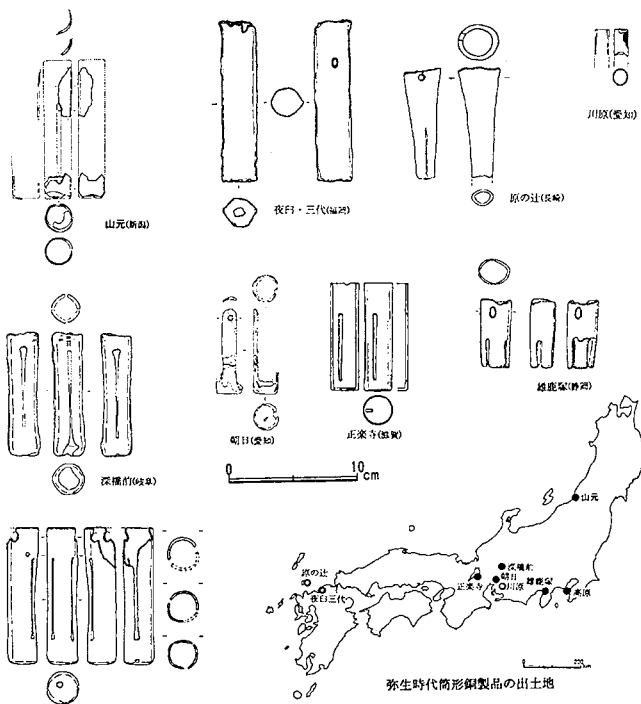
第1図 環濠集落／横浜市大塚遺跡（横浜市埋蔵文化財センター1991）

謹便共殺之建武中元二年倭奴國奉貢
 朝賀使人自稱大夫倭國之極南界也光
 武賜以印綬安帝永初元年倭國王帥升
 等獻生口百六十人願請見相靈間倭國
 大亂更相攻伐歷年無主有一女子名曰
 卑彌呼年長不嫁事鬼神道能以妖惑眾
 於是共立爲王侍婢千人少有見者唯有
 男子一人給飲食傳辭語居處宮室樓觀
 城柵皆持兵守衛法俗嚴峻自女王國東

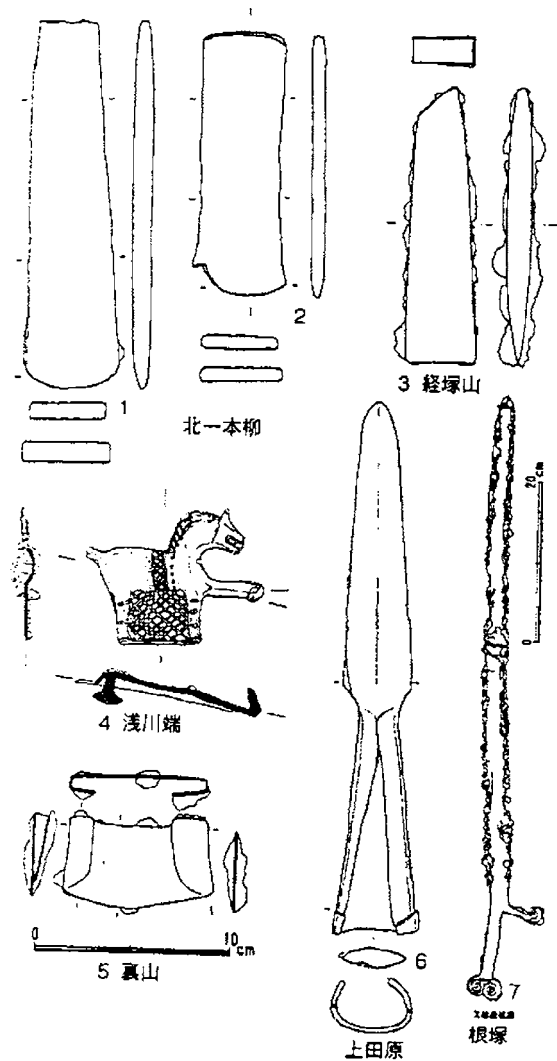
第2図 後漢書倭伝の倭国遣使等記事



第3図 山元遺跡のガラス玉（新潟県教委ほか2009）



第4図 筒形青銅器の出土地



第5図 大陸系鉄器・青銅器（5以外）

基調講演Ⅲ 「山元遺跡と北方世界」

秋田県埋蔵文化財センター前所長

こばやし まさる
小林 克

はじめに

こんにちは。きょう私に与えられましたタイトルが「山元遺跡と北方世界」というタイトルで、副題には『狩猟採集民は農耕社会に「南下」したか?』をつけております。30分ちょっとなんです、秋田県から「南下」してまいりました。この副題ですが、後ほど紹介しますが、北海道と同じような土器を持った人たちの墓地が秋田県で発見されて、その発掘を担当したことがありました。そのときにですね、『農耕社会に「南下」した狩猟採集民』（1991）というタイトルの論文といますか、最初の報告みたいなものをある雑誌に書いたことがありました。それが私にとってはもう25年も前のことですが、こうしたことを考えるきっかけになったわけなんです。本日はそのつながりでこの山元遺跡のほうにも寄せていただいていると思いますので、改めてその問題を考えてみたいと思います。

1 小学生への質問と歴史教科書の記述

ひとついきなりこういった小学生への問いかけを出したんですが、左の上の絵は今から10年ぐらい前の小学校6年生の教科書にある絵です。皆さんのお手元には、資料として現在の教科書を計8ページ分、配布してあります。多少違ってはいるんですけども、全体としては非常に似た感じになっています。10年前には6年生が歴史にふれる最初の部分が、「米づくりの始まりと国の統一」という単元だったんです。今



10年ほど前の小学校6年生社会（上）の第1単元（大阪書籍2007）

▶ 小学生への問い：
「なぜ、古墳がないのか？」



（教育出版2015、19頁「前方後円墳の分布」に加筆）

第1図 小学6年生の歴史教科書と前方後円墳の分布

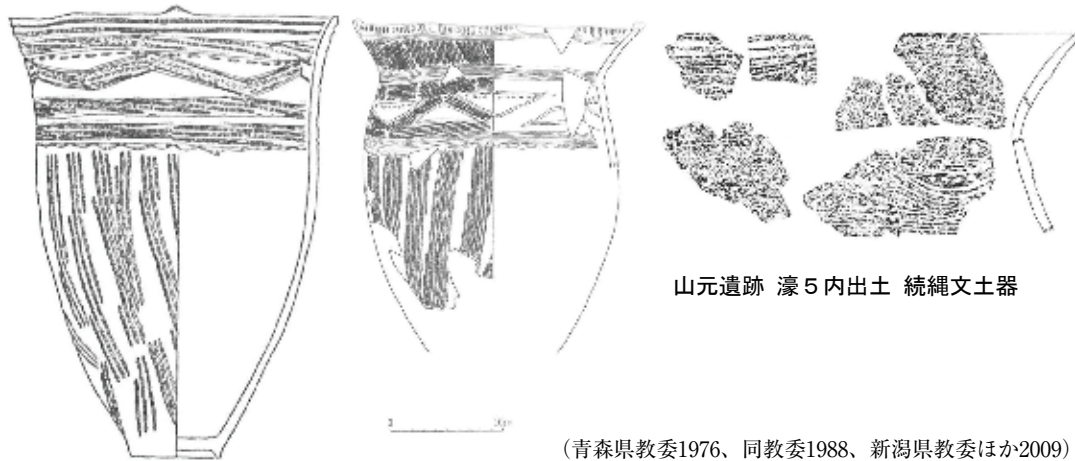
現在は「縄文のむらから古墳のくにへ」となって、10年の間に縄文時代が復活したんですね。復活はしたんですが縄文時代から弥生時代、そして古墳時代への変化を「むら」の状態から国の発生・成立・統一という観点で説明する、そういう構成であること自体に変わりありません。そして、このあたりを勉強した子供たちが私の職場であった埋蔵文化財センターに見学にやって来ます。下には先ほど滝沢さんですか、石川先生のほうからも話がありました古墳の分布図を示してありますが、これでおわかりのとおり山元遺跡の南から西に九州まで、前方後円墳、古墳時代のなかでも古い時期の古墳がずっと分布しています。これは今現在の教科書にも載っています。こうした知識もあわせて子供たちに伝えられているわけです。ところが、新潟県や宮城県の北部も含め東北地方、秋田県、岩手県、青森県、北海道には古墳がない。それを「なぜ、古墳がないのか？」と問いかけたんですね。答えは最後に申し上げますけども、とりあえずこのあたりが、子供たちが勉強する日本の歴史の最初の部分だということをご理解いただければと思います。

ちなみに今現在は、例えば縄文時代の暮らしでは、人々は力をあわせて野山の動物、木の実、海や川の魚、貝などを手に入れて生活していた、とかですね、だけれども何日も食べ物が手に入らなかったことも多かった、とか、あるいは生活に必要なものは骨や土や木を使って自分たちでつくっていた、そうした暮らしの様子が青森県の^{さんないまるやま}三内丸山遺跡の写真とともに説明されています。その後、先ほどの^{よしのがり}吉野ヶ里のようなむらを説明するには、米づくりが広まってきたということになるんですね。そして、米づくりが広がっていくと、人々の生活の様子も大きく変わってくると説明されます。弥生時代から倉庫に蓄えられていた食料や種もみ、田や用水、鉄の道具などをめぐって、むらとむらとの間で争いが起こるようになった、これは本日の講演のなか「^{かんこう}高地性環濠集落」ということで滝沢さんも、あるいは石川先生も説明されたとおりです。こうした戦いが起こるようになると、やがてむらの指導者が出てきて、強い力を持ってむらを支配する豪族となっていった。中には王と呼ばれるような人も出てくる、と続きます。そして、朝鮮半島との関係を石川先生が説明なさったんですけれども、米づくりが広がったころ朝鮮半島から日本列島に渡ってきて住みつく渡来人が大勢いて、その人たちが鉄器や農具、土木技術、あるいは焼き物などの進んだ技術を日本にもたらした、と書かれています。また、古墳時代のことを説明するには、例えば「巨大古墳と豪族」という項目があり、日本各地には小山のように大きな古墳と呼ばれる遺跡が残っていて、これらは3～7世紀ころに各地で勢力を広げて国をつくり上げた王や豪族の墓であること。さらには、古墳を築くにはすぐれた技術者を指図し、多くの人々を働かせることのできる大きな力が必要だったこと。古墳にはさまざまな形があって九州から東北まで全国的につくられ、その中でも前方後円墳には古いものや大きいものがたくさんある、と述べられています。

最後に国の統一にかかわる部分ですね、10年ぐらい前には単元名そのものにあった項目ですが、奈良盆地を中心とする大和地方により大きな力を持つ国があらわれ、この国の中心になった王を大王、後の天皇と呼んで、その政府を大和朝廷と呼んだと書いてあります。さらに、大和朝廷は5世紀から6世紀ころには九州地方から東北地方などの豪族や王たちを従えるようになったと、統一の過程が説明されます。以上が、子供たちが勉強する最初の単元の内容です。

2 山元遺跡の北方系土器と北海道続縄文式土器

それでですね、山元遺跡の話になるんですけれども、北方世界を象徴するような遺物として、遺跡をめぐる^{ほり}濠内部から出土した^{ぞくじょうもん}続縄文土器があります。右下は今現在展示されている村上市の歴史館で撮影した写真なんですが、展示をざっと見て、「東北系の弥生土器」と表記された土器が非常にたくさんありました。村上市内から出ているのはほとんどそうですね、「^{てんのうやま}天王山式」という土器が滝沢さんも説明の中にもありましたけれども、それも含めてほとんどがそうです。土器のつくり方なんかを見ますと、この続縄文と言われている土器も非常によく似ているように私は思いました。



山元遺跡 濠5内出土 続縄文土器

(青森県教委1976、同教委1988、新潟県教委ほか2009)

青森県
六ヶ所村千歳 (13) 遺跡

青森県
六ヶ所村上尾駮 (2) 遺跡

第2図 山元遺跡出土続縄文土器と青森県の類例

この土器が一体どんな土器に比べられるのかということで、探したところが図の左の2つの土器だったんです。どちらも青森県で見つかった土器で左側が六ヶ所村の千歳 (13) 遺跡、右側が同じ六ヶ所村の上尾駮 (2) 遺跡です。青森県の東側に下北半島があって、その半島の付け根に小川原湖という大きな湖があるんですが、どちらもその湖の北のほうにある遺跡です。恐らく全体が残ればこのような土器だったと思われます。このあたりはですね、後ほどご説明します青森県、秋田県ですとか、岩手県あるいは新潟県も含め、「江別C1式」「江別C2式」(この「江別」を「後北」と呼び変えることもあります)、あるいは「北大式」という続縄文土器が分布するんですが、そうした土器とはちょっと趣が違ふ土器ではありません。ただし、青森県の土器ではあるんですけども、津軽海峡を挟んだ北海道の南部、渡島半島とですね、そして東北地方北端を結ぶあたりに特徴的な土器であることには間違いはありません。

北海道では考古学的な年代をどのように区切っているかということ、北海道埋蔵文化財センターの20年ほど前の刊行物から引いた年表ですが、このように本州の弥生時代と古墳時代にまたがるあたり、ここに続縄文時代という区分を置いています。そして北海道も非常に広いですから、右のほうにあるようにですね、続縄文式と言われる土器は、東や北、あるいは渡島半島から積丹半島までの間ですね、あちこちか

本州の時代区分	年代 (西暦)	北海道の時代区分
旧石器時代	BC 20,000	旧石器時代
縄文時代	BC 10,000	縄文時代
	BC 8,000	
	BC 4,000	
	BC 3,000	
	BC 2,000	
弥生時代	BC 1,000	続縄文時代
	BC 300	
古墳時代 (原形時代) 古墳時代	400	オホーツク文化期
平安時代	600	擦文時代
鎌倉時代	900	
室町時代	1,200	アイヌ文化期
	1,300	
江戸時代	1,500	中世
	1,900	近世
明治・大正・昭和・平成	1,900	(近代・現代)



(大沼忠春 編2004、図320-1加筆)

(北海道埋文1994、170頁「北海道史年表」加筆)

第3図 北海道史年表と道内各地の続縄文文化

さまざまな土器として出ている。要するに南のほうから見ますと、縄文文として北海道を一括するんですが、その北方系土器もさまざまに分かれるんだということです。この年表を見ていただいておりますとおり、縄文時代は本州でも同じですね。ところが、北海道は縄文時代の後擦文時代、そしてアイヌ文化期というふうにつながっていきます。北海道はやはり、どうしてもアイヌの人たちを考えなければならぬですね。歴史を考えるとアイヌの人たちが大きな前提になります。本州の北端についても同じようなことが言えるかと思うんですけれども、まずそのようなことをご承知おきください。

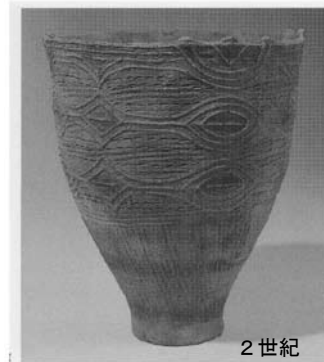
北海道内の縄文土器のいくつかを見ていきますけれども、これは江別市の元江別1遺跡の紀元前1世紀ぐらいの土器です。やはり弥生土器、特に西日本のそれとは全く趣が違う土器だということがわかります。あるいはこれはもう少し新しく江別市の町村農場遺跡、坊主山遺跡から出ている江別C1式あるいはC2式土器です。見ておわかりのように、細い粘土の紐を張りつけた区画の中に縄文を転がす特徴があります。これはもっと新しく北大式という土器ですが、口の部分に突瘤文という細い棒を差し込んで文様をつくります。北海道は伝統的にこの種の文様がたびたび現れるわけですが、これはそのなかで一番新しい土器になります。



前1世紀
縄文文前期 恵山式土器後半（江別市 元江別1遺跡）

3 鉄製品問題と本州の縄文文化遺跡

それで、私が発掘調査に従事した秋田県能代市にある寒川Ⅱ遺跡ですが、ここから6つの土坑墓が見つかりました。そのうちの幾つかをご紹介しますけれども、2号墓はこのように楕円形に穴を掘りまして、その長軸の端に2つの柱穴があったんですね。ここと、それからこの土器の手前です。そして片方の柱穴の奥壁には、2つの土器を納めた別の掘り込みがありました。なかからは先ほどの江別式の破片、こちらは本州側のものととらえられている土器です。埋まった土のなかからはこういった刀子ですね、樹皮巻の刀子が出ました。柄の樹皮巻部分はこんな感じです。それから3号墓ですけれども、これも片方の隅に土器が埋められていました。こうした江別式の土器です。内側から外側にこんなふうな袋状に突き出しのある土器です。北海道では注ぎ口となる例があるんですけれども、これは袋状に突き出してはいるんですがなぜか穴があいていません。やはり長軸の両端に柱の穴がありまして、ここに土器が置いてありました。そして同じような4号墓ですがやはり長軸の端に土器がおいてあって、その土器の手



2世紀
縄文文後期 江別C1/C2式



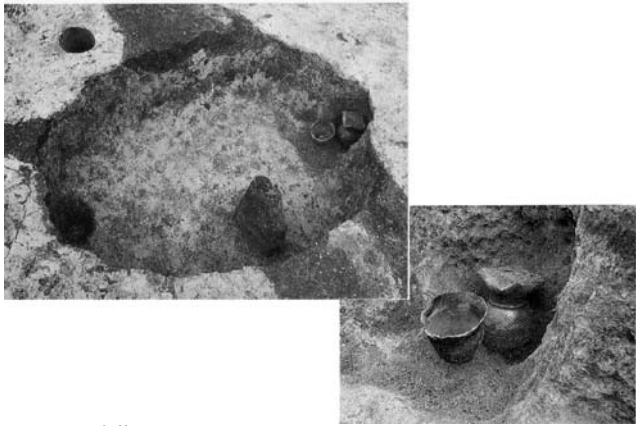
3～4世紀
(左：江別市町村農場遺跡、右：同坊主山遺跡)



5世紀
縄文文後期 北大I式（札幌市 K39遺跡）

第4図 北海道内の縄文土器（恵山式・江別式・北大式）

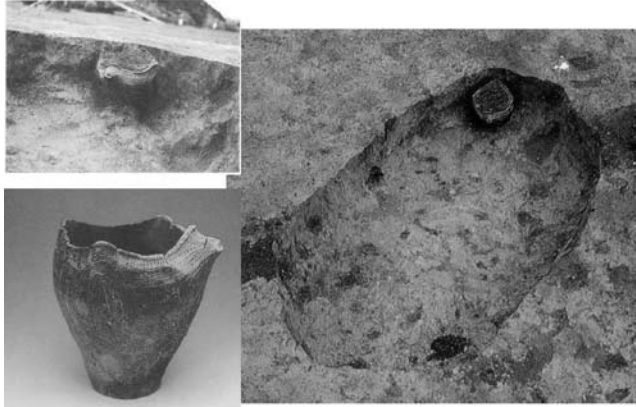
2号土壙墓



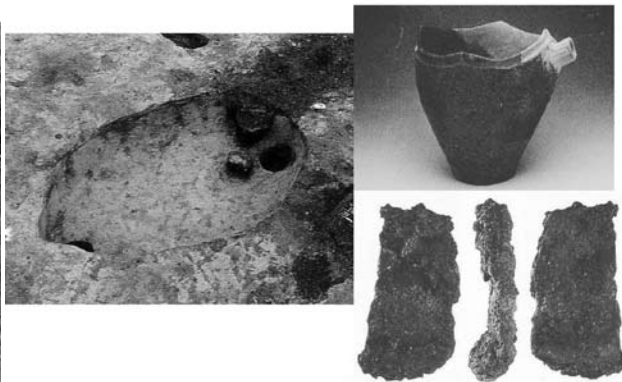
2号土壙墓 土器と刀子



3号土壙墓と土器



4号土壙墓 土器と鉄斧



(秋田県教委1988)

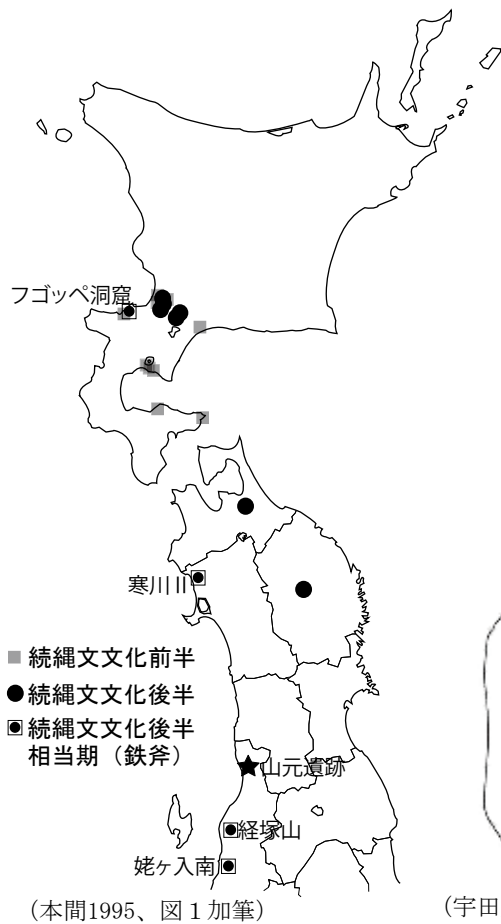
第5図 能代市 寒川Ⅱ遺跡の続縄文文化土壙墓と出土遺物

前には鉄製の斧がありました。後でまた説明しますが、寒川Ⅱ遺跡の墓からは先ほどの石川先生の話にも出てきた鉄の製品が出ていて、続縄文文化の鉄製品として非常に重要だと思います。

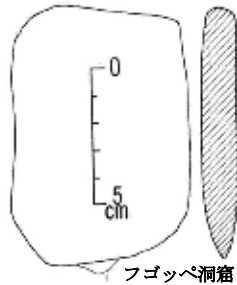
それでは北海道での鉄製品はどうかというですね、石狩低地帯と渡島半島に多いんです。そして本州は数は非常に少ないんですけども、青森県の^{もりがさわ}森ヶ沢遺跡、それから岩手県盛岡市の^{えいふくじやま}永福寺山遺跡で出ています。先ほどの寒川Ⅱ遺跡、江別式ですから続縄文文化の中では新しいんですが、北海道ではそれよりも早い段階、続縄文文化前半に鉄の製品が出ています。これはどういうふうにかえたらいいのか、私もよくわかりません。先ほどの石川先生の話のように鉄製品は古墳文化、あるいは弥生文化の本拠地である西から来ていると考えていきますと、北へ行くに従って時代は新しくなる理屈になろうかと思うんですけども、しかし石狩低地帯ですとか渡島半島の鉄製品は非常に早い段階にあたります。このあたりはこれからの大きな課題だと思います。そのうちの幾つかですが、尾白内貝塚では石の上に鉄さびの状態^{おしろないかいづか}でついていた製品が報告されています。実際にはさびの固まり^{うす}のなかに鉄の製品があるんですが、それが石についたわけですね。それから、これは伊達市の有珠^{うす}という貝塚から出てきた動物骨ですが、それにカットしようとした傷が付いていました。断面は非常に鋭い工具によると考えられ、恐らく鉄器でなければできない傷といわれています。

それから、もう少し新しくなって町村農場遺跡でこのような鉄剣が、それから、斧としてはですね、フゴッペ洞窟で出た記録があります。本州日本海側のほうに行きますと、寒川Ⅱ遺跡とかですね、先ほど説明のありました新潟県の^{きょうづかやま}経塚山遺跡ですとか、^{うぼがいりみなみ}姥ヶ入南遺跡で鉄斧が出ています。山元遺跡ではそのような鉄斧は出ていないんですけども、先ほど来の説明にありますように剣が出ているということで、これは非常に重要なことと思っています。

それから、次の時期には秋田県の^{みやざき}宮崎遺跡あるいは鶴岡市にあります^{やまだ}山田遺跡、そういったところで北

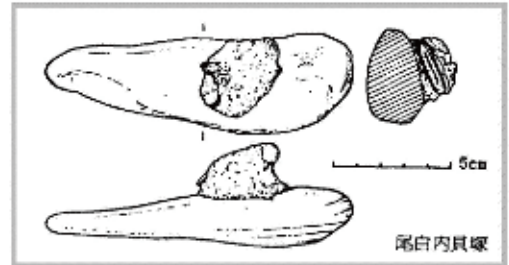


(本間1995、図1加筆)



フゴッペ洞窟

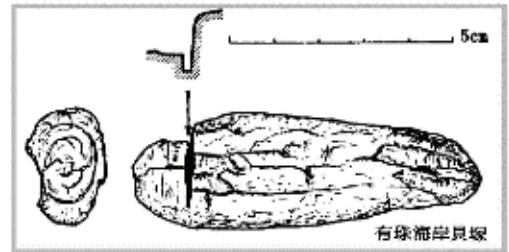
(宇田川 編1984、第10図)



尾白内貝塚



町村農場



有珠郡岸貝塚

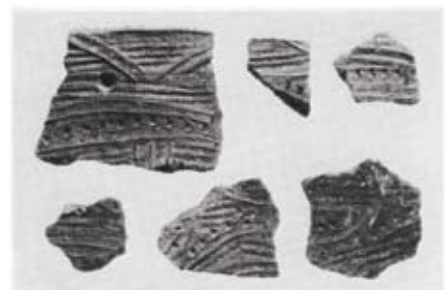
(菊池1984、8-12図)

第6図 北海道～東北北部、続縄文文化の鉄製品と関連遺物

大式土器が出ています。それから、盛岡市の永福寺山遺跡では、やはり寒川Ⅱ遺跡と同じような土坑墓があったのですが、土坑の周囲に柱の穴があって上屋がかかった状況がわかりました。これはそこから出た江別式の土器になります。ここからは、鉄製の鎌が出ていて、ほかに剣が出ていたという記録があるんですが実物の所在はわからなくなっています。それから新潟県内では、旧西山町にありま^{うちこし}す内越遺跡で江別式の土器が出ていますが、これが寒川Ⅱ遺跡の土器の一つ前の段階の江別C1式土器^{たいない ひょうえ}ということ^{ひょうえ}です。それから、中条町、現在胎内市の兵衛遺跡でもやはりC1式に関係するよう^{たいない ひょうえ}な、少し古目の江別式の系列の土器が見つかっています。それから新潟県内で一番南、ということ^{ひょうえ}は、日本海側で一番南ということになりますけれども、上越市^{しもぼ}の下馬場遺跡で江別式土器が見つかっています。

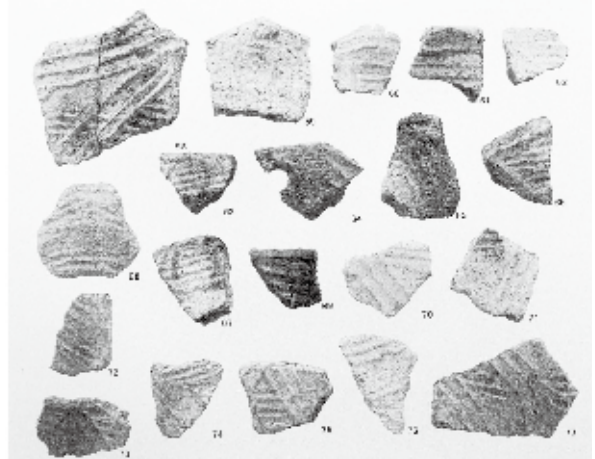
4 日本海沿岸の地理とアイヌ語地名

北海道と本州の関係を考えるときに、能登半島から北は大体60キロから90キロ間隔に島が連なる地理上の特徴が注意されます。能登半島から佐渡あるい



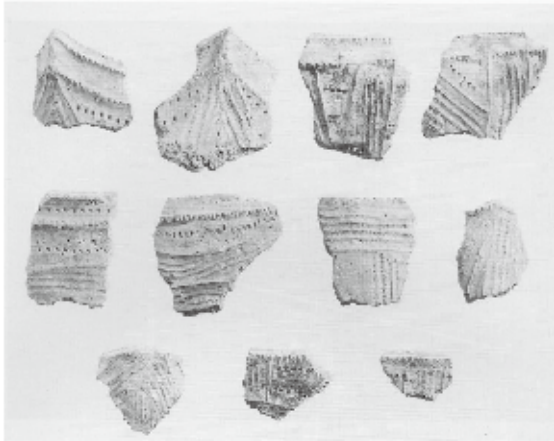
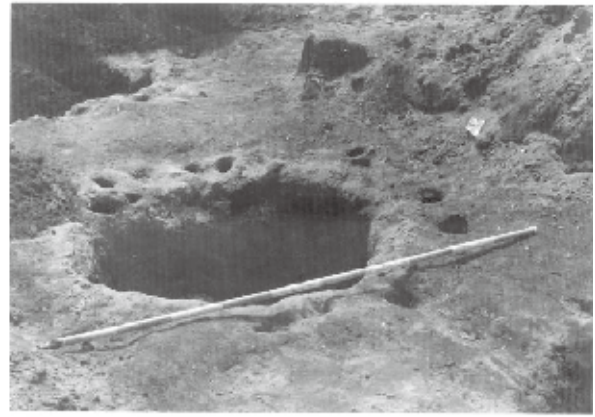
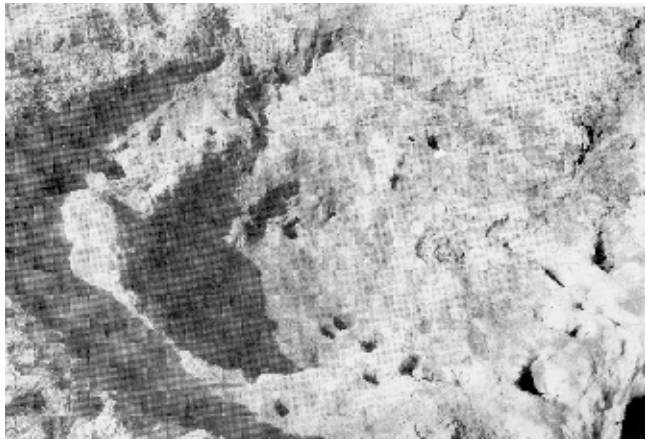
柏崎市 内越遺跡

(新潟県教委1983、図版10)



胎内市 兵衛遺跡 (中条町教委1998)

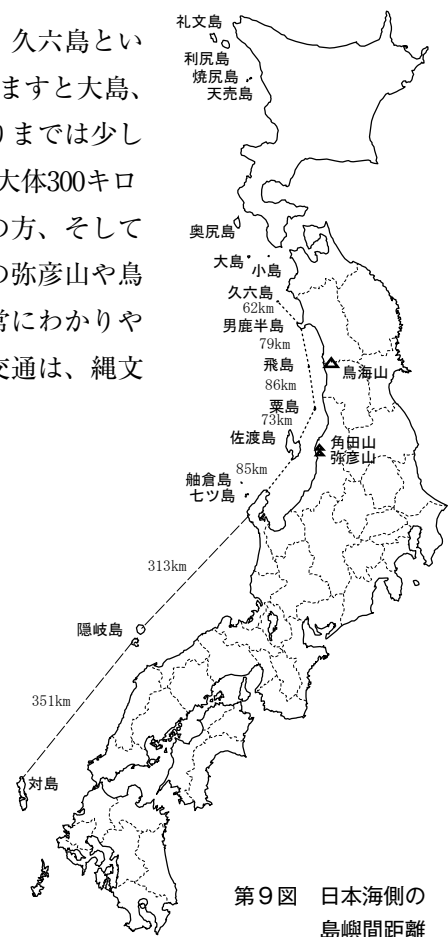
第7図 新潟県内の江別式土器



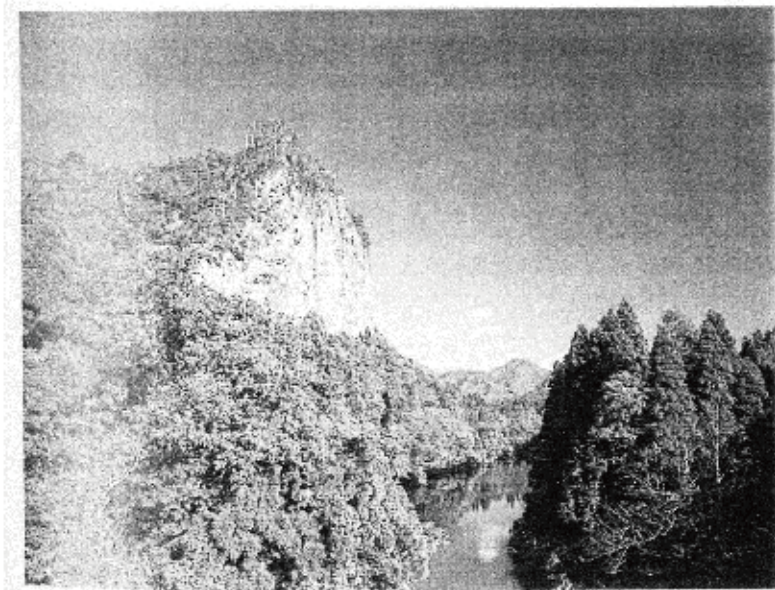
第8図 盛岡市 永福寺山遺跡の土壙墓と江別式土器・鉄製鎌（盛岡市教委1997）

は粟島、それから飛島、男鹿半島、そして非常に小さい島ですが、久六島というのが青森と秋田の県境にあります。さらに、渡島半島の西に行きますと大島、小島というように並んでいます。ただし、奥尻島から稚内のあたりまでは少し間隔が開きます。これを西と比較しますと、能登半島と隠岐の間は大体300キロ以上あるんです。ですので、能登半島を境に東西を比較すると東の方、そして北に向かってがはるかに通り易かった、と言えるでしょう。新潟の弥彦山や鳥海山、そして男鹿半島は島伝いに航路をとる人たちにとって、非常にわかりやすいランドマークだったでしょうし、この日本海側北半での海上交通は、縄文時代以来非常に活発だったことが推測されます。

それから、アイヌ語で解釈ができる地名が青森県とか、秋田県、岩手県にはたくさん残っていて、実は新潟県にもあります。三条市の五十嵐（イカラシ）川です。五十嵐はイガラシと濁るのが普通ですがここでは濁らず、その語源はアイヌ語の「インカルウシ」にあると説明されます。「インカル」というのは、物を見る、そして「ウシ」というのは場所という意味ですが、これがあわさったものが「イカラシ」だということですね。三条市には「伊加良志（イカラシ）」という神社もあります（村崎2012）。このスライドは村崎恭子先生の論文から引いたものですが、これと同じ語源の遠軽（エンガル）町が北海道にあり、そこには瞰望岩という見晴らしのきく地形があって、そして、



第9図 日本海側の島嶼間距離



【写真1】 八木ノ鼻と五十嵐川 高さ200m 新潟県三条市



【写真2】 舞臺岩 高さ90m 北海道紋別郡遠軽町

(村崎2012、写真1・2)

第10図 三条市八木ヶ鼻と遠軽町展望岩

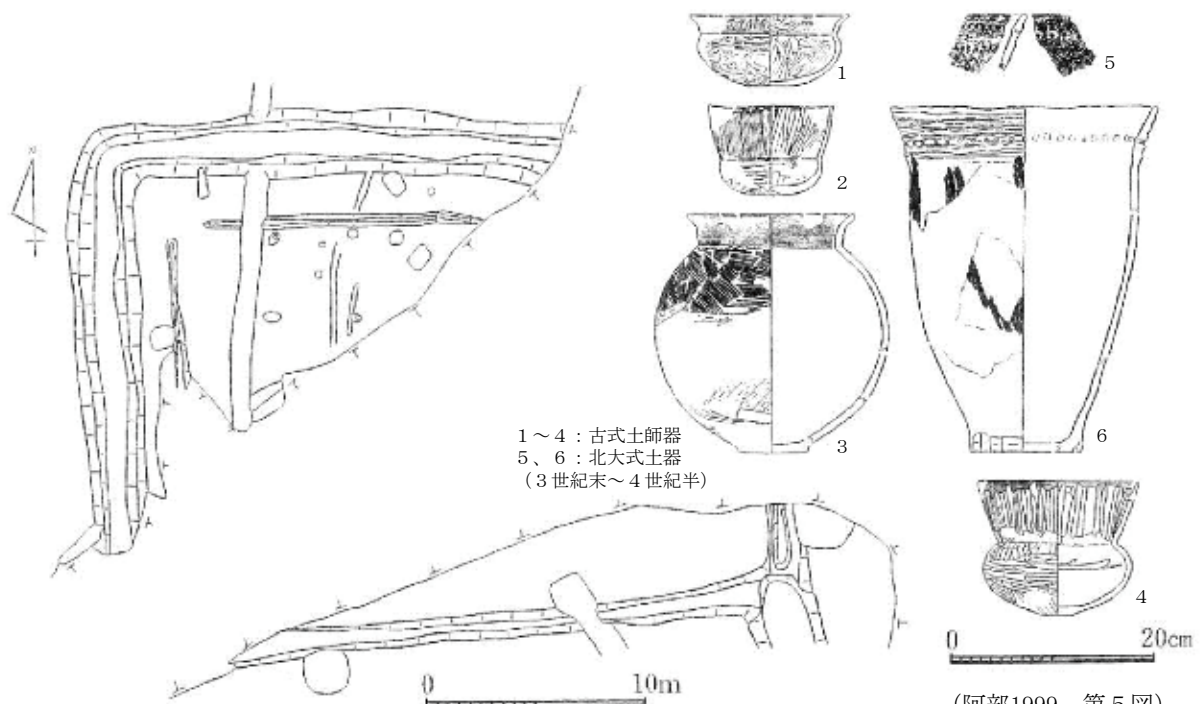
『続日本紀』神護景雲元年(767)十一月乙巳条、「栗原」建郡の記事
『続日本紀』神護景雲元年(769)六月乙巳条、「伊治村」の名称

元来「イジ」の地名→「伊治」→「コレハル」⇒「クリハラ」の読み変化→「栗原」

宮城県北部に元々あった読み地名「イジ・イズ・エゾ」を忌避し和名に変更、
しかし、人名は伊治公皆麻呂(イジノアザマロ)として残す。

(児島2009)

第11図 続日本紀の「伊治」「栗原」



1～4：古式土師器
5、6：北大式土器
(3世紀末～4世紀半)

(阿部1999、第5図)

第12図 伊治城跡豪族居館壕内の古式土師器と北大式土器

五十嵐川には八木ヶ鼻という非常によく似た地形があります。これは、金田一京助先生も早い時代に論文に残されていますし、アイヌ語地名の研究で有名な山田秀三先生も述べています。全く景観が一緒なんです。アイヌ語で「ものを見る」意味の同じ景観地形が、北海道にも新潟県にもあるわけです。

ところでこの地名に関してですが、印象的な著作を札幌学院大学の児島恭子先生が最近に出されています。『エミシ・エゾからアイヌへ』という本ですが、なかに続日本紀にある「栗原」と「伊治」という現在の宮城県北部の地名に関する記述があります。この二つは同じものなんですね。元来あのあたりは伊豆（イズ）沼という沼があるように「イジ」と呼ばれていた。それにこの「伊治」という字を当てたんですね。国史跡の伊治城跡という城柵官衙じょうさくかんがの遺跡もそこにあります。しかし、その地を律令政府が版図に繰り入れる時には「伊治」を「コレハル」と読ませて、それが「クリハラ」に転訛し、もう伊治とは呼べない「栗原」に変わったんだという説明です。支配を進めてゆく過程で、宮城県北部にもともとあった地名をそう呼び直したんだけど、しかし、そこにいる人たちは例えば伊治公砦麻呂（イジノアザマロ）、この人は反乱を起こした人ですが、はっきりと在地であることがわかるよう従来の「イジ」の名を冠して、すなわち差別して呼ぶわけです。こういった構造がですね、「エゾ（＝イジ、※筆者註）は土地の名であった、国内に組み込んだ地域の名を大和化し、その土地の住民はまだエゾとするやり方は、国内とした蝦夷地を北海道と命名して住民を土人・旧土人と読んだ近代に相似形が見られる」（児島2009）と述べられています。少し大げさかもしれませんが、今読み返しても戦慄さえ感じます。

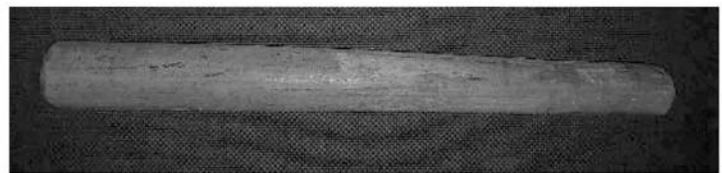
そして、この続日本紀に書かれる以前、大体300年ぐらい前の考古学的事実ですが、伊治城跡に重なって見つかった古墳時代の豪族居館からは、古墳時代の早い段階の土師器と北海道系の北大式土器と一緒に出土しているんです。古代と近代との関係を児島先生はお書きになったんですが、またさらにそれをさかのぼって古墳時代にも比較できる考古学的状況があって、北海道に住むアイヌの人たちとのかかわりも考えることができると思われまます。「歴史は繰り返す」と添えました。要するに教科書で勉強する「国の統一」というのは、実際はこのように考えていいんじゃないかと思えます。



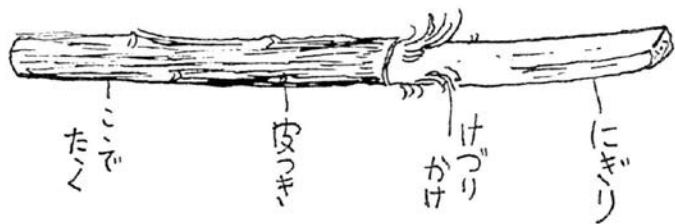
秋田・雄物川 「アバ」（筆者撮影）

5 本州日本海側のサケ文化

地名ついでにこれは本州日本海側のサケ遡上を図にしたものですが、4万匹を超えるようなサケがこちら村上市の三面川、それから北の鳥海山麓の遊佐町にある牛渡川、それから富山県の庄川に毎年上ってきます。今は遡上の季節でまちへ行くと、村上市のことですからたくさんサケがぶら下げて干してあります。ところでこうした日本海側のサケ遡上の地域では、「ナヅチ」「タタギボウ」という棒でサケの頭をたたいて捕らえるという漁を行っているんですね。私が住んでいます秋田県雄物川でも網



新潟・三面川 「タタキボウ」（筆者撮影）



北海道アイヌ 「イサパキクニ」（知里1959）

第13図 サケたたき棒

の浮子の「アバ」を使い、網でとったサケの頭をたたくんですね。こちらは、昨日、イヨボヤ会館に行ってきたんですが、その展示にあったサケの頭をたたく棒です。それからもう一つ、これはアイヌの人たちが使うイサパキクニというサケたたき棒です。本州側ではそのサケたたき棒による習俗が青森県から新潟県の範囲の中にあります。

そして山元遺跡のこの場所は「助^{すけぶち}測」という地名ですけれども、この助というのはサケのことですね。恐らく測というのは、サケが産卵をする場所という意味だと思われまます。助川という名の川も秋田県のあたりですと幾つかあります。そして、山形県には鮭川村なんていう村もありまして、サケが登るということを頭に冠^{さけのぶ}して鮭延氏という戦国武将もいました。

6 小学生の答え

それで、冒頭にお約束した小学生の答えということになるんですけども、「なぜ、古墳がないのか？」という質問に対し小学生はですね、じっと考え絞り出すように「〇〇県は遅れていたからだ」と言ったんですね。その様子には思わずたじろいでしまったんですが、これは正しい答え、全く正しい答えなんです。小学生の歴史参考書には古墳の波及を示す地図があります。冒頭の古墳分布図を重ねると「ヤマト王権」と書かれた大和の地を中心に4世紀、5世紀、6世紀とだんだんと広がっていて、その外側には白ヌキの点の続縄文式土器を出した本州東北部の遺跡がある。古墳文化の側から見ればそれぞれの線から外れたところにあるわけですので、遅れているということ間違いがない。

しかしですね、弥生文化以来の稲作農耕社会を進んだものと見て、狩猟採集社会を遅れた社会として見る、こういう見方は本当に正しい歴史観でしょうか？これはやっぱり別に考えないといけない。古墳のない、あるいはきわめて数少ない

▶小学生の答え：
「〇〇県は遅れていたから・・・」



(学研教育出版2010、p41図加筆)

第14図 「ヤマト王権」の波及と本州続縄文土器出土遺跡

青森、秋田、岩手そして新潟や宮城の北部は、弥生古墳文化といえるのだろうか、そう呼ぶことで小学生にとって自分たちの生まれ育つ場所が「遅れた」地域だと暗黙に伝えているのではないかと、考えてしまいます。そうすると、私は『農耕社会に「南下」した狩猟採集民』というタイトルで25年前に寒川Ⅱ遺跡を報告したんですけれども、本当に「南下」といういい方が適切かどうか疑問となります。そして農耕社会、狩猟社会と分けるとしても、本州北部の東北地方あるいは新潟県や宮城県の一部も含めて農耕社会と呼ぶことは、本州以南全体を見渡した時に「進んだ」「遅れた」という格差を容認する見方に繋がっていたのではないかとこの反省が浮かびます。

おわりに

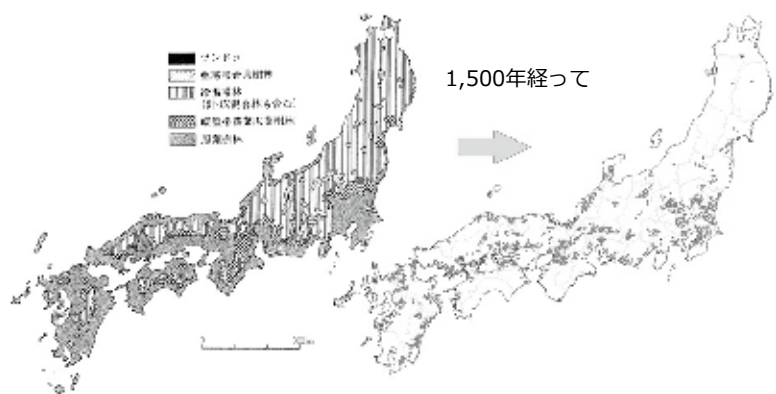
じゃ、どうすればいいか。やっぱりサケです。村上市といえばサケですが、山元遺跡の時代は「はらこ井」文化の時代とでも呼ぶべきではないか。米もある、けど上にちゃんとサケのタマゴがのっている。こちらは、きのういただいた「はらこ井」です。おいしかったですね。私にとってはちょっとボリュームがありすぎたんですが・・・。



第15図 村上市名物「はらこ井」

弥生古墳文化というのは、米づくりが生み出した政治的権力で統一国家に向かう文化、そして縄文文化というのは、サケ遡上のような縄文時代以来の環境に適応した伝統的文化である、ということを経験地元の名物になぞらえ教えることができる。そして、小学生にはその両方を教えることで、自らの歴史の公平な見方を伝えることができる、と思います。山元遺跡が営まれた時代を国の歴史としてではなくてですね、そこに暮らす今の人々に繋がる地域の歴史、そして生態系への適応史、要するにサケをとって暮らしている文化がいまだに続いているわけですが、そうしたものとして見るのが重要ではないかということで、私の話を終わらせていただきます。時間を過ぎてしまい申しわけありません。ありがとうございました。

※付記 縄文・縄文文化の「サケ・マス」文化論と弥生古墳文化の「稲作」文化論とを合わせもじって、「はらこ井」文化と呼ぶくらいでは抗しきれない深刻さが、小学生の答えにはある。ただし、環境に応じた伝統的文化が、教科書の歴史が教える時代文化と別にあることは説明できる。古墳分布を縄文時代晩期（約3,000年前）の植生分布に重ねると、一部例外はあっても、古墳のある地域は1,500年前の照葉樹林～暖温帯落葉広葉樹林帯に対応し、古墳のない地域は同じく冷温帯林に対応する。国家の政治史とは別に1,500年以上の長期の環境への適応が、古墳文化と縄文文化それぞれの成立に支配的に関わっていたことを物語る。



古墳の分布は縄文時代晩期の植生環境のうち照葉樹林～暖温帯落葉広葉樹林帯にほぼ重なる

第16図 縄文時代晩期の植生環境と古墳分布

【引用文献】

- 青森県教育委員会 1976『千歳遺跡（13）発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1988『上尾駮（2）遺跡：むつ小川原開発事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 秋田県教育委員会 1988『一般国道7号八竜・能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡』
- 阿部義平 1999『蝦夷と倭人』，青木書店
- 宇田川洋 1984『河野広道ノート 考古編5』，北海道出版企画センター
- 大阪書籍 2007『小学社会6年（上）』
- 大沼忠春編 2004『考古資料大観11 -続縄文・オホーツク・擦文文化-』，小学館
- 学研教育出版 2010『新日本の歴史①大むかしのくらし』
- 菊池徹夫 1984『北方考古学の研究』，六興出版
- 教育出版 2015『小学社会6上』
- 児島恭子 2009『エミシ・エゾからアイヌへ』，吉川弘文館
- 小林 克 1991『農耕社会に南下した狩猟採集民』『考古学ジャーナル』No.341
- 知里真志保 1959『アイヌの鮭漁—幌別における調査—』『北方文化研究報告』第14輯
- 中条町教育委員会 1998『兵衛遺跡・四ツ持遺跡—県営湛水防除事業に伴う発掘調査報告書』
- 新潟県教育委員会 1983『国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書 内越遺跡』
- 新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団 2009『県内遺跡発掘調査Ⅰ 山元遺跡』
- 北海道埋蔵文化財センター 1994『遺跡が語る北海道の歴史』
- 本間元樹 1995『続縄文文化の鉄器』『北海道考古学』第31輯
- 前山精明 1999『続縄文』『新潟県の考古学』1
- 村崎恭子 2012『アイヌ語地名で探る日本列島 第2回』『聚美』Vol.2
- 盛岡市教育委員会 1997『永福寺山遺跡』
- 安田喜憲 1980『環境考古学事始』日本放送協会

【ディスカッションでの引用文献】

- 藤 則雄 2002『北陸海退 the Hokuriku Regression -縄文後期～古墳期初頭の海水面低下-の提唱』『金沢星稜大学論集』第36巻第2号
- 藤 則雄 2003『縄文時代における自然環境（3）自然環境要因の相関性』『金沢星稜大学論集』第37巻第3号

基調講演Ⅳ「顕微鏡から山元遺跡を見る」

(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 さわだ あつし
沢田 敦

はじめに

皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました新潟県埋蔵文化財調査事業団の沢田と申します。よろしくお願いたします。山元遺跡は、以前、私が新潟県庁の文化行政課在職中に国交省との保存の協議を担当した、思い入れのある遺跡でして、こういう会で話をさせていただくことを、たいへん光栄に思っております。

本日の私の話は、「顕微鏡から山元遺跡を見る」という標題で、いったいどんな話なんだろうと思われる方も多いかと思います。私がやったのは、実際に石器を顕微鏡で見て、どういう使われ方をしたかを調べて、そこから山元遺跡の性格というか、遺跡における人間の行動にアプローチしてみようというものです。吉井さんの、今日の最初のお話にもありましたが、山元遺跡のお墓には剥片はくぺんといいまして、石を割りとして道具やその素材にしたカケラがたくさん副葬されていまして。それも同じ石から割りとられたものが、同じお墓の中からたくさん出土そうそう ぎれいしました。そこで、葬送儀礼、考古学の世界ではそのように呼びますが、要は人を埋葬する時に行われた何らかの儀礼ですが、出土した剥片がその葬送儀礼で使われたのではないかと考えたわけです。

1. 山元遺跡土坑墓出土剥片と分析の目的

新潟県の北部では、縄文時代の終わり、あるいは、弥生時代の前半位に、やはりお墓の中にたくさんの剥片を副葬する事例がいくつもあるんですが、山元遺跡の時期との間には、剥片副葬のない遺跡ばかりの時期があるので、山元遺跡の剥片の副葬が、以前からある伝統なのか、あるいは別のところからきた風習なのか、そのへんはまだよくわからないわけです。たとえば、先ほど小林さんからお話いただいた北の方、ぞくじょうもん統縄文文化の方のお墓の儀礼の影響があった可能性も否定できないということで、そのへんも考えていく必要があります。ただ、剥片だけだと、それ以上のことはなかなかわからないので、そこで、実際にその剥片が使われているのか使われていないのか、人がそこでどんな行為を行っていたのかを検討しようと考えました。もし、新潟に以前からあった、たくさんの剥片を出土するお墓と同じような儀礼が行われていれば、地域の伝統ということになりますし、他の地域のお墓に共通する儀礼が見られるならば、その地域から伝わった可能性が高い、ということになるわけです。

スライド（第1図）は、新潟県北部の代表的な剥片を埋葬する事例のある遺跡を示したものです。スライドは、山元遺跡の土坑墓集中域の写真ですが、1号土坑墓はこの土坑ですが、そこから出た剥片を顕微鏡で観察してみようと考えました。土坑墓は、全部で7基ほどあって、



第1図 山元遺跡周辺の剥片埋葬事例のある遺跡

縮尺1/1,000,000

そのほかに土器を埋めた埋設土器があります。それらから、いろいろな副葬品が出土していて、その中のひとつが、多数の剥片なわけです。この1号土坑墓から、同一母岩、もともと1個の石だったと考えられる多数の剥片などが出土しました。このような模様の入った非常に特徴的な石が母岩2です。この母岩2の資料が、剥片12点、くさびがたせっき楔形石器が1点の合計13点。それから母岩8、茶色い石なんですけど、それが13点ありました。母岩2には、分析はしていませんけど、剥片のほかに石鎌が2点出土しています。これは後程話に出てきますので、ちょっと覚えておいていただければと思います。石鎌も同じ石から作られたわけです。ほかにはガラス玉が出土していて、このガラス玉は割れた破片が出土しているんですけど、やはり顕微鏡で観察してどういう割れ方をしていたかも調べました。それからお墓から出てきたものだけを調べても、それはひょっとすると日常の用途で、日常の活動において使った、例えば、鮭を解体したとか、あるいは、木を削るのに使ったとかなどの日常生活に使った石器が副葬されたのかもしれないわけです。そこで、お墓から出土した石器と、日常生活で使われたと考えられる石器、すなわち要は一般の生活の場であった居住域から出土した石器と一緒に調べて比べるという方法をとりました。



第2図 石器使用痕分析の方法
上：顕微鏡観察、下：石器使用実験

2. 石器使用痕分析

さて、私が行った使用痕分析とはどのような研究方法なのかについてを説明しましょう。こんな感じで石器を顕微鏡で観察します（第2図上）。観察対象は、文字どおり石器に残された使用の痕跡、考古学の世界では「使用痕」といいますが、例えば、刃こぼれ、あるいは石器の表面が鏡のように光っているポリッシュと呼ばれる摩耗面、そういったものを見るわけです。ですが、ただ見ただけでは、それらの痕跡がどういう使われ方の結果できたものなのかはわからない。そこで、どうするかというと、実際に石器を作って使ってみます。これ私ですけれども、狩猟した人から分けてもらったイノシシの皮をなめしています（第2図下）。他にも、実際に自分で作った石器で肉を切ってみたり、木を削ってみたり、あるいはこんな風に皮をなめしてみたりと、実際に自分でやってみるわけですね。そして、自分でやってみた実験石器にどんな痕跡が付いているかを見るわけです。そうして、動物の皮をなめるとこういう痕跡、骨を削るとこういう痕跡が付く、というようなことがわかるわけです。それを基準として実際の石器の観察から、その使われ方を推定する。使用痕分析とはそういう分析方法です。

それでは、実際に石器を顕微鏡で見るとどんな風に見えるのでしょうか。まず、お墓から出土した石器の使用痕を説明しましょう。この写真は、ぼがん母岩2という、まだら模様の石なんですけれども、ちょっと非常にわかりづらいのですが、こういう角のところに白い斑点状のものが見えたり、あるいは表面が白く光ったりしています。もともと石器にはこういう表面が光るところはないのです。これは、ポリッシュとか光沢面と呼ばれている鏡の面のような、使用によって生じた摩耗面です。写真の光沢面の特徵から、

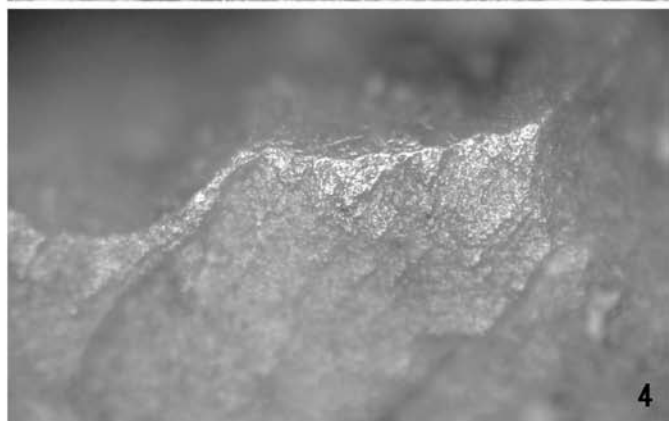
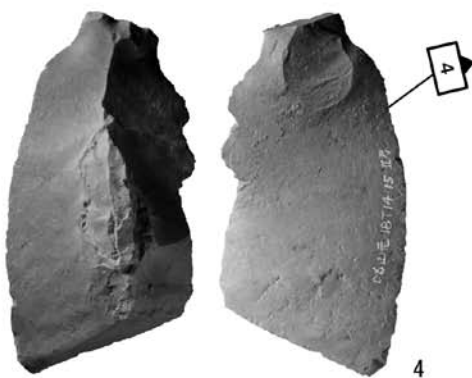
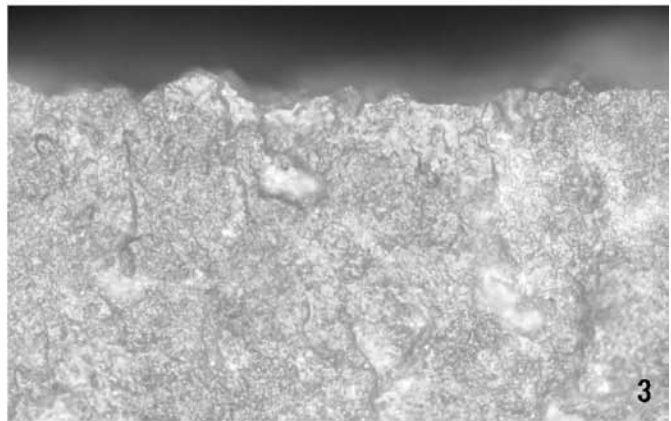
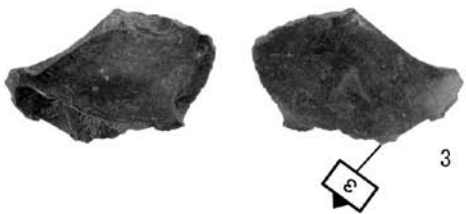
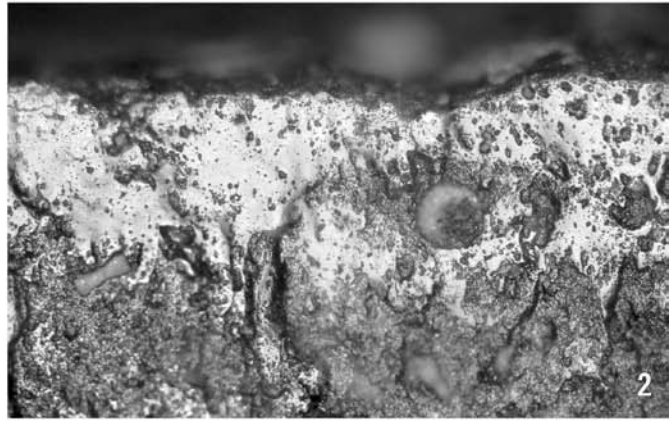
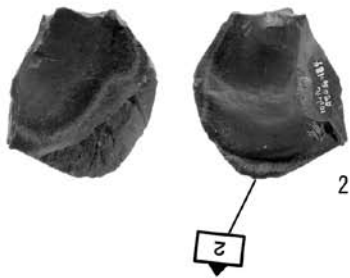
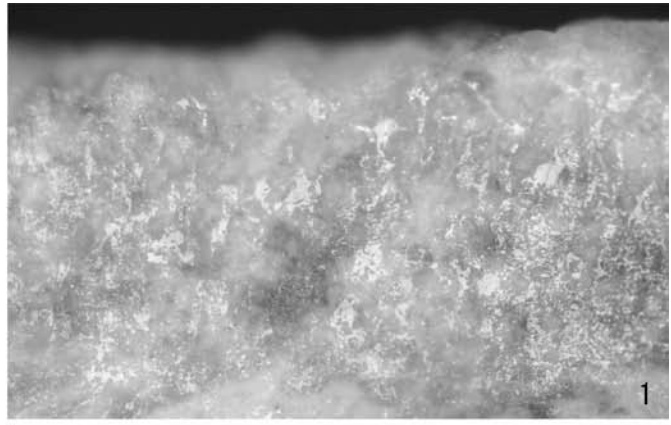
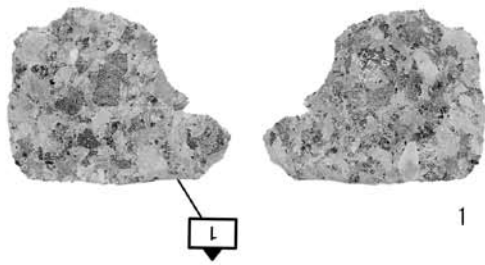
第1表 使用痕分析の結果

対象物		木		骨角		皮		未使用
		切断	搔取・削	切断	搔取・削	切断	搔取・削	
1号 土坑墓	母岩2		2					4 (2)
	母岩8			5 (1)	3 (3)			1
	その他						1	
B地区 (居住域)		2 (1)	1		1		1	

この石器は木を削る用途に用いられたと考えられます。それから母岩8、別の石ですけれども、このようなちょっと茶色い頁岩という石なんです、それはやっぱり角のところに白い滑らかなポリッシュが見られます。母岩8はですね、このような骨に使った痕跡が残っているということがわかりました。この写真の石器では、ここの部分の刃のところに皮なめしの跡が付いていることがわかりました。次に、居住地から出土した石器です。そちらの石器からも、ここに見られるような使ったことによってできた痕跡が認められました。観察結果を集計するとこんな結果になりました（第1表）。お墓から出た遺物ですけど、母岩8は骨や角によく使われていて、13点中8点が骨や角に使われていました。この括弧の中に入っているのは、その可能性があると考えられた石器の数でして、可能性のあるものも含めると12点になりました。可能性ということで若干怪しい資料ではありますが、それらを含めると、さらに高い割合で骨や角に使われていたことになります。それから母岩2、最初のまだらな模様の石ですが、木による使用痕が2点ほどありましたが、それ以外は全然使っている痕跡を見つけることができなくて、かといって使っていないとは断定できないんですけども、いろいろ表面の傷の状態を見て、4点くらい恐らく全然使っていないと言えるものがありそうで、母岩2はあまり使っていないんですね。母岩8のようなかたや使われているものが副葬されていて、母岩2のような使われていないものも副葬されていることがわかりました。

比較する対象資料として分析したB地区、これは実際に住居があった場所ですが、木に対して使われていたり、骨や角に対して使われていたり、皮に対して使われていたりということで、割といろんな用途が認められた。それから18点のうち5点が使われていたということで、母岩8に比べると使われた頻度が低いということがいえます。たぶん、石を割っても使えそうもないものは、捨ててしまうので、割れた石のなかでいいものだけを使ったということがいえるのかもしれませんが。これらから、何がイイのかというと、母岩8なんかを見ると、非常にたくさん、高い割合で使われていたということで、やはり副葬されている石器は何らかの作業に集中的に使われたことがわかりました。しかも、母岩8のように、同じ石から割った石器を骨や角への同じ作業に使っているということは、何か人を埋葬するときに関係する、骨や角に対する作業に使ったのだろうと思われま。想像をたくましくすれば、骨や角を使った副葬品、骨や角は溶けてなくなってしまって実際には出土していないのですが、何か骨や角で作ったものを一緒に副葬していて、その製作に使った石器も副葬していたのではないかと推測できます。

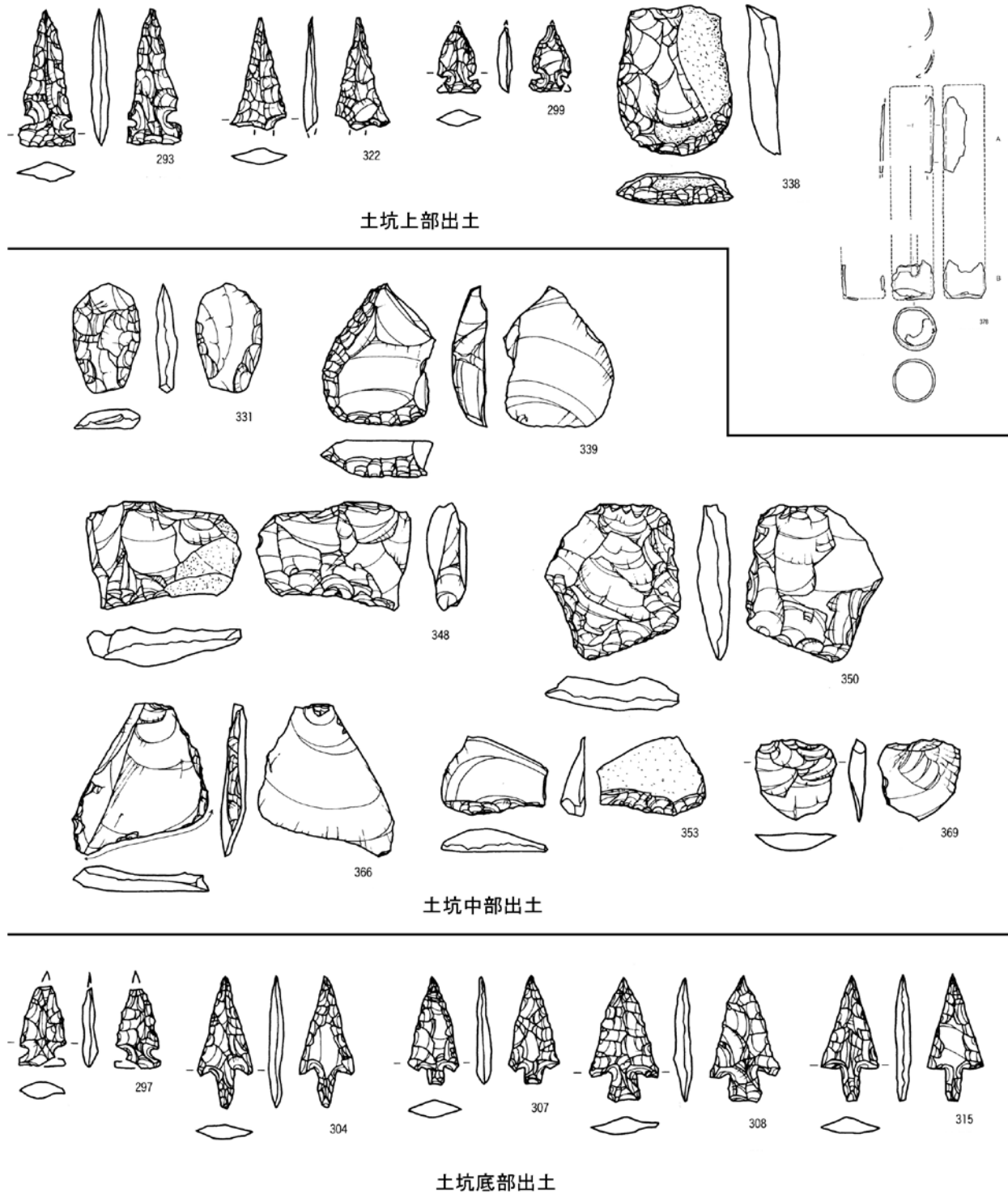
一方、ガラス玉を顕微鏡で観察しますと、ちょっとわかりづらいのですが、こういうところに割れた痕跡が見つかりました。これは打点^{だてん}といいまして、どういうものかということ、ガラス玉を壊すときに打ち割って壊していて、その打ち割る道具があたった場所が打点なのですね。ですので、山元遺跡から見つかったガラス玉は多くが壊れているのですが、これも何か意図的に壊していた可能性がある。実際、私、こんなちっちゃい子供が遊ぶビーズ用のガラス玉を買ってきて、実際に割る実験をしてみたのですが、最近のガラス玉は硬くてなかなか割れなくて、その結果、力が入りすぎてみんな粉々になってしまひかなか上



※石器写真の四角番号は顕微鏡写真撮影位置、黒三角は写真の上方向を示す
 1 母岩2剥片の木への使用痕、2・3：母岩8剥片の骨角の使用痕、4：居住域出土剥片の木の使用痕（写真倍率：3以外100倍、3は200倍）

第3図 石器使用痕分析結果 石器写真の縮尺：2/3

手くいきませんでした。これは本当の昔のやり方で作ったガラス玉で実験しないと駄目なんだなと思いました。ただ、どちらにしてもこのような打点のある割れは、自然ではできにくいはずですので、今のところ、なんらかの割り方で人間が割った、すなわち、人を埋葬するときにガラス玉を割るという行為を、儀礼として行っていたのではないかと考えています。



第4図 1号土坑墓出土遺物と出土状況 図の縮尺：石器1/2、青銅器1/3

3. 遺物出土状況による1号土坑墓における葬送儀礼の推定

次に、遺物の出土状況を見ながら、葬送儀礼についてもうちょっと考えていきたいと思います(第4図)。1号土坑から出てくる遺物は大きく3つのグループに分けられます。一つ目は土坑の底の部分から出てきた遺物、それから真ん中へんから出てきた遺物、最後に上の方から出てきていた遺物の3段階です。で、それを見ていきますと、まず土坑墓の底から出てくるのは、ほとんど完形の石鏃(=矢じり)だけです。ただ残念ながらこの土坑墓は全部発掘していません。底の部分は部分的にしか掘っていないので、石鏃以外の遺物がまだ埋まっている可能性があるのですが、今のところ見つかっているのは、このような完形の石鏃です。この中には、先程の母岩2の資料も含まれています。先程の母岩2はあまり使われていないと申し上げましたが、逆に、母岩2を材料にして作った石鏃が副葬されているということから、やはり土坑墓の真ん中に副葬されている剥片は、母岩8がそうだったように副葬品に関係するものが置かれていたというふうに考えられます。底から出てくる石鏃は、この1点だけ先端欠けていて、これは使った痕跡だと思われます。多分、石鏃が何かに当たったときに欠けたんだろうと思われますが、他のものは非常に先が細く尖っていて全然壊れていません。たぶん、作ってそのまま副葬した、使わずに、副葬するために作ったと言いたいところですが、少なくとも使われていないと言えます。

この、土坑の真ん中ではですね、逆に道具類が全然ないんですね。石鏃みたいな完形品がなくて、みんなこのような剥片、あるいは工具です。で、その工具は搔器、その他には石鏃の素材となった剥片を剥離した石核と考えられる楔形石器、ということで、何か副葬品を作ったりするのに関係しているものが、土坑の真ん中から出土しているわけです。この真ん中辺というのは、墓坑が半分埋まった状態で遺物を入れているか、あるいは、遺体の上に置いているか、そういう状況と考えられます。遺体の上に置いたとすると、遺体が腐ったあとで遺物が下に落ち込むはずですので、どちらかと言えば、ある程度埋まった状態で遺物を入れたんじゃないかな、という気がします。

最後に、墓坑が完全に埋まった後に、その上から遺物を置いたか、撒いたかしたと考えられます。ここから出土する遺物は、ふたたび完成されたものが多いですね。ガラス小玉も、多分ここから出土したと思われますし、今日、何度も話題になっている青銅器も一番上から出ています。

まとめますと、土坑墓底部には遺体脇に石鏃を副葬しました。この石鏃は副葬目的で製作された可能性のある、要は使われていないものばかりです。その次に、遺体上または半埋没状態の土坑墓に副葬品製作に関係する石器類を置くか、撒くかしました。最後に、埋没後の土坑墓の上に、道具類を置くか、撒くかした。青銅器なんかが出ていたり、壊されたガラス小玉があったりするようなことを考えると、そこでも何かお祭的なこと、儀礼を行っていたと思われます。

他にもですね、山元遺跡ではこの遺構外を掘り下げる作業をあまりやっていないんですが、例えば、6号土坑墓では、これは剥片が11点くらい出ているので、やはり、1号土坑墓と同じような埋葬儀礼が行われたのではないかと考えられます。本当は、新潟県内の他の弥生時代の土坑墓から出土している剥片類、それから将来的には、東北地方の山元遺跡と同じ時期の遺跡、北海道の続縄文文化から出土している石器を同じように分析して比較すると、山元遺跡の埋葬がどのような系統のものかわかるのではないかと思います。まだ、そこまで分析しきれていないんです、山元遺跡の墓の分析、葬送儀礼の分析から、遺跡と他の地域との関係、遺跡を営んだ集団の系統などを知る手がかりが得られるのではないかと期待しています。今までの講演と比べると、やや趣の異なったものだったかもしれませんが、私の話は以上です。ご清聴ありがとうございました。

【図の出典】

第1図 国土地理院数値標高モデル10mメッシュを元に作成

基調講演 V 「市民にとっての保存と活用」

文化庁文化財部記念物課主任調査官

ねぎた よしお
禰宜田 佳男

はじめに

こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました文化庁記念物課の禰宜田と申します。

先ほどから滝沢さんから「畿内地域は遠い存在だ」と言われておりますけれども、私、生まれは畿内地域の兵庫県芦屋市で、大阪で仕事をして、箱根の山を越えてしまって現在文化庁で仕事をさせていただいています。今日は、東京から新潟にやってきました。

本年度は、なぜか新潟でお話をする機会が重なりまして、これまで上越市そして新潟市で、西日本や近畿の弥生時代社会についての話をさせていただきました。だんだん北上してまいりまして、今日はこの村上市でもお話をさせていただくという機会を与えられています。高地性集落は？とか埋葬儀礼は？とかでもお話ししたいことはあるのですが、これまでの講演者の方々とは少し内容が異なりまして、与えられました課題は、これから山元遺跡をどのようにしていったらいいのか？についてです。このことについて問題提起をさせていただこうということで、30分間お時間を頂戴したいと思います。

お話はパワーポイントを使ってさせていただきます。また、文章（51・52頁）を書かせていただきますので、これにつきましては、お帰りになってからお読みになっていただければありがたいです。

1. 埋蔵文化財とは？史跡とは？

それでは、本題のほうに移らせていただきます。村上市の山元遺跡が史跡になりました。

最初に、埋蔵文化財、遺跡、史跡がそれぞれどういうものかということから話を始めたいと思います。ここにおられる皆さん方の多くは、ご存じのことと思いますがご容赦ください。

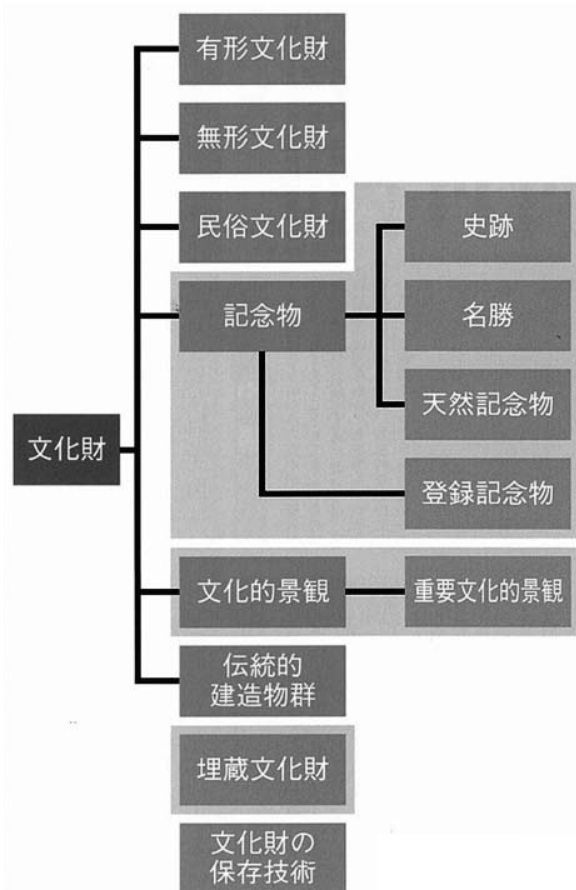
まずは、埋蔵文化財すなわち遺跡です。埋蔵文化財は、遺跡のなかで行政が保護する対象としたものです。そういう点では、遺跡の方が埋蔵文化財よりも数は多いという関係になります。これらは、ふだんは土地の下にあって見えない、発掘しないと内容というのはわからないという性質をもっています。普段見慣れた土地の下から、発掘調査したために突然新たに発見されるということになるのです。

第1図は、宮城県だんこしの壇の越遺跡というところで発掘調査すると、古代の役所の跡が出てきた場面です。子供たちが立っているところが柱の跡です。門があって、柵さくがあって、建物があつたという写真です。お城とか、古墳とかは地上にあって、見ただけでぱっとわかるものもあります。村上城も見たらわかるのですが、そういう遺跡は珍しいんだということを確認しておきたいと思います。

埋蔵文化財は「土地に埋蔵されている文化財」と定義されています。第2図に文化財の類型を示しましたが、文化財という括りのなかで、有形文化財、無形文化財から文化的景観までは指定・選定されますと永久に現状保存されるというものです。しかしながら埋蔵文化財は文化財の仲間に入っていないんです。ちなみに史跡は記念物の中に含まれます。



第1図 宮城県壇の越遺跡（加美町教委提供）



第2図 文化財の分類



第3図 鹿児島県広田遺跡 (南種子町教委提供)



第4図 兵庫県北青木遺跡 (神戸市教委提供)

もう少し話を進めますが、遺跡は発掘調査をしてみないと価値、内容がわかりません。鹿児島県^{ひろた}広田遺跡は古墳時代のお墓で、砂地から良好な状態で人骨が出てきました(第3図)。人骨とともに、白く見えるのは貝で作られたアクセサリです。こういうものが発見されるわけです。突然。場合によっては、銅^{どう}鐸が出てくることもあります。これは兵庫県の北青木遺跡と書いて「きたおおぎ」遺跡と読みます(第4図)。

では、史跡というのは何かということです。史跡とは「我が国にとって、遺跡すなわち貝塚、集落跡、城跡、古墳など遺跡のうちで歴史上、学術上価値の高いもの」のことです。埋蔵文化財というのは全国で46万8,668カ所あります。恐らくここにご参加のいただいている何名かの方はその上に住んでおられるだろうと思います。ところがですね、史跡というのは1,784カ所しかないんです。埋蔵文化財のうち、0.4%に満たないのです。史跡というのは、非常に価値の高いものなんだということです。

2. 改めて山元遺跡の重要性について

山元遺跡の価値ですが、これにつきましては、私もレジュメのところに書いておきました。

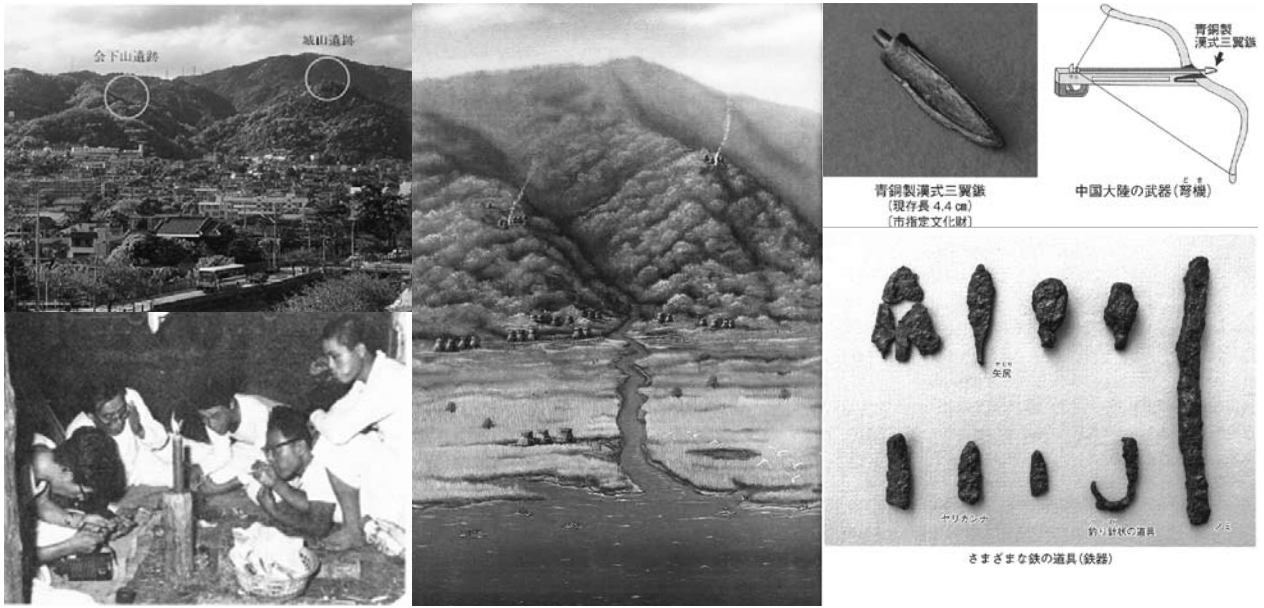
国の審議会では、特徴として次の3つが指摘されました。

一つ目として北陸文化圏と東北文化圏の接点に位置する最北の高地性集落であるということ。

二つ目として居住域と墓域がセットで存在していること。

三つ目として先ほどから話題になっています遺物ですが、北海道・東北、そして北陸さらには東海地域など非常に広範囲の地域の集団とかかわりがあるとみなされること。

これらを総合して、弥生時代の社会を考える上で極めて重要であることから史跡としての価値があると高く評価されました。



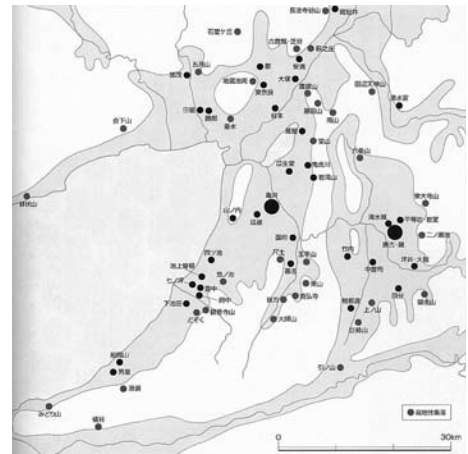
第5図 兵庫県会下山遺跡 (芦屋市教委2006)

ここで、高地性集落の本場といえる西日本の高地性集落の写
 真をお見せしたいなと思います。これは兵庫県の会下山遺跡です(第
 5図)。高い山の上にあるんですが、これには環濠はないです。
 昔の調査風景の写真です。1960年代の発掘で、ご存知の方も多
 いと思いますが、これが石野博信先生の若い頃の姿でね。復元イラ
 スト図で高地性集落の姿を想像してください。このような中国製
 の青銅製の矢じりが出てきます。鉄器も出てきており、この遺跡
 からは、当時の貴重品が出てくるんです。

第6図は、近畿地方の主な弥生時代の遺跡の分布図ですけれど
 も、高地性集落が点々と存在していました。滝沢さんの講演にも
 ありましたけども、瀬戸内にもたくさんの高地性集落があります。
 その中で有名なのが香川県の紫雲出山遺跡です。山の上に集落を作
 って、山の上から海を見おろすという立地です(第7図)。こうい
 うところにわざわざ集落を構えることがあったということです。何で
 作られたのかは、これからのシンポジウムの中で議論がされるだ
 ろうと思います。高地性集落の性格を考える上では、まず眺望が
 重要ですね。西日本では、その確保が、集落の成立と大きくかか
 わっているのではないのかなと思います。

日本の高地性集落を少し整理いたしますと、鉄器・青銅器の供給
 が始まった時期に出現するわけです。高地性集落の出現と社会的な
 緊張関係があったことが指摘されてきましたが、これについて賛否
 があります。私は基本的には何らかの形での社会的な緊張関係と
 かかわるものだろうと思っています。ただし、低地の集落との関係
 などによって、高地性集落の役割には差があったと考えていま
 す。

それですね、高地性集落のこれまでの指定例ですが、新潟県古津
 八幡山遺跡、群馬で中瀬観音山遺跡が史跡です。それから新潟県で



第6図 近畿地方弥生集落分布図
 (大阪府立弥生文化博物館2001)



第7図 香川県紫雲出山遺跡
 (筆者撮影)

は先ほどの^{ひだ}斐太遺跡群のなかの斐太遺跡が高地性の環濠集落が史跡です。先ほどの会下山遺跡は史跡ですが、高地性集落の指定は東日本の方が進んでいるというのが現状です。特に新潟県に指定例が多く、担当者の方々が頑張っておられるというということです。

ところで、最初に聞くべきだったんですけども、山元遺跡に上がられた方は何人ぐらいいらっしゃいますか？ありがとうございます。結構いらっしゃいますね。まだ上がっておられない方は、ぜひ上がっていただきたいと思います。でも、勝手に上がったらいけないのかな？上がる時は先ほど発表された吉井さんと一緒じゃないといけないのかもしれませんが、けれども、遺跡というのは現地に行かないと、その良さはわかりませんから、これからいろいろ機会をつくって遺跡に上がってほしいなと思います。

3. 史跡の活用事例について

ここからは、いくつかの史跡の活用事例の紹介に移ります。

まずは、福岡県の^{たくまいしはたけ}田熊石畑遺跡です（第8図）。先ほども佐賀県の^{よしのがり}吉野ケ里遺跡の話が少し出たかと思えますけれども、ここでは弥生時代のお墓ができたんです。吉野ケ里遺跡からは、武器形青銅器が15点出てきたんですけども、この遺跡からは、それを上回る16点が出てきました。地域住民の方々は、「吉野ケ里を越える遺跡がわが市にはある、すごいじゃないか」ということで、住民がこの遺跡保存を希望され、行政もその遺跡の重要性を認め、駅近くの一等地だったのですが、史跡になったんですね。住民が声をあげたこともあって、「じゃあ史跡をどうするばい」ということで検討会が開催されました。検討会の主役は住民です。後ろに立っている人たちが市の教育委員会の方なのです。「あなたたちには何か聞きたいことがあったら聞くから、後ろにいといて」というような感じの会です。教育委員会の職員の立場からしたら、非常にありがたい気持ちだったと思います。

協議の結果、何をしたかという、自らが芝生を植えることを決め、当日は子供からお年寄りまで500人以上が集まったと聞いています。お子さんもいれば、おとうさん・おかあさんがいて、おじいちゃん・おばあちゃんがいる。市民全体で芝生植えをしました。市民が植えた残りは業者さんをお願いをし、現在では芝生公園になって園路を配置し、古代体験やイベントなど「お祭り」をやっているわけですね。写真は狩猟体験風景です。イノシシは多分動かないと思いますが、矢を打っているところです。機織りとか、いろんな古代人の技術の体験をしています。



第8図 福岡県田熊石畑遺跡（宗像市教委提供）

もう一つ紹介しましょう。第9図は兵庫県の淡路島の五斗長垣内遺跡です。邪馬台国の話じゃないんですけども、近畿の人たちは弥生時代の中心は大和、奈良だと思っていたわけですね。そういうなかで、弥生時代の鉄器というのは、当時にとってのハイテクな技術製品だったのです。そういうハイテクの技術を必要とする大規模な鉄器製作遺跡が近畿で初めて発見されたのです。地元の方々は驚きました。そんなすごい遺跡が淡路にあるんだということで、指定前から「五斗長垣内遺跡活用意見交換会、こんなんであえんちゃう」と銘打った会議を開催し住民主体で意見を交わしていました。写真の人がリーダーですが、もちろん、「お祭り」をおこなって地域おこしに遺跡を使おうということになりました。

ところで、新潟県では鉄器はつくっていないという話もありましたが、いやいや、新潟県でもつくっている可能性はありますよ。これは新潟県の滝沢さんとか、沢田さんをお願いをするしかないんですけど、鉄器製作遺跡は見つけていただきたいと思っています。

話を戻します。写真をみていただくと、遺跡を通して世代間の交流の場になっていることがお分かりになっていただけるでしょう。これが重要なのです。写真では若い人たちと年寄りが話をしています。時間はないのですが、若い女性、何か難しい顔をしています。もっているのは遺跡の近くでとれたアケビ。アケビを知らないわけですね。で、おばちゃんが、女性に「おいしいのよ」とかの話をしていて、別の人がその状況を写真に撮ろうとしているんですね。「遺跡」とその周辺でとれた「アケビ」を通して世代間の交流がおこなわれたのです。

次の写真はイベント風景です。淡路島の人、とくに五斗長の人は「五斗長のタマネギは甘い」というんですね。その「甘い」タマネギの早食い競争をやっているわけです。市の担当者のご招待。食べる前はこうやって笑顔でいい顔しています。これは始まってしばらくたった時の顔。ちょっと、微妙な顔をしていますね。苦い、辛い、そういうような顔だと思えます。市の職員としてそれは決していえません。とにかく、和やかな雰囲気です。特産品と遺跡をつなげていくわけですね。

そうすると、新潟ならお米。お米よりもお酒でしょうか。これから特産品を使って何かすることがあってもいいでしょう。これは市長さん、教育長さんはじめ、多くの方々に考えてもらわないといけないのではないかと思います。いずれにしても、小林さんも先ほど言われていますが、イベントをやりながらちゃんと遺跡を理解してもらうこともやるのが重要です。



第9図 兵庫県五斗長垣内遺跡（左1枚：淡路市教委2011、右4枚：筆者撮影）

第10図は先ほども紹介した広田遺跡です。遺跡は海に面した砂丘上に古墳時代のお墓があるんです。貝のアクセサリーをつけた人骨が多数発見された共同墓地遺跡です。その背後に種子島ロケット発射台があります。ドラマ「下町ロケット」で何回も映っていたかと思います。

さて、遺跡と発射台の間に岩があるわけですが、これ本来はひとつにくっついていたんでしょう。ところが、その一部が地殻変動か何かで離れてしまったのです。それによって、広田遺跡に立つと発射台が目視できるんです。これは奇跡的なことだと思っています。ロケットの発射の時には遺跡から離れなければならないので、遺跡からロケット発射風景を見ることはできないんですけども、南種子の町長さんは「過去と未来をつなぐ」というコンセプトで地域づくりをしています。

広田遺跡では今回のような史跡指定の際に指定記念シンポジウムを実施しましたが、非常に良かったです。小学生は伝統芸能を踊り、中学生は遺跡の勉強をして成果を紹介しました。このなかには、遺跡が好きになって、東京の大学で考古学を専攻している人がいると聞いています。そういうような出会いを作ることもあるんですね。さっき、人骨には貝製のアクセサリーがあった話をしました。高校生は、自分たちでアクセサリーをつくって、広田人になってファッションショーを計画しました。エコバックもつくったりしています。

シンポジウムでは、広田遺跡の内容を紹介する講演会、アカデミックな部分に加えて子供たちを主役にした企画もあったのです。これを凝縮して一日で全部やるシンポジウムなかなかありません。大きくない町ですけども、体育館がいっぱいになる来場者があり、私自身、記憶に残るシンポジウムです。今後も、こうした子供が主役となるような企画を村上市でも工夫してほしいところです。

第11図は先ほど紹介した会下山遺跡ですが、初日の出ツアーをしている場面です（1）。これなんかも山元遺跡で出来たらいいですね。それから、維持管理の一環で草刈りなんかもこれからやっていく必要があるでしょう。草刈りと学習会を一緒にするというもおこなわれています（2）。掘立柱建物なんかも、市民の手でつくっているのですが、これも山元遺跡で、できるかもしれません（3）



第10図 鹿児島県広田遺跡（南種子町教委提供）

4. これからの山元遺跡—行政に期待すること、皆さんに期待すること—

全国各地にはいろんな形で整備、活用がされています。このレジュメにも書いておりましたが、答えは一つではないんですね。これは指定された遺跡の内容と遺跡の場所という物理的な条件があります。ですが、何より重要なことは、首長や市の担当の方々、住民の皆様方、そしてここに登壇していただいている先生方。この三者が連携してこれからどうするかを考えていくことです。

繰り返しますが、遺跡の活用、答えは一つではないのです。一つ一つ違います。それぞれの置かれた状況の中で取り組んでいくということです。

特に、これから我々が考えなければならないことは、人口減になっていくという現実です。今までならば史跡になったら、建物などを復元して人に来てもらうというような整備が主流でした。それが、場合に

よっては観光地となることもあります。実際に吉野ヶ里遺跡でありますとか、青森県の三内丸山遺跡には観光客が行くかもしれません。でもそれは、少数例です。それよりも、地域の宝として、地元住民の方々が誇りと思えるような取り組みをおこなっていただきたいと思っています。

繰り返しになりますが、史跡は国の宝であり、地域の宝です。山元遺跡では建物跡は復元しないと見えません。なかなか目に見えない「宝物」をどのように見せるのか。指定地で何ができるのかです。

整備をしていくうえでハード、ソフトの両面から考えていく必要があるでしょう。その際に、人口がこれから減っていくなかで、持続可能な史跡整備、史跡の維持管理を模索する必要があるということです。今後の整備のあり方はこれまでとは異なる理念が必要なのかもしれません。これまでの史跡整備は、右肩上がりの社会において文化庁と地方公共団体が連携を図りながら作り上げてきました。時代が変わって、また新たな理念が必要になってくるのではないかと思います。それも、文化庁と地方公共団体の連携は不可欠ですが、住民の皆さんの意見も重要になってくるように思います。山元遺跡は史跡になりました。これから多くの住民の方々と一緒になって、この遺跡を地域の宝として、地域の文化的遺産として活用していただきたいです。そのときに、どういうことができるのかというのは、皆様方と行政の方々とが一緒になって考えていくことです。弥生時代の遺跡だから単にと言ったら怒られますが、他と同じようにただ竪穴建物を復元するというだけでは、「魂」が入らないのではないかと思います。復元するなら、それは業者に委託するのか、あるいは自分たちで復元するのかという選択肢があると思います。そういう一つ一つの問題を、みんなで考えていくことが重要だと思います。

山元遺跡は、土地の公有化がなされていませんから、その状態で何をするかを考えていかなければなりません。全く何もしなかったら、それは史跡になっても内容が全く分からないことになり、森と全然変わらないことになります。新潟県内はじめ全国には、弥生集落などの整備例があります。そうした例を見ながら今後の社会のあり方を推測しつつ具体的な取り組みを考えていただきたいと思っています。

5. 市民に愛される山元遺跡のために

そういう中で、まずは村上市民に山元遺跡を知ってもらうことが不可欠です。そのためには、レジメにキャッチコピーも必要と書きました。たとえば、「日本海最北の高地性集落」。ほかの史跡ではなかなかキャッチコピーを生み出すことが難しく、頭を痛めているところがあります。ひょっとしたらこれはキャッチコピーになるかもしれません。でも、もっと「刺激的な」キャッチコピーを考えていただきたいと思



第11図 会下山遺跡における活用事業（芦屋市教委提供）

います。私がしめしたものは、あまりにもこれは当たり前のようなキャッチコピーです。やはり、皆さん方が考えてください。

そして、イベントや学校との連携でこの遺跡をまずは市民に知ってもらうことが必要です。

と同時に、市民の方々に村上市という場が歴史上、多くの役割があったことを知ってもらうことが重要です。今までの話にもありましたがここは磐舟柵^{いわふねのさく}の推定地に近いです。大和政権における日本海側の「ボーダー（境界）」の地です。そういうところで、弥生時代に、天王山式^{てんのうやま}という東北系の土器を出す高地性の環濠集落^{かんごう}という西日本的な集落が営まれたのです。長期にわたって、歴史的に「ボーダー」としての役割があったと考えられます。それから、村上市にはお城が2つ既に指定されているわけですね。高地性集落も山城という考え方があります。時代を越えてお城の史跡3つが村上市にはあるということです。これも素晴らしいことだと思うのです。

日本海最北の弥生時代の高地性集落の特性を生かした利活用。これまでの視点と新たな視点で、最先端に位置してほしいです。お年寄りには山に上がるのは大変です。大変ですけども健康のために遺跡に上がることがあってもいいと思います。そのうえで弥生時代の歴史を語ることがあってもいいですし、直接には史跡の内容とはかかわらないこと、昔話などを含めて、できるといいと思うんですね。すでに、やってられるのかも知れませんが、その場合はお許しを。前例にとらわれず、やっていただきたいです。

おわりに

何ができるのか、何をするのか、それは皆さん方の力が全てで、試行錯誤していただきたいと思います。これから村上市の教育委員会の職員の方と皆さんで山元遺跡を考えていきましょう。そして、県も国も、そして今日来られている大学等の研究者の方々も、できる限りの支援はさせていただきたいと思います。よろしく願いいたします。以上で、私の話は終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

【引用文献】

芦屋市教育委員会 2006 『会下山遺跡から邪馬台国へ 高地性集落の謎と激動の弥生社会』

淡路市教育委員会 2011 『五斗長垣内遺跡発掘調査報告書』

大阪府立弥生文化博物館 2001 『弥生都市は語る—環濠からのメッセージ—』

市民にとっての保存と活用

禰宜田佳男（文化庁記念物課）

村上市に所在する、弥生時代後期の高地性環濠集落である山元遺跡が、平成28年10月3日、史跡に指定されました。その経緯は、村上市教育委員会の吉井さんが詳しくお話しされるでしょうから省略しますが、村上市が重要な遺跡だという意見を国に提出し、国の審議会で審議され、史跡としてふさわしい内容の遺跡であるという評価を受け、指定になったのです。

1 史跡とは？

史跡とは何なのでしょう？

史跡とは、文化財保護法によると「我が国にとって歴史上または学術上価値の高いもの」で、それを国が認め、永久に保存していくことが決まった遺跡のことです。

今、「遺跡」という言葉を使いました。遺跡というのは、人々が生活した村、水田や畑、そして古墳などの墓、お城や役所など、私たちの先人が大地に残した足跡（そくせき）のことで、行政的には埋蔵文化財（以下「遺跡」と呼んでいます。全国に約468,700箇所もありますが、遺跡だからと言ってそれが現地で保存されるわけではありません。毎年8,000件の発掘調査が実施されていますが、その原因の大半は、道路建設やマンション建設などの開発事業です。調査が終了すると、ほとんどの場合、遺跡は工事によって・破壊・消滅してしまうのです。

先にも述べましたが、遺跡の中で、「非常に重要なもの」だけが史跡に指定され、現地で保存されることになるのです。史跡は全国に約1,780箇所ほどで、遺跡の0.4%に満たず、とくに重要であるだけでなく、たいへん希少なもののなのです。

2 史跡になるとどうなるのか？

では、史跡に指定されると、どうなるのでしょうか？

史跡になると、史跡の所在する地方公共団体が未来永劫、保存し活用していくこととなります。山元遺跡については、意見書を出した村上市がその責務をもつこととなります。

史跡に指定され、もっとも重要なことは遺構の保存です。山の上に眠る弥生時代の集落を後世に残していくことです。

史跡になりますと、指定された土地を勝手に掘り起こしたりすることは原則としてできなくなります。もちろん、史跡指定の前に土地所有者に史跡に指定することの同意を得ていますので、土地所有者は了解済みの話です。

協議のなかで、遺構が壊されない範囲で、田んぼや畑での農作業をできるようにすることや、住宅建設を認めることで同意をもらう場合もあります。このように、史跡の価値が損なわれることがないように、さまざまな手法を駆使して史跡を保存する手だてがとられているのです。

史跡になると、多くの場合は、地元の市町村が指定した土地を購入し、整備をします。山元遺跡の場合、公有化は今後の課題です。

3 山元遺跡の価値とは？

さて、山元遺跡の価値はどこにあるのでしょうか？

国の審議会では、①北陸文化圏と東北文化圏の接点に位置する最北の高地性集落である、②居住域と墓域がセットで遺存している、③遺物から北海道・東北から東海地域と広範囲の地域の集団と関わりがある、ということ弥生時代社会を知る上で重要であることが評価されました。

今日のシンポジウムでは、専門の方々がいろんな話されますので、遺跡の多様な価値が明らかになることでしよう。

高地性集落研究は、水田稲作が始まった弥生時代に、「なぜ、わざわざ高い土地に集落を営んだのか」という疑問から研究が始まりました。その機能としては、①社会的緊張関係に対応するため見晴らしのいい高地に集落を構えた（そもそも『魏志倭人伝』に記載のある「倭国大乱」に対応した集落ということで提起されました。その後、弥生土器の編年観に変化がおり、現在、山元遺跡の時期は「倭国大乱」の時期にあたっています）、②水田稲作ではなく、狩猟採集とくに採集経済に重点をおいた縄文的な生活を営む必要から高地に集落を移した、③物資流通の流通を管理する必要から高地に集落を移した、などの考え方があります。

山元遺跡の出現は、これらのどれかによるのか、あるいは別の要因なのか。大きな謎です。今日は、ほかのパネリスト方のご意見を楽しみにして村上市にきました。

なお、山元遺跡の活用を考えたときには遺跡からの「眺望」が大きな価値と考えられます。

4 いまの史跡は？

全国には1,780を超える史跡がありますが、どのようになっているのでしょうか？

史跡が活用されているあり方は様々です。人々が利用するケースということであえて類型化すると、(1)休みの日ははじめ多くの市民が集う史跡、(2)いつ行っても閑散としている史跡、(3)観光コースに入って、市民以外にも多くの人が訪れる史跡、になりますでしょうか。

(3)は稀なケースで、(2)があることは残念ですが現実です。重要なことは、山元遺跡に、多くの方々が来る機会を作っていただきたいですね。それには様々な場合が考えられます。

一つ目は遺跡そのものを知る機会を作ること。これはもっとも基礎的ですが重要なことです。今日のような場は重要です。二つ目は休日など弁当を作って親子・夫婦で時間を過ごすような場をすること。そうした「日常」の空間になる空間はいいですね。三つ目は年に何回か、遺跡を使っての「特別」な空間にすること。最近では、「〇〇祭り」のようなイベントをおこなっている史跡は増えてきています。なかには、教育委員会以外の組織が主催してイベントが開催される場合があります。市長がイベントに参加するところも出てきています。

史跡は本来、地域のなかに息づいていることが重要です。地域住民の憩いの場となる。何らかの語らいの場となる。史跡にとってもっとも「幸せな」姿ではないでしょうか？そうしたなかで、「特別」な場として使われることがあってもいいように思います。

ほかの方法もあるでしょう。とくに、考古学や遺跡にあまり関心のない方々への働きかけをどうするのか？これが非常に重要です。今日のような学術的な企画は重要ですが、子どもが主役となるような企画もぜひ、実施していただきたいところです。

世間では文化財は「保存から活用」にと言われていますが、「保存」は以前からやっています。文化財の保護には「保存」と「活用」のバランスが重要です。

5 人口減をむかえるなかでの、史跡山元遺跡の将来は？

山元遺跡は、今後どうなっていくのでしょうか？

最北の高地性集落、東北文化圏と北陸文化圏の接点にあるという点は、ほかにはない特徴です。岩船の地を見下ろす場所に存在することには何らかの意味があるよではないでしょうか。この遺跡には弥生時代にとどまらない、大きな「意味」があるようにも思います。

史跡を保存し活用するため、「まちづくり」の施策のなかに位置づけている地方公共団体が増えてきています。村上市にはすでに、平林城跡、村上城跡が史跡になっています。ほかにも名勝や天然記念物の指定もありますから、文化財の宝庫と言えましょう。

私は「まちづくり」の専門家ではありませんが、「まちづくり」には、地域固有の「顔」＝特色をいかに「作る」かが重要な課題です。JRの駅舎も同じ、駅前の土地の利活用も同じというなかにあって、いま、注目されているのが地域の「歴史」であり「文化」「文化財」です。箱物を作るという以前の手法とは異なった観点での「まちづくり」が求められています。

我が国は人口減の社会に入りました。社会全体が大きく構造変革を強いられていくことが予想される中で、「まちづくり」も、これまでとは違う観点が求められることでしょう。史跡整備も同じでしょう。

山元遺跡の将来をどうするか？市がイニシアチブを持つことは言うまでもありません。でも、行政だけでうまくいくことはありません。重要なのは、市民皆さんの力です。この遺跡を保存し活用していくには、市民の皆様への力は不可欠なのです。私の報告では、ほかの史跡の事例の一部を紹介しますので、こうした事例を参考に、山元遺跡の将来をお考えいただきたいと考えています。

持続可能な維持管理を進めていくために、どのような「整備」があるのか。遺跡の内容がわかり、地域住民に愛され、国民にも注目される史跡。村上市・新潟県・市民の皆さん、そして文化庁が緊密な連携を図りつつ、知恵を絞っていきましょう。

おわりに

私はある遺跡が史跡指定になった場合、「オンリーワンの史跡を目指してください」と言っています。弥生集落の史跡は、静岡県登呂遺跡や佐賀県吉野ヶ里遺跡のように全国的に著名な史跡があります。新潟県内においても、古津八幡山遺跡、斐太遺跡群（斐太遺跡・吹上遺跡・かまふた釜蓋遺跡）、しもやち下谷地遺跡が指定になっています。これらの遺跡は、二つとして同じものはありません。みんな、個性的です。

繰り返しになりますが、山元遺跡の将来については、今後、地元の方々が決めていただくことになります。そのためにはわかりやすいキャッチコピーとキーワードも重要です。皆さんで聞いてうただければいいのですが、後者には、「眺望」「岩船」「山城」「小学校」などはあるのかなあと考えています。

私たちの世代に史跡になった山元遺跡。子ども・孫の代はもちろん、1,000年、2,000年先の子孫につなげる橋渡しをしなくてはなりません。それぞれの立場で、できることを！

※ページ数の関係から事務局で書式を変更しました。

パネルディスカッション

コーディネーター：滝沢規朗

パネリスト：石川日出志・小林 克・沢田 敦・禰宜田佳男・吉井雅勇

滝沢 司会を仰せつかりました滝沢です。非常にすばらしいパネリストに囲まれて、うまくお話を引き出せるかどうか、甚だ不安なんです。務めさせていただきますので、よろしく願いいたします。座って進めさせていただきます。

本日早い時間から小刻みにご講演をさせていただいたんですけれども、大体皆様方1回ご講演されるのに1時間から1時間半お話しされるメンバーの方ばかりに30分、非常に短い時間でですね、まとめていただき、まだまだお話し足りないことがたくさんあるんだと思われ。お腹の中にいろいろ持たれていると思いますので、少しでも言い忘れないようにやっていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

まず、シンポジウムのテーマはですね、山元遺跡は何を語るのかということですので、最終的にですね、何を語る、どうやって活用されていけばいいのかというようなことが結論として出て、位置づけが出るというふうに思っています。

最初に、山元遺跡そのものについて語る。会場の皆様方からもたくさん質問をいただいております。高いところにある、水田に不向きな高所にあるというようなことが強調された。じゃ、実際にですね、水田は近くでやっていたのかどうかですね、生業はどうだったとかいうようなことからお話を進めさせていただきたいと思っております。

まず、吉井さんに質問なんですけれども、近くで水田をやっているのかとか、生業はどうだったのか、現段階でのお考えをお話しさせていただきたいと思っております。

吉井 村上市の吉井です。会場からのご質問ですが、皆様ご存知のとおり、弥生時代は稲作の時代です。山元遺跡は弥生時代の終わりのほうですので、稲を作っていたと思います。ところが、丘陵の上という米作り不向きな土地のためか、発掘調査で米を作った痕跡は全く認められませんでした。ただ、下のほう、遺跡のふもと周辺の平地では水田耕作していたと思います。残念ながら、調査を行っていないので、稲作の存在を考古学的に証明することはできません。

ほかの生業についてですが、発掘調査でその痕跡を示

すようなものは出ていません。しかし、例えば、先ほど沢田さんのご講演にあった皮をなめすとかですね、縄文来の生業である狩猟もやっていたでしょうし、木の実を採ったり山芋を掘ったりとかですね、採集も行ってたと思います。小林さんから助測の助はサケですよというお話がありました。もちろんサケ漁も含めた漁労もやっていたと思います。しかし、それらを直接示すようなものは残念ながら見つからない状況です。

滝沢 次に、石器の細かい分析をされた沢田さん。まだまだこれから分析していくとわかることがたくさんある段階でのお考えについて、もう一度お聞かせください。

沢田 生業に関してですけれども、居住域の資料を一部ではありますが分析しましたが、今のところ、はっきりと稲作農耕に関するような石器の痕跡は見つかっていません。だからと言って、稲作をしていないということにはならないのですが、狩猟採集の割合はかなり高かったのだと思います。ただし、使用痕は見つかりませんでした。稲作もしていただろうと思っております。

滝沢 阿賀野川より南の遺跡からすると、狩猟の割合が高いというようなイメージですか。

沢田 この山元遺跡よりも一段階前の弥生時代中頃に、石包丁に似た石器が新潟でもかなり出土してしまっていて、それらも私は顕微鏡で分析したことがあるのですが、確かに稲科植物に対して使っているという結果が出ました。この近くだと旧荒川町の道端遺跡^{みちばた}で、山元遺跡の前の段階の稲作の証拠が見つかるのはいるんですね。ところが、逆に山元遺跡の時期のほうが稲作の証拠は少ないんです。

石川 弥生時代の話になると、必ず水田、稲作のことが出てきます。かつては教科書なんかもそうでしたけれども、弥生時代の部分を見ると、米づくりのことは出てこない。ようやく、西日本でも20~30年前からいろいろな調査・研究成果が出てきた結果、かなり大規模な水田経営はしているんですが、それ以外にもいろんなものを食べていることが分かってきました。ドングリ類なども食べています。米づくりは、ご存じのように、夏から秋口に台風がやってくるので、非常に危険な面がある。そういう危険を回避、あるいは対処するためにも、縄文時代以来のドングリ類の利用もしています。いろんなも

のを組み合わせて四季折々の食事を組み立てている。

それでは、なぜ山元遺跡で農具が出ないのか。田んぼを耕す道具は木でできています。当時は刃先まで木です。刃先に鉄を装着する場合がありますが、ほとんど木だけです。木の道具というのは、山元遺跡のような台地や丘陵の遺跡だとまず残らない。

では耕地、つまり水田をどこに想定するかですが、私は、山元遺跡のすぐ南側の平野部に想定します。問題は、かつてあった岩船潟の広さをどの程度と推定するかです。現在の地形図から復元すると、岩船潟は非常に広い範囲が想定されると思うんですね、我々も皆さんも。だから、田んぼをつくるスペースは、相当に狭いだらうとイメージされると思います。でもそうなんですか。新発田市、合併前の旧加治川村に青田遺跡^{あおた}という遺跡があります。発掘で、縄文時代晩期末と平安時代、9世紀の村の跡が見つかりました。実はここは、江戸時代に干拓された紫雲寺潟^{しうんじがた}のなかにあります。なぜそんなことが起こったのかというと、9世紀半ばの貞観年間^{じょうがん}に大地震が起きて地盤沈下して紫雲寺潟ができて、平安時代の村が沈んでしまったのです。岩船潟一帯も、そのような地盤沈下が起きて、江戸時代には岩船潟の範囲が広がっていた。弥生時代の頃はもっと狭くて、水田をつくれる範囲はもっと広がった、と私は推測をしています。

滝沢 ありがとうございます。まだ痕跡としては見つからないんですけども、山元遺跡に住んでいた集落の人々は、下ですね、平地のほうで水田をやっていた可能性が想像できるというふうなことかと思えます。

小林さんに今度お聞きしたい。午前中のご発言の中で、稲作はなかなか定着しなかったというような趣旨のご発言があったと思うんですけど、弥生時代東北、北海道で稲作の普及はどのようにでしょうか。

小林 まず、北海道は除いてですね。北海道の稲作は近世からといわれていますので…。じゃ本州はどうかというと、縄文時代後期以降、弥生時代の前半、中期ぐらいまでというのは、弥生海退（北陸海退）と言われているんですね。海面も1mないしは2mぐらい低かった。それから、弥生時代の終わり頃から古墳時代の始まりぐらいに、気温が上昇して海進期があったと言われています（藤2002、2003）。気温が上昇して低い土地に海水が入ってくる。例えば青森県の砂沢遺跡^{すなざわ}ですとか、あるいは田舎館遺跡^{なかにだて}、さらには秋田県でも八郎潟の周辺、こういったところで水田や籾痕土器など稲作痕跡が残されているというのは、それは前期から中期の段階なんですね。後期にはこうした場所は海水が侵入し稲作適地ではなくなっているのではないのでしょうか？したがって弥生時代

後期になると、米づくりというのは恐らくは主要な生業ではなくなってきている、というふうに思います。

滝沢 今稲作についてお伺いしたところで、山元遺跡に住んでいた弥生人は、稲作している可能性があるというふうなご意見ということでよろしいでしょうか。

次に、同じようなご質問いただいているんですけども、一番答えづらい質問です。山元遺跡で集落を営んだ人は、どこから来たのですか。東北のほうから南下してきたのか、それとも南のほうから来たのか。これは、よくご質問受けるのですが、一番答えに困ると思います。これはまずは吉井さんの方からお願いします。

吉井 皆様のご意見と同じかわかりませんが、私は、もともと村上周辺の地域に住んでいた人たちが山元遺跡をつくったと思います。その人々が、いろんな試みをもって、いろんな地域と交流することによって、他地域の土器や貴重な文物を所有したのかなと思っています。

滝沢 じゃ、石川先生。弥生中期の後半から山元には人が生活痕跡を残しているというようなことだと思うんですけども、先生のお考えはいかがでしょうか。

石川 吉井さんと同じ考えです。山元遺跡の地にずっと住んでいるわけじゃないとは思いますがね。山元遺跡では、弥生中期の終わり、つまり紀元前1世紀後半から、後期後半の紀元後2世紀にかけて200年ほど断続的に村が営まれたと思います。その前はどこにいたかということ、下越の平野部や丘陵地帯一帯に住んでいただろうと思います。上越方面とは違って、弥生時代といっても数百年も村が継続する状況は、下越にはなかったと思います。数十年から100年ほどは継続しても、そのあとムラの場所を移動するようです。しかし移動する範囲は下越を越えることはないでしょう。そういう意味では地元の人に住んだという言い方になります。

滝沢 ありがとうございます。2人意見が一致したので、この場ではそういうことで話を進めさせていただきたいと思います。山元遺跡の集落の立地ですとか、生業とかについては何となくご理解いただけたかと思えます。

次に、使っている貴重な文物の流通がどうだとか、どういう作り方をしていたとかというのも結構ご質問いただいているので、これについていろいろまたお聞きしていきたいと思います。

まず、ガラス小玉。きれいなガラス小玉が新潟県の中で一番いっぱい出ているわけですけども、どういう加工法で作られたのでしょうか、というご質問をいただいております。これは、じゃあ吉井さんに。

吉井 多量のガラス小玉を発見し、報告をまとめられたのは滝沢さんですが、司会者ということで私がかわりに

お答えいたします。ガラス小玉はいろんな作り方があり、例えば鋳型に入れて玉を作るという方法もあります。山元遺跡のものはですね、はじめにガラス管を作って、それを引き伸ばして細くなったものを切っていくという方法です。なぜわかるかという、先ほど沢田さんから、現在のガラスは緻密なために割ると粉々になってしまうというお話がありました。弥生のガラス玉は写真にあったように、中に気泡が入っているんですね。その気泡は、ガラス管を伸ばすことによってそれと同じ方向に並行して伸びるわけです。「引き伸ばし法」と呼ばれています。もし違ったら訂正お願いします。

滝沢 先生方、異論があったらお願いします。作り方については、吉井さんのほうからご説明いただいたとおりです。こういう作り方がされていて、ほかには山元遺跡では鉄器と、青銅器の筒形銅製品と呼ばれているものが出てくるわけですが、非常に貴重なものです。新潟県では弥生時代後期の後半ぐらいに鉄器が見つかる事例は増えるんですけども、それでも山元遺跡は分布も一番北のほう、もうちょっと北にも出ているところがあるんですけど（村上市堂の前遺跡）。新潟県の青銅製品については、弥生時代のもので発掘調査で出土したのは、山元遺跡が初めてであります。極めて貴重なこういった文物が、どういった経路でこの地に置かれたかとかいうご質問をいただいています。

きょうは、文化庁として、史跡の活用ということでお話を絞っていただいたんですけども、禰宜田主任から流通がどんな状態であったのかお考えをお聞かせいただければと思います。

禰宜田 日本海地域の遺跡からは、何が出てくるかわからないんです。先般も滋賀県では中国系の銅剣の鋳型が出土しています。やはり海流の影響ですかね。それをうまく使ってリレー式ではなく拠点、拠点に物資が流通するんじゃないですかね。昼休みに「ハンゲルのペットボトルみたいのが来ますか？」と、教育長さんや課長さんに聞いたら、「入ってくる」と言われました。そういうことを含めると、日本海側は朝鮮半島に近いという地理的特性もあって、弥生時代には地域によっては日本海的首長が大陸の首長と直接交流をしていたことは十分に考えられるんじゃないかなと思っています。特に弥生時代後期の丹後（現在の京都府の日本海側）は、そういう可能性が非常に高いんじゃないかなと思っています。もちろん、丹後から大陸に直接行くというのではなく、日本海沿岸を伝ってのことだろうと思います。その丹後の鉄器が畿内地域に入ってくることも考えられます。そして、丹後にもたらされた鉄器が、日本海のさらに東方にもた

らされたのだと想像します。各地に点的にはないでしょうか。例えば、丹後からお隣の福井ではなくて、もっと遠い距離を移動するというようなこともあったかもしれません。そうした関係性の実態を考える上で鍵を握るのが、午前中にお話のあった長野県の根塚遺跡のあの鉄剣であるのかなというふうに思っています。長野となると、新潟の沿岸部の遺跡は中継地として重要な意味をもっていた可能性があります。

滝沢 石川先生はいかがでしょうか。

石川 禰宜田先生が、いや、大親友だから禰宜田さんって呼びますね。禰宜田さんが言われるように、北近畿の丹後から山陰の鳥取・島根県域あたりまで、鉄器や不思議な遺物を出土する遺跡がたくさんあります。その中に、準構造船という船の断片も見つかっています。さらに面白いのは、箱の側板だろうと思いますが、板にひっかき線で描いた船の絵があるんです。しかも船が何艘もぞろっと並んでいる、あたかも沖合の日本海を並んで進む船団を描いているようなんです。弥生後期には大量の鉄器や鉄素材が朝鮮半島から日本列島各地に大量に流通しています。鉄は重量が相当にかさみますので、その流通には当然船が必要です。最近日本海側で鉄器の出土数が多いことがすごく注目されています。

準構造船というのは、縄文時代のような丸木舟よりも一回り大きくするために、船の底の部分は木をくりぬくんですが、それを前後につないだり、両側に板を継ぎ足します。丸木舟だと幅が1 mぐらいが限度ですが、準構造船なら、幅も2倍程度にできますし、長さも増します。そういう縄文時代と異なる構造の船ができてきています。絵に描かれているのはみなその手の船です。

滝沢 貴重な部分の流通については、やはり日本海はかなり重要で、やはりしっかりした船で、こちらにもたらされてきているんだろうということかと思います。また、細かい分析はこれで終わりじゃなくてですね、引き続き計画を立てながら、もうちょっとしっかりしたお話ができるように吉井さんにはまたいろいろと調査研究のほうを進めていただければと思っております。

いろいろ文物の話を見せていただいて、いよいよ倭国大乱ということで、いろいろ午前中からお話が出ていたかと思うんですけども、このことについて質問もたくさんいただいております。環濠は本当に人が攻めてくるための防御の濠なのか。単純にですね、近くにいる野獣、動物ですね、そういったものから村人を守るために掘られたものじゃないかというご意見もいただいております。石川先生そのあたりいかがでしょうか。

石川 イノシシなどが村に入り込むを防ぐための可能

性も十分考えられるんですが、どの時期でも環濠が掘られているならば、そのように考えられるでしょう。でも、環濠がつくられるのは弥生時代に限られていますし、高地性集落だともっと時期も地域も限られます。山元の村ですと、村の存続時期の後半である弥生後期後半、およそ紀元前1世紀後半から2世紀になって環濠が掘られています。もしイノシシなどを防ぐのであれば最初から作っているのではないのでしょうか。なぜか村の後半期だけ、倭国大乱の時代辺りに限られるんです。

でも、だからといって、つねに争乱があったとか、実際に戦いがあったとまでは言えないと思います。防御性を意図していた、ということです。外敵は誰なのかとか、どこなのかとかは難しいですけど。

滝沢 外敵の侵入に備えた防御ということでしょうか。

石川 具体的にどの村どうしの争いだとか、西日本が攻めてくるとか、そういうことじゃなくて、ですね。遠隔地どうしの戦いというよりも近隣の村どうしで争いが起こるかもしれないという意識から防御するのだと思います。『後漢書』に「倭国大乱」とあるので、西日本のどこかで政治的な厳しい争いがあったとは思いますが、それが北陸のある地域まで及んだであろうとは思いますが、村上のこの地までもその争乱に直に巻き込まれたとまでは考えません。

滝沢 このことについては、非常に集中的にご質問をいただいております、緊張状況はどの程度のものだったかというようなご質問をいただいているんですけども、西日本のほうの状況について、榎垣田さんからちょっとお伺いしたいんですけども、いかがでしょうか。

榎垣田 緊張状況があったことを示す考古学的な成果として、ひとつは、墓から石鏃の刺さった人骨が出てくるとか多数の石鏃が出土することがあります。集落では、滋賀県しもの下之郷遺跡という弥生時代中期の滋賀県にある環濠集落なんですけども、集落の入り口が発見されました。その入り口付近には掘立柱建物があって、そのあたりから多くの打製石鏃などが出てきているという事例があるんですね。先ほどからよくお話に出てきました佐原真先生は、環濠の入り口で戦いがあったという解釈をされています。考古学的事実としては、入り口、建物、多くの打製石鏃が検出されたということです。建物の性格をどう考えるかというのは難しいですが、入り口の見張り小屋のようなものであったのかも知れません。皆様方もお考えいただければと思います。これが1つ。

それと、あと弥生時代の社会の緊張関係の原因ですが、人口増による水田を営む上での水争い、土地争いというようなことが考えられてきました。いろんな時期に緊張

関係というものがあったと思いますが、そうしたなかで、注目しているのは、中国・朝鮮半島での政治的な緊張関係が少なくとも近畿までには及んできていたんじゃないかと考えられることです。高地性集落については滝沢さんが説明されましたけれども、ひとつは弥生時代の中期から後期にかけて、西暦紀元前後の時期に瀬戸内海沿岸中心に高地性集落がたくさんできます。もうひとつは弥生時代の「倭国大乱」と言われる時期、2世紀後半を境に北部九州地域と畿内地域の関係が逆転するのですが、そのころには高地性集落が北陸にも広がります。新潟の高地性集落はまさにこの時期です。紀元前後は前漢から後漢への移行期、2世紀後半は後漢の衰退期です。そういう時期に列島において高地性集落ができるということです。中国における緊張関係が、列島にも及んでいた可能性があるということは興味深いと思っています。

滝沢 ありがとうございます。

たて続けで申し訳ないのですが、大陸の関係ということで、少しお話しいただきたいと思います。また、戦いの要因は何なのかというようなことも合わせて伺いたいということでご見解を。

榎垣田 「わかりません」と言ったら、パネリストとして失格なのですが難しい質問です。繰り返しになりますが、弥生時代中期まで、中国と政治的な関係を結んでいたのは北部九州地域の勢力だけです。大陸に混乱が生じると北部九州地域にもその影響が及び、ストレートじゃないんでしょうけれども何らかの形で、「どうも西のほうで、何か混乱がある」というような情報が伝わってくるようなことがあったんじゃないかと思うんですね。そういう際に考えられてきたのが鉄器をめぐっての戦争。これについてはこれまでも想定されてきました。鉄器は重要ですから、例えば北部九州勢力が鉄器の流通をとめるようなことをしたら、北部九州以外の勢力は困るわけですね、近畿も困るし、当然北陸も困るわけです。「倭国大乱」については、そうした鉄器の入手をめぐっての争いが原因で戦争があったという見解がありますが、そういう経済的な戦争はなかったという意見もあって簡単ではありません。列島における鉄器普及の画期となる時期が中国の政治的混乱期と重なる点は興味深いと思っています。いずれにしても、中国、朝鮮半島を起点にして、日本列島では、九州、近畿、そして最後は新潟さらには会津盆地まで含めた広い範囲に及ぶネットワークが出来上がっていたのではないかと思います。それを媒介したのが鉄器ではないかとも思っています。この点については、石川先生とか、皆さんはわかりませんが、私はそう思っているということです。

滝沢 石川先生いかがでしょうか。

石川 段々司会者に顔を向けたくなくなってきました。昔、佐原真という先生がよく言っていました、考古学者というのは「世間では石橋をたたいて渡るというけど、考古学者はそうではいかん。石橋をたたいても渡らない。それぐらいの覚悟でやらないといけない」と言っていました。その割には、佐原先生はかなり大胆にいろんなことを言っていましたけど（笑）。

やっぱり鉄の問題って物すごく重要です。物を切ったり加工したりする道具は、それまではずっと石の道具でした。弥生時代後期になると、突然石の道具がなくなります。紀元前の弥生中期と紀元後の弥生後期とでは石器の出土数は桁違いです。紀元前1世紀の石器の数を100だとしたら、弥生時代後期、紀元後1世紀になると多分100分の1ぐらいになるんじゃないでしょうか。じゃ、人間が100分の1になったかということ、そんなことはないんです。ですから、それにかわる道具としては鉄器以外にない。それら大量の鉄器はどこから供給されたかということ、朝鮮半島、現在の韓国の釜山釜山から慶州慶州あたりの一帯です。そこでつくられた鉄素材と鉄器が日本列島に流通し、それを加工していろんな道具をつくっていきます。ですから、鉄器の流通の首根っこを押さえられたらもう生活を維持できない。だから、鉄の流通が争いが起こる最も重要な引き金だ、緊張の要素だという学説があります。私も結構それは有力だと受け止めています。ただし、学界ではそうした説にはかなり批判的な意見が多いですね。榎垣さんは鉄器研究の専門家なんですが、かなり最近厳しい意見が出されていますが、私は後ろから支えているつもりです（笑）。

ただ、もう一つ大事なのは考古学で、大陸との政治的な関係をどう見るか、という点です。漢の武帝武帝は紀元前108年に現在の平城一帯平城一帯に楽浪郡という、東夷世界への進出拠点を設けます。九州の人たちは、そこに毎年のように貢ぎ物を持って往来しているという記事が『漢書』に出ています。北部九州の弥生時代中期後半、つまり紀元前1世紀の遺跡からは、銅鏡など前漢の文物が多数出土します。そうした文物以上のことを証明するのはなかなか難しいんですが、その際に様々な政治性も受け入れ始めている可能性はあるでしょう。西日本、特に北部九州の有力者たちは、大陸の情報を相当入手しているんです。特に紀元後になると、皇帝に朝貢に行く、つまり政治的関係を獲得する動きが本格化する。それぐらい大陸の情報に通じています。日本列島の中にある倭人の国々ももう少し統合して大陸と対抗できるような、あるいは連携できるような仕組みづくりをつくらなきゃいけない

という、政治的な判断もあるかもしれない。その際に主導権争いが出てくる可能性があるとも考えられます。考古学者も、いくつもの可能性を用意して、その中からどれが一番妥当かを検討していった方がいいと思います。石橋をたくさんたたいてどう渡るかを考えるということだと思います。

滝沢 ありがとうございます。非常にお答えにくいことにつきまして、お二人の先生方から貴重なご意見をいただきました。倭国大乱の要因について、ここでは鉄が大きな要因の一つになる、ということで受けとめていただき、更なる追求については、まだまだ発掘を通して得られるいろんな要素の分析が更に必要になってくるだろうというふう考えております。

山元遺跡の考古学的な中身についてはですね、これぐらいにさせていただきまして、きょうは小林さんからも榎垣さんからもいろいろ活用についてのご提案とか、ご指導をいただいたところかと思います。国の史跡になった山元遺跡をどう生かしていくか、ということも極めて大事で、何を語るのかということについては、更に重要なものかと思っています。

まずは、沢田さんからお伺いしたいんですけども、新潟県内の遺跡の活用事例について、どういう遺跡があって、どんなことをしているのかを教えていただければと思います。

沢田 山元遺跡と同じ弥生時代の遺跡ですと、今日も何度も名前が出てきましたが、新潟市古津八幡山遺跡古津八幡山遺跡があります。ここは史跡公園として整備されていて、ガイダンス施設、小規模な資料館ですけど、見に来る人への史跡の説明だとか、出土品の一部だとか、そういうものを展示する施設が併設されています。

もう一つは、古津八幡山遺跡の場合はですね、非常に背景的学習に重点を置いているんです。小学生とか一般の方がここに来て、当時の生活にかかわることを体験できます。史跡のすぐそばに実験水田があって、そこで米づくり、できるだけ当時に近い形の米づくりを体験できる活動をしています。体験活動の点で新潟県内で先進的な事例だろうと思います。

縄文時代の遺跡ですと、長岡の火焰土器火焰土器が最初に見つかったことで有名な馬高遺跡馬高遺跡であるとか、糸魚川市の長者ヶ原遺跡長者ヶ原遺跡、また同じ弥生時代にもどるけれども上越市の釜蓋遺跡釜蓋遺跡、そういったところが活用事業を重視しています。一つ言えるのは、どこも史跡の整備をしているんですが、最近の傾向としては、体験にすごく力を入れているところが多いです。体験もやり始めるとすごく大変ですし、どこでも同じプログラムをやってしまいがちで、

そこが問題なのですが、山元遺跡でもやはり体験的な活動をやっていくべきなのだろうと思います。考えていてもいいのかなど。

滝沢 小林さんに質問したいと思うのですが、東北全般ではどういった活用がなされているのかということについてお聞かせいただければと思うんですが。

小林 山元遺跡と同じような弥生時代の史跡指定されている遺跡ですけれども、やはり田舎館遺跡いなかだてでしょうか。近くに道の駅があり、水田に色の違う稲で絵を表現する「田んぼアート」が毎年行われています。ただ、活用ということになりますと、まだまだ新潟県で指定されている古津八幡山遺跡、釜蓋遺跡などが参考になるのではないのでしょうか？何せ東北では弥生時代相当の指定の数が少な過ぎます。これはきょう私のシンポジウムの話で申し上げましたが、同じ弥生文化の中で捉え切れるのかというのが大きな課題だと思います。多分、そこるところから変えていかないとなりません。一体何が重要なのか、指定は国がするわけですから、国にとって文化財としてどういう立場で評価してゆくかが常に付きまといまいます。そういう意味でも山元遺跡の指定がなされたことと、そしてこれからの整備・活用は今後文化財が例えば歴史教育のなかで、どのように生かされていくべきなのかということを考える上で、非常に重要なことだと思います。

滝沢 ありがとうございます。

非常に大事なものが国の史跡に指定される、というふうに認識していただければと思います。しかし、国史跡の活用となると難しい。東北・北海道ですとか、東海地方でもですね、どういったような整備があるのか、教えてください。

石川 弥生時代の遺跡を史跡指定する中で活用して行くというのは、関東や各地でいくつかの事例がありますが、まだ十分ではありません。例えば、静岡市に国の特別史跡・登呂遺跡とろがあります。弥生時代後期の遺跡です。そこでは、遺跡博物館が併設されるだけでなく、弥生時代の住居や倉庫・宗教的高床建物も、田んぼも復元しています。弥生時代の景観を復元していますが、周りは住宅地ですので、遺跡と周囲の住宅地の間に樹木を配置することで、ゾーニングをしています。その上で、稲作体験や火起こし体験など、さまざまな体験学習の場を提供しています。山元遺跡と同じく弥生時代後期の環濠集落である神奈川県綾瀬市神崎遺跡かんざきでは、ガイダンス施設というミニ博物館を設置しましたが、遺跡に建物などは復元していません。活用法はこれから具体化することになるでしょう。

山元遺跡でも同じものができるかということ、多分そう

ではない。先ほど禰宜田さんがその遺跡の特色を生かしたオンリーワンの、この遺跡の特色を生かした活用が必要だと言われました。その通りだと思います。よそ様の物まねはしないほうがいいでしょう。例えばキャッチコピーとても大事ですが、この遺跡の場合は何かということです。山元遺跡に登れば、新潟平野、特に阿賀野川北の弥生の世界が見える。この立地環境こそが、この遺跡がつくられた第1の理由です。

それからもう一つは、北陸あるいは西日本との交流、そして北方世界との交流。その双方がこの山元遺跡を介して繋がっている。交流の中継地点になっている。この広域交流というのも一つのキーワードでしょう。この2つが考古学的なキャッチコピーの候補となり得るかと思っています。

じゃあ、この遺跡を保存活用する時に、考古学的な、歴史的な意味付けだけでいいのかということ、私はそうではないと思います。地元の方々にとっては、日々の生活の中での裏山であり、里山でしょう。各地の史跡公園での活用実際に結構多いんですが、地元の方が散歩コースにしています。里山の自然が保存され、そこに歴史が生きる場として、それを毎日のように空気のように身体に活かす。史跡を活用される方のなかで、恐らくは一番多いのがこうした方々なのではないかと思っています。そういう意味で、日常が一番大事です。

それから、古津八幡山遺跡でやっているのは、植物や動物・昆虫を探したり、楽しんだりする。今は、どこの山も杉林になったりして、放置された山が多くなっていますけれども、当時の景観を復元すると、いろんな自然が戻ってきます。それを楽しむのもいいでしょう。

いろんな考古学や歴史だけじゃない、もっと広い活用の仕方がある。そこにも目を向けていただいたほうがいいんじゃないかと思っています。

滝沢 まずは、史跡としての本質をしっかりと押さえて、他分野の方々と連携しつつ、さまざまな活動をしていくのがいいのかなと思いつつ、聞かせていただきました。

あと禰宜田主任からも、先ほどいろんな事例をお示しいただいて、聞かせていただいたところなんですけども、お話の中でちょっと足りなかったとか、忘れちゃったとか、まだこういうのがあるんですよというのがあったら、ぜひ教えていただければと思うんですけども。

禰宜田 今の石川さんのお話で、南を向けば新潟平野、北を向けば東北が見えるという話がありました。しかも、あそこは山です。高地性集落の特性は「眺望の良さ」にあります。ですから、南北だけではなく、周囲を見渡せるようにしていただきたいですね。木を切って、切れる

のかどうかちょっとわからないんですけども、地権者の方との調整は不可欠ですが。列島最北の高地性環濠集落で、東北文化圏と北陸文化圏の接点ということが史跡指定の理由の第一がこれですから、あそこの山に登ればそれが実感できるような取り組み、これをぜひやっていただきたいと思います。

それと、きょうのシンポジウムは^{かんのうひがし}神納東小学校でおこなわれています。このなかに卒業生の方はいますか？卒業生はいない。お子さま、お孫さんが通っている方は？・・・いない。そうしますと、やはり村上市の史跡ですから、村上市の学校は山元遺跡に行くような機会を作ってほしいと思うんです。特にこの神納東小学校と山元遺跡はこんなに接しているわけですから、同じ教育委員会ですし、学校の先生と連携を図り、子供たちが山元遺跡を知るような機会を作って欲しいですね。全国1,784個所の史跡のなかで、自分の校庭から見るができる、いや教室からも見るができるわけですね。そういう学校っておそらく10もないように思います。そういうことを生かしながら、この遺跡が自分たちの誇りなんだということを感じていただきたいです。そのためにも、いろんな取り組みをしていただきたいと思います。

さっきの石川さんのほうから日常的、非日常的ということばがありました。日常、重要です。非日常、これも重要です。この両方を使った取り組みをすることではないでしょうか。後者としては、せっかくなので、「山元祭り」のようなものを学校とコラボレーションして、学校と遺跡を使って何かをやるのはいかがでしょうか。年に1回か2回でしょうかね。地域の人たちがそこに集まって、老若男女いろんな人が山元遺跡を語ってはいかがでしょう。車座になって何かをするのもいいですね。子どもたちが勉強したことの報告をするとか遺跡についての企画が一つ。しかし、それだけでは物足りないですね。「遊び」がないと。皆さん方は鮭を食べ飽きておられるのでしょうか。やはり、イベントに「食」は重要です。お米もたくさんとれるのでしょうか。地域の特産品をふるまうようなこともしてほしいですね。

このように、日常的に山元遺跡を利活用する場と、非日常的に利活用する場を作っていただきたいですね。そして、さらに重要なこと、それは、そうした企画を実行するためには人がいます。村上市にはですね、吉井さん以外にもう一人いるんです。ちょっと出てきてください。どこにいるの？大野さん。今から若い人を紹介しますから、決意表明してもらいます。

大野 村上市の大野と申します。今日は駐車場係のため汚い格好で申しわけありません。私から一言決意表明と

いうことで。以前、山元遺跡について、地域の方にですね、ご説明をする機会があったのですが、そのときの私の説明が不十分だったために、山元遺跡の何がすごいのかというのがよくわからないという声をいくつかいただきました。山元遺跡の近くに村上城という中近世のお城があって、地元ではお城山と呼ばれています。お城山に登ると目で見てすごいというような視覚的な驚きと感動があります。山元遺跡も先ほどお話があったように、弥生のときから続いて見える景色があります。皆さん、今日シンポジウムに参加されて、山元遺跡の重要性についてわかっていただけたと思いますが、まだまだこれから情報を発信し続けなければいけないと今日改めて思いましたので、皆さんこれからもどうぞよろしく願いいたします。

禰亘田 とにかく教育委員会の人の顔が見えないといけません。この2人の顔を皆様方から覚えていただくことが重要です。大野さん。まちで会うたらね、「こんにちは」とか声かけるんですよ。「山元遺跡をよろしく願います」ということも重要です。こうして、市の教育委員会の方々と皆様方が近い関係になって欲しいです。この遺跡と一緒に考えることをこれからも続けていただければいいんじゃないでしょうか。以上でございます。

滝沢 ありがとうございます。大野さんのほうからも力強い決意表明をいただきました。今日のシンポジウムで終わりではなく、今日から始まるという意識で、どんどん情報を発信していただければと思います。

いろいろ活用についてもお話をいただいていたところで、予定が3時で、残り10分となってしまいました。今日は、遠いところからですが、皆さん来ていただいて、様々な情報ですとか、貴重なご意見、ご指導をいただきました。最後に、パネリストの皆様から、村上市に望むことを提言下さい。まず沢田さんから。

沢田 望むことですが、先ほど小林さんからお話しがありましたけども、山元遺跡は北限の高地性集落であるわけですが、その時期の北の文化の南限でもあるんです。だから、山元遺跡のような遺跡ができた訳でして、逆にこういう場所はここしかないんです、ある文化の北限とある文化の南限であるということ。是非、それを活かしていただきたいと思います。また、先ほど日常という言葉もありましたけれども、日頃から楽しくやっていただきたいということも感じます。整備というものは、非常に難しく堅苦しい感じを受けますし、もちろんきちんと整備しなきゃいけない部分もあるんですが、ぜひ活用自体を楽しんで、遺跡や地域を活性化し

ていただきたいなと思います。抽象的な話になってしまいました。

滝沢 小林さん、お願いします。

小林 きょうの私の話は紀元前からスタートしているんですが、子供たちにはまず教科書を使って歴史を学ばせるわけです。そのときにですね、自分たちが住んでいる場所そこに国の史跡があるのは、これは非常に大きな出来事であり、先ほど禰亘田さんから話がありましたように、まさにこの小学校で学ぶ子供たちは、脇に山元遺跡があって、これを歴史の授業の中で意識しないことはまず絶対にあり得ない話です。山元遺跡は子供たちが自分たちにとって一体何か、ということをやっと考え続けられるそういう場所なわけです。ぜひ村上市さん、あるいは県も文化庁もそうでしょうけれども、この小学校を巣立っていく子供たちが誇れるような史跡、そういった整備の形をご期待申し上げたいと思います。

滝沢 石川先生、お願いします。

石川 村上市役所や村上市民の方々をお願いしたいことを3点お話しさせて下さい。

1点目は、まず情報発信を強化するようお願いします。昔は、例えば村上城跡を知ろうとすると、どうしても図書館に行ったんでしょうけど、今はネットの時代です。図書館には正確で重要な情報を確保して頂きたいですが、しかしネットでも基本的な情報を全国に発信して頂きたい。全部情報を出す必要はありません。そして、だんだん深く調べていけるような、そういう仕組みづくりをぜひ進めていただきたいと思います。そうすると、じゃあ現地に行ってみようという市外の方が来てくれることになると思います。

2点目。この遺跡は、新潟平野がよく見えますね。砂丘もさらに日本海方面までも広く見渡せる場所です。山元遺跡に行ったときに、この眺望のよさを体感できる状況をぜひつくり出していただきたい。すぐにあそこに何か施設を復元するかという前に、この遺跡の第一の魅力を手感できる状況をつくり出していただきたい。

3点目。この史跡の整備、活用というのは、ものすごく息の長い事業です。ですから、本当皆さん地元の方を含めてお知恵を出していただいて、無理のない、しかし息の長いおもしろい取り組みをつくり出していただきたい。それを市のスタッフの方は全面的に支えていただきたい、指導していただきたいというふうに思います。

禰亘田 石川さんが全部言ってくださいました。その中で情報発信というのは重要で特に、継続的な情報発信が必要だと思っています。そうしないと、忘れ去られてしまいます。ですから、出てきた遺物もですね、これから

まだまだ再検討するなど、やれることがあるんだろうと思うんですね。調査・研究をして、何か新しいことがわかれば、それは新聞発表して展示をすることはしていただきたいですね。また、整備にあたっては発掘調査をする場所もひょっとしたらあるかもしれません。発掘調査をしたら、その成果は市民の方々にお示しすることは必須です。史跡を掘るといってなんでも、なかなか簡単じゃないかもしれませんが、場合によっては、市民の方々と一緒に調査することも検討してはどうでしょうか。それが実現できれば、そのこと自体も、新聞発表すると思います。

くり返しになりますが、山元遺跡を使っているんなことをしていただき、それを情報を発信していただきたいです。そのためには市にお願いすることは人と予算です。課長が下を向いていますね。教育長は出ていかれましたね。とにかく、そうしたことを実行するためには、適切な人と予算、これは必要です。このことについては今日のシンポジウムの皆さんの熱気を含めて、市長さんまで上げていっていただきたいというふうに思います。文化庁も当然のことながらそのサポートいたします。財政的支援と技術的な支援、これはぜひやらせていただきます。皆さん方と行政と学識経験者が一体となって、この山元遺跡を盛り上げていきましょう！よろしくをお願いします！

滝沢 ありがとうございます。

今パネリストとして4名の方々からいろいろご指導いただきました。皆様方には調査の時点からですね、ご指導いただいております、加えて多くの方々の協力を得てですね、山元遺跡は保存ができて、国の史跡になることができました。今日は、国土交通省の関係者の方いらっしゃらないと思うんですが、開発事業者であります国土交通省の協力というのも間違いなく得られて、こういうような姿になっているということかと思えます。これを受けてですね、最後は吉井さんのほうから決意表明をいただいて閉じたいと思います。

吉井 決意表明ではありませんが、一言述べさせていただきます。

今日5名の講師の方から、いろんな切り口でお話いただきました。実はですね、この神納東小学校を会場にすることはパネリストの方からの提案でした。はじめ、私どもは、別の会場を使う予定でしたが、諸事情により使えなくなりました。そのタイミングで、石川先生や沢田さんとお会いする機会がありまして、相談したら地元へのアピールと今後の活用を考えて、ここ神納東小学校でやってみてはどうかということで、今日に至ったわけで

す。その地元を会場とした本日のシンポジウムで、禰宜田主任のご講演や最後のシンポジウムで紹介いただいた「史跡の活用」について、普段私たち担当者は、研修会などでよく聞いていることなんです。今日そのお話を地元の皆様に聞いていただくことができたことがとてもよかった。活用について具体的なイメージをもってもらえたのかなと思っています。

現在、村上市は村上城、平林城を整備しています。ここでも同じことですが、やはり地元の皆様に興味をもってもらっていただき、私たち行政がお手伝いをして。ぜひともですね、この地区、この学区、村上市民の方々が主体になって、先ほど禰宜田主任のご講演にあったような勉強会を含めた、そういう活動を続けていくことができれば、息の長い、無理をしないおもしろい活用ができるのかなと思っています。

整備の手法はたくさんありますが、パネリストの皆さんがおっしゃったように、この遺跡の上に登って周りを

見ることが一番の遺跡理解につながる、せっかく残った遺跡ですので、そこをぜひ体感していただきたいと思っています。それを目指してですね、関係機関、地権者の方々のご理解・ご協力を得て、市としまして、…別に私は市の代表じゃありませんけれども、担当としまして、力を入れていきたいと思っています。先ほど司会の滝沢さんからお話があったように、これが終わりではありません。10月3日に史跡に指定され、これからぜひ市民の皆様方、地元の皆様方のお知恵とお力を借りながら、また私もお手伝いするという、そういう立場で整備、活用していくという考えでおりますので、ぜひともよろしくお願いいたします。

滝沢 司会に不慣れでなかなかうまくいかなかったところもありましたが、吉井さんに最後きっちり決意表明をしていただいたところで、このパネルディスカッションは閉じさせていただきたいと思っています。



左から、滝沢規朗、小林 克、禰宜田佳男、石川日出志、澤田 敦、吉井雅勇

シンポジウム参加者アンケート集計結果

- ・回答数 33人
- ・年齢 20代：1人、30代：1人、40代：4人、50代：5人、60代：13人、70代以上：9人
- ・性別 男：27人、女：6人

1. 本シンポジウムに参加して、どのような感想をお持ちですか（4～1点で採点してください）

- 面白い 4点：21人、3点：11人、2点：0人、1点：0人、無回答：1人
 - 期待通り 4点：17人、3点：15人、2点：0人、1点：0人、無回答：1人
 - 内容が十分 4点：13人、3点：16人、2点：1人、1点：0人、無回答：3人
 - わかりやすい 4点：15人、3点：16人、2点：0人、1点：0人、無回答：2人
- 「わからない言葉をきちんと説明してくれて良かった」
「地元では初めてのものであり、わかりやすかった」

2. 本シンポジウムに参加して、新たな発見や感動がありましたか

- あった 32人
 - わからない 1人
 - なかった 0人
- 「母が来たがっていましたが用事があり来れませんでした。色々勉強したいと思いました」
「地域にこういう遺跡があるとは知らなかった。名前だけは知っていたけど新しい発見になりました」

3. 本シンポジウムで改善すべき点はありましたか

- 「(当日配布資料で) 文字の細かい資料は読めません」
- 「同じ会場で遺物の展示もしてほしかった」
- 「もっと宣伝した方が良い」
- 「講師の話の語尾が聞き取れないことがあった」
- 「講演者にスポットライトを。マイクは手持ちではなくボタン式マイクを使った方が良い」
- 「講師各自の持ち時間が少なく、内容が本題に入っていないと思った」
- 「講師が多すぎて時間が少なく限られた内容になってしまっていたので、講師を少なくしも持ち時間を多くした方が良くと思う。また、半日コースにすれば途中退席者が少なくなるのでは」
- 「一人当たりの講演時間が不足だと思いました。最低1時間は必要かと」
- 「会場には椅子と机があると良いと思います」
- 「会場に山元遺跡のパネル写真や遺物の展示などがあるとよかったですと思いました」

4. 今後どのようなシンポジウム、講座を期待しますか

- 「磐舟柵とその時代～村上を中心に」
- 「地元の歴史に興味が高まる内容をお願いします」
- 「今まで通りで良いと思います」
- 「古代史、縄文→弥生への移行時の人種の交わり・変化について」

- 「複数の地域を比べるような内容」
- 「村上市を活性化に導くこと。切り口は何だろう」
- 「地域にある史跡等の説明会」
- 「戦国武将本庄繁長についてのシンポジウム」
- 「市内にある史跡のシンポジウム」
- 「新しい遺跡の報告」
- 「鉄の流通の歩み」
- 「中世や近世の歴史を内容としたもの」

5. 今年度県内で実施された遺跡関係講座などに参加されましたか

初めて：11人、2回目：6人、3回以上：12人、無回答：4人

6. 県内各地で開催されている遺跡発掘調査の現地説明会に参加したことがありますか

ある：23人（1回：3人、2回：5人、3回以上：12人、無回答：3人）

ない：9人

無回答：1人

7. 今後、遺跡発掘調査現地説明会に参加したいと思いますか

参加したい：24人

参加したいが情報が少ない：8人

参加したくない：0人

無回答：1人

8. その他に何かご意見がありましたらお願いします

「未調査の遺跡がたくさんあると思いますが、どんどん調査していただきたい」

「有料でも良いから、暖かい湯茶のサービスが欲しかった」

「人を集める方法、PRの力、行こうよ！をどうしたら、誘わせる工夫は何か」

「小学校高学年・中学生も授業の一環になるような構成（わかりやすさ）」

「遅く来た方や席を一度立たれた方は、先生が交代される時などに席につかれた方が良いと思います。受付の方が一言その旨を伝えていただければ良かったと思います」

「市内各遺跡の講演会をお願いしたい。講師の方の質が大変高く、大いにためになりました」

「事前に参加者数（市内外）を把握しているのであれば、昼食（地元土産含む）の準備を企画したらどうでしょうか。以前柏崎市で報告会が開催された際、お稲荷、コーヒー、その他が用意されていました」

「『いきいき県民カレッジ』と連携したら参加者も多くなるのでは」

「暖房が利用されたり芳情がうれしい。良かった。資料も良かった。」

「このような講座を今後も開催していただきたいと思います。今日は来て良かったと思いました」

「山元遺跡を含む村上市内の史跡のキャッチフレーズを募集したらどうでしょう」

「市庁舎に『山元遺跡、国指定なる！！』の垂れ幕をかけていいのではないかな。最初のPRが大切であり、市民に知らしめるには効果的」

「当地域のまちづくり協議会のメンバーの会場手伝いがあってもよかったのでは」

シンポジウム

山元遺跡は何を語るのか 一邪馬台国前夜の村上一
記録集

発行日 平成30年(2018)3月20日

編集発行 村上市教育委員会

〒958-0292 新潟県村上市岩沢5611

bunka-m@city.murakami.lg.jp

印刷 株式会社フォト・スタンプ新潟